

---

# 魔法少女リリカルなのはA's ~ 混沌を身に宿す者 ~

アーク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはA・S ～混沌を身に宿す者～

### 【Nコード】

N6768P

### 【作者名】

アーク

### 【あらすじ】

かつて、神羅に身体を改造され、その時の記憶に縛られてしまった男、【ヴィンセント・ヴァレンタイン】。彼は全ての過去と因縁に決着を着けるため、身に宿した【カオス】を覚醒させ【オメガ】と激闘を繰り広げた。激闘の末、巻き起こった大爆発により、彼は平行世界に渡ってしまった。そこで出会ったのは、天涯孤独となりながらも前向きに生き続ける一人の少女だった。

## 【プロローグ】（前書き）

初めまして、アークと申します。

この小説は作者の自己満足で出来ています。  
正直言つて駄文です（汗）

また、この作品は

【リリなの】×【DIRGE of CERBERUS】  
の二次創作です。

二次創作が苦手な方はお読みにならない事をお勧めします。

御感想や御意見、質問などは随時お待ちしております。

ただし、抽象・誹謗や暴言など、作者が不愉快だと感じる意見は受け付けません。

以上の事を踏まえた上で御覧ください。

## 【プロローグ】

### 【オメガ】

それは星が終焉を迎える時に現れる、「清き命より生まれしウエポン」。終焉を迎える星の全ての命を集めて宇宙へと旅立つ、星を終わりから始まりへと導く生命の方舟。

### 【カオス】

それは星が終焉を迎える時に現れる、「命の淀みより生まれしウエポン」。星の命を刈り取り、その命をオメガへと導く。

### 【ミッドガル】

かつて政府をも動かした大企業、「神羅カンパニー」の本拠地であり、世界第一の商業都市。

三年前、かつての英雄【セフィロス】によって導かれたメテオにより壊滅的な被害を受けた。この時、セフィロスとの戦いは【ジェノバ戦役】と言われている。そして一年前、【カダージュ】が呼び出したバハムート震及び、復活した【セフィロス】によりさらに被害を受けてしまった。

そして現在、残留魔晄により人が住める環境ではなくなり、無法者の溜まり場となっていたが、神羅の地下組織、「デイーブグラウンド」通称【D G】への封印が解かれ、彼等に占拠され、本拠地となった。

彼等の総帥【ヴァイス】いや、彼を宿主とした全ての事件の元凶【宝条】の目的はオメガをその身に宿し、星の海へ飛び立つことだっ

た。

今、ミッドガルで【オメガ】がライフストリームを翼に変え、星の海へと飛び立とうとしている。

つまり、星が終焉を迎えてしまうのである。そして、【オメガ】を唯一止めることが出来る存在はただ一つ、対となる存在【カオス】を身に宿したヴァインセントだけ。

【ヴァインセント・ヴァレンタイン】

かつて神羅に務めていたが、最愛の女性【ルクレティア】の事で宝条を責めた結果、逆上した宝条に撃たれ、彼に身体を改造されてしまい、不老となってしまった。

だが、ヴァインセントの身体は実験に耐えられず、彼は瀕死の重体となってしまうた。

ヴァインセントを救うためにルクレティアはかつて彼の父、【グリモア】と研究していたカオスを彼の身体に宿した。それはただ、彼に生きていて欲しかったから……。

自らの身体に眠るカオスを覚醒させたヴァインセントは飛び行くオメガを見上げ、自らも空高く飛び上がった。

彼は青紫の魔力を纏い、圧倒的な巨体を誇るオメガをあっという間に追い越した。

そして翼を広げ、オメガを一瞬見下ろした後、叫び声と共に一気に自身の魔力を解放し一気に急降下、オメガに向かって突撃した。

自身に降り掛かった因縁を断ち切るために……。

魔力を纏った彼の身体はオメガを貫通し続け、貫通し終わると同時に大爆発を引き起こした。

それも世界に影響を与えると云っても過言では無いほど、巨大なモノである。

ミッドガル上空は白い閃光に染まり、何も見えない。だが、それも束の間、徐々に空に広がっていた光も消え、夜空が見え始めたが

そこにヴィンセント・ヴァレンタインの姿は無かった…。

第97管理外世界『地球』

6月4日 午前0時

一人の少女がベランダにて星を見上げていた。

【八神はやて】

それが少女の名前である。

幼い頃に両親を無くし、足も原因不明の障害で歩くことも出来ず、

車椅子での生活を余儀なくされている。  
また、足の障害が原因で学校も休学しているため、友達もいない。  
だが、父の友人を名乗る人物による庇護を受けながらもたった一人で生活してきた。

はやて「あつ、流れ星や。お願いしとこ。家族ができますように……。」

夜空を見ていたはやては偶然、流れ星を見ると同時に願い事をした。  
今日は彼女の誕生日である。

そして彼女は先ほど8歳になったばかりの幼い少女でしかない。  
そんな彼女がつい、家族が欲しいと願ってしまうのは仕方の無い事だ。

天涯孤独である彼女には本来なら叶うはずの無い願いである。

はやて「……………叶うわけ無いわな。もう寝よ……。」

叶わぬ願いだと分かっているが故に、ただ辛かった。

はやては俯きながら部屋に戻ろうとした次の瞬間

はやて「うわっ!! なんや!?!」

突然はやての目の前が光り、彼女の視界は真っ白になった。

咄嗟に腕で顔を覆い隠し、目を瞑った。やがて光も治まり、彼女が目を開けると

はやて「……………えっ?」

そこには黒い髪を長く伸ばし、赤いマントと黒い服を身に付け、指先が鋭く尖った義手を左腕に付けた長身の男性が倒れていた。

**【第1話】真実と幻想く伝えたかった想いく（前書き）**

なんとか書き直せました……。

多少どころかかなり変わってます。

御感想や御意見は随時お待ちしております。

【第1話】 真実と幻想へ伝えたかった想いへ

ヴィンセント「ここは……どこだ？」

白く、何も存在しない空間の中に、ヴィンセント・ヴァレンタインは一人、佇んでいた。

オメガとの激闘の末、巻き起こった大爆発の後、気が付けばこの空間の中に来ていた。

???「ここはね、あなたの心の中……。」

突然聴こえた声に彼は驚き、振り向いた。そこにいたのは

ヴィンセント「……………ルクレツィア。」

決して忘れる事など出来ない、長きに渡り愛し続けた最愛の女性……【ルクレツィア・クレシエント】だった。

ルクレツィア「うん……………私。」

ヴィンセント「なぜ……………君がここに？」

二度と会えないと思っていた彼女が目の前に居るのだ。驚かない訳がない。

ルクレツィア「これはね、断片化された私の記憶を集めて形にしたモノ……。だから、長くはここにいられないの。それに……言ったでしょう?」

彼女は少しの間を空け、悲しみに満ちた顔をしながら

ルクレツィア「本当の私は……とつくに壊れちゃったって。」

そう言った。

ヴィンセントも彼女の言葉を聴き、悲しそうな顔をしながら

ヴィンセント「そうか……。」

ただ一言、そう呟いた。

分かっていた事とはいえ、彼女の口から放たれた言葉は……彼にとつて辛いものだった。

だが、いつまでも悲観してはいられない。

彼には、確かめなければならぬ事があるのだから。

ヴィンセント「君に聞きたいことがある。」

ルクレツィア「なに?」

ヴィンセント「君は観ていたのだろうか? オメガとカオスは、再び、星に還ったのか?」

ヴィンセントは直感で、ルクレツィアがああ戦いを観ていただろうと感じ取った。

そして、戦いの結末を知っていると思い、彼女に聞こうとしたが

ルクレツィア「実は……その……」

ヴィンセント「頼む、教えてくれ。」

ヴィンセントの質問に、彼女は言いづらそうに言葉を濁した。だが、ヴィンセントには聞く覚悟があった。

それが例え、どのような結果であろうとも……。

ルクレツィアもヴィンセントの思いを感じ取ったのか、彼女自身も覚悟を決め、話すことにした。

ルクレツィア「オメガは……星に還ってはいないわ。そして……カオスも未だ、あなたの中にある。」

ヴィンセント「そうか……やはりな。」

だが、ヴィンセントはあまり驚かなかった。

ルクレツィアがここにいること、そして……己の中に未だ宿っているカオスの存在を感じ取っていた。

ルクレツィア「ごめんなさい……。」

ルクレツィアは俯き、彼に謝った。

かつてヴィンセントは、彼女の事で宝条を責めた結果、銃で撃たれ、

身体を改造されてしまった。

その実験に、彼の身体は耐えきれず、瀕死の重体となってしまった。彼を救たい一心で、ルクレツィアは彼に【カオス因子】と【エンシエントマテリア】を埋め込み、彼の命を救った。

結果として、彼は助かった。

だが、それは同時に彼を事件に巻き込むきっかけとなってしまったのだ。

生きていて欲しかったからとはいえ、人ではない存在にただけではなく、彼を苦しめてしまった事が、ただ…辛かったのだ。

彼女の顔は歪み、今にも泣きそうだったが

ヴィンセント「大丈夫だ……ルクレツィア。」

ヴィンセントが言った言葉に、彼女は思わず顔を上げ、彼を見た。

ヴィンセントは目を瞑り、静かに佇んでいる。

ヴィンセント「長きに渡り、私達を取り巻いた悲しみの物語は……」  
そして、閉じていた瞼をゆっくりと空け

ヴィンセント「必ず、私が終わらせよう……！」

真紅の眼に揺るぎない決意を秘め、静かにそう告げた。

ヴィンセントの言葉に、ルクレツィアも遂に涙を押さえき無くなり、溢れだした。

ルクレツィア「……………ありがとう。」

そして、思わず感謝の言葉を述べた。

ヴィンセント「礼を言うのは、私の方だ。……………ありがとう。」

ヴィンセントも彼女に向けて、お礼の言葉を述べた。

ルクレツィア「……………え？」

だが、ルクレツィアには、なぜ礼を言われるのか分からなかった。

ヴィンセント「君のおかげで……………私は、まだ生きている。」

ルクレツィア「……………グスツ……………ヒック……………ウツク……………。」

その言葉の意味を理解したとき、ルクレツィアは静かに泣き出した。それは、彼女がずっと抱き続けてきた罪の意識を取り去ってくれた言葉だった。

彼女が泣き止むまで、ヴィンセントは再び、目を閉じ、静かに待った。

・  
・  
・  
・  
・  
・

.....

ルクレツィア「ありがとう……。」

泣き止んだ後、彼女はヴィンセントに微笑みながらお礼を言った。その顔は涙でびっしょり濡れてしまっているが、それは

なによりも美しく、なによりも暖かい笑顔だった。

ヴィンセント「ああ。」

ヴィンセントも多くは語らず、ルクレツィアのお礼を受け取った。

ヴィンセント「それにしても……いや、いい。」

ルクレツィア「なに？言ってみて。」

何かを言おうとして止めたヴィンセントに、ルクレツィアは気になり、聞いてしまった。

しかし、次にヴィンセント放った言葉に、彼女は聞いたことを後悔した。

ヴィンセント「君は本当に……一方的だな。」

ルクレツィア「えっ!?!」

ヴィンセント「それに……思い込みも激しい。」

ルクレツィア「なっ！？／＼／＼」

彼は今まで彼女に対して思っていたことを、あっさりと暴露した。思いもよらない言葉に、ルクレツィアは顔を赤らめ、聞いたことを心底後悔した。

だが、実感があつたのか、否定はしなかった。

ヴィンセント「まあ、そんなことはどうでもいい。」

ルクレツィア「どうでもって／＼／＼……まあ、そうだね。それより……もう、時間だね。」

二人は別れの時が近づいている事に気が付き、お喋りをやめた。

ヴィンセント「私の肉体が目を覚ました時、君も消えるのだろうか？ならば、急いだ方がいい。」

ルクレツィア「うん……だから、今分かっていることを言うね。」

先程までの柔らかな雰囲気は無くなり、二人の間に緊張感が漂った。

ルクレツィア「まず、あの大爆発の後だけど……あなたとオメガは平行世界へ飛ばされたの。」

ヴィンセント「平行世界？」

ルクレツィア「可能性の数だけ存在する世界……それが平行世界よ。そして」

ルクレツィアは再び、言いづらそうな顔をしたが

ルクレツィア「あなたはもう、あの世界には帰れないの。」

辛く、重い現実を語った。

だが、ヴィンセントは

ヴィンセント「そうか……。」

一言、そう呟いただけだった。

ルクレツィア「辛く……ないの？」

ヴィンセント「ああ。確かに、仲間と会えない事は辛いけど、平行世界と聴いたときから覚悟は出来ていた。それと……言ったらどう？」

彼には全ての覚悟は出来ていた。

ヴィンセント「私が物語を終わらせると……！」

ルクレツィア「そう……そうだったよね。」

決意を秘めた彼の目を見ていた彼女は、静かに同意した。

ヴィンセント「時間がない。他には？」

ルクレツィア「ええ……その世界では一般的に魔法は知られていな

いの。そして、ライフストリームが存在しないわ。」

ヴィンセント「ライフストリームが存在しない？」

この言葉の意味を理解したとき、ヴィンセントは心底驚いた。

ライフストリームは星の生命そのものである。それが存在しないということとは、オメガは活動できない事になるのだ。

ルクレツィア「でも、ライフストリームの代わりになるものは存在する。その世界のあらゆる所に存在する【魔力素】と呼ばれる物と、生物の中で魔力を生成する器官【リンカーコア】と呼ばれる物よ。この二つはライフストリームほどのエネルギーはないから、オメガが復活するにはかなりの時間がかかるわ。」

オメガ復活まで、かなりの時間があることにヴィンセントはわずかながら安堵した。

ルクレツィア「オメガが眠っている間は、あなたの中にあるカオスも暫くは眠っているわ。あとは……あつ!?!」

ヴィンセント「ルクレツィア!?!」

話を続けようとしたが、遂にルクレツィアの身体が透け始めた。

ルクレツィア「ごめんなさい……もう、時間だね。」

ヴィンセント「そのようだな……。」

消え逝くルクレツィアを見つめながら、ヴィンセントは悲しみを秘めて、呟いた。

だが

ヴィンセント「ルクレツィア……君に伝えたい言葉がある。」

ルクレツィア「え？」

ヴィンセント「……ありがとう。君を……愛していた。」

ヴィンセントが彼女に向けて、放った言葉は、ずっと伝えなかった  
想いだった。

その言葉に彼女は再び、涙を流し

ルクレツィア「私も……あなたの事が好きでした。……ありがとう。  
」

内に秘め続けた想いを、伝えることができた。  
そして

ルクレツィア「一緒には行けないけど……あなたに幸せがありま

すよぶに……。」「

その言葉と共に消えていった……。

ルクレツィアがいた場所を暫くの間、見つめ続けたヴィンセントは

ヴィンセント「それは全てが終わってから探さず、ルクレツィア……  
……いつか、また会おう。」

一筋の涙を流しながら、そう言った。

そして、彼も己の肉体を覚醒させるために意識を落とした。

**【第2話】混沌の目覚め〜夜天との出会い〜（前書き）**

御意見や御意見は随時お待ちしております。

## 【第2話】混沌の目覚め〜夜天との出会い〜

ヴィンセント「うつ……………」。

夢の中で、ルクレツィアに想いを伝える事が出来たヴィンセントは、静かに目を覚ました。

軋む上半身をゆっくりと起こし、光の射す外を見た。

朝日が昇っている所を見ると、どうやら朝のようだ。

そして、これが最も重要な事なのだが、ヴィンセントが眠っていた場所は、家の中である。

眠っていた場所は床だったのだが、誰かが毛布を掛けてくれていたようだ。

恐らく、この家の主なのだろうと考えたヴィンセントは毛布をたたみ、近くにあったソファ―に置いたとき

????「あつ、気が付きました？」

突然、幼い声が聴こえた。

声が聴こえた方を向くと、そこには

車椅子に座った、暗い茶髪の幼い少女がいた。

????「よかった……突然目の前が光ったと思ったら、あなたがベランダに倒れてはったんです。」

彼女が嘘を言っている様子は全くなかった。  
どうやら、自分は彼女に助けられたようだ、ヴィンセントは予想  
した。

ヴィンセント「この毛布は君が？」

???「はい……本当はソファアームまで運ば思ってたんですけど、わたしはこんな身体やから、せいぜいベランダからそこまでしか運べなくて………すみません。」

申し訳なさそうに頭を下げる少女に、ヴィンセントは思わず困ってしまった。

身体が不自由ながらも、自身をベランダから屋内へ運び、しかも毛布まで掛けてくれたようだ。

それも、どこの誰かも分からない男にだ。

ヴィンセントは少女に感謝こそしているが、謝られる理由が解らなかった。

ヴィンセント（こう言つところは、ルクレツィアにそっくりだな。）

思わず、最愛の女性の事を思い出した。

ヴィンセント「頭を上げてくれ………話を聴く限り、私は君に助けられたようだ。ありがとう。」

嘘偽りなく、ヴィンセントは少女にお礼の言葉を述べた。

???「え?………でも」

ヴィンセント「何が原因で、私が君の家のベランダにいたのか分からないが、私は君に助けられたんだ。むしろ、私が謝らなくてはならない……すまない。」

今度はヴィンセントが頭を下げた。

少女は反論しようとして逆に謝られたので、かなり焦っている。

????「あ、頭を上げてください！え、えーと……その……あつ！せや、自己紹介がまだでしたね。わたしは【八神はやて】言います。あなたは？」

謝罪の平行線が続く可能性が高かった状況で、はやては自己紹介をしていなかった事に気がついた。

はやての言葉に、ヴィンセントは一瞬啞然としたが、直ぐに同じ事を思い

ヴィンセント「そうだったな。私はヴィンセント……【ヴィンセント・ヴァレンタイン】だ。」

自身も自己紹介をした。

はやて「ほな、ヴィンセントさんでいいですか？」

ヴィンセント「ああ、構わない。」

呼び方をあまり気にしないヴィンセントは、はやての質問に淡々と返した。

はやて「えーと……ほな、ヴィンセントさんはなん「何か焦げ臭いが、大丈夫なのか？」……え？」

ヴィンセントの言葉に、はやては青い顔をし、台所に目をやると

はやて「や、やってしもたー！！！！」

叫びながらも物凄い速さで車椅子を動かし、台所に向かった。

ヴィンセントも何事かと思い、彼女の後を追うと

はやて「はあ、焦げてしもた……。」

焦げた魚を見て、落ち込んでいるはやてを見た。

見たところ朝食のようだ。

そして自分は、彼女が朝食の準備をしているときに起きてしまったようだ。

その事に罪悪感を感じないヴィンセントではない。

ヴィンセント「私の責任だ……すまない。」

彼は、はやてに向かって、再び頭を下げた。

もちろん、突然の謝罪に対し、はやても何故、ヴィンセントに謝られているのか分からず、パニックに陥ってしまい

はやて「ヴィ、ヴィンセントさん！？あ、頭上げてくださって！わたしも自分の分だけや無く、ヴィンセントさんの分も焦がしてしまってますいません！」

あっさりと爆弾を投下した。

ヴィンセント「……………は？」

あまりの衝撃に、ヴィンセントも間の抜けた声を出した。

かつての仲間がこの場にいたら、皆して大爆笑してそうなほどだ。

しかし、ヴィンセントは本気だった。

突然、平行世界に飛ばされ、理由は分からないが彼女の家に現れ、出会ってから、ほとんど時間が経っていない彼の分の食事まで、はやては作っていたのだ。

ヴィンセント「……………なぜ？」

はやて「え？」

ヴィンセント「なぜ、そこまで私に世話を焼いてくれる？私は言うなれば不審者だ。公安機関に突き出されこそすれ、世話を焼かれるような理由は無いはずだ。」

しかし、ヴィンセントの疑問は彼女の言葉で、一瞬にして吹き飛んだ。

はやて「……………誕生日なんです。」

ヴィンセント「……………ん？」

とても小さく、今にも消えてしまいそうな声だったが、ヴィンセントは聴き逃さなかった。

はやては俯き、寂しげな表情で語りだした。

はやて「今日はわたしの誕生日なんです……。5歳の時に両親を事故で亡くして、わたしはずっと孤独でした……。身体も原因不明の病気で学校も行かれへんから、友達も居りません……。親戚も居らへんし、近所付き合いも出来ません……。お金の管理は父さまの知り合いがやってくれてますから、生活は苦しく無いんやけど、ただ、寂しくて……。」

「ヴィンセント」………」

はやての今までの人生を聴き、ヴィンセントは絶句した。

クラウド達の元に身を寄せているデンゼルやマリンでさえ、経験した事の無い孤独と絶望を、はやては味わってきたのだ。

共に戦った仲間達も皆、辛い過去を背負っている。

気持ちに分かるとは言わないが、絶望を感じた事のあるヴィンセントは、再び、語りだしたはやての話に静かに耳を傾けた

はやて「ヴィンセントさんが現れる直前、流れ星を見たんです……。わたしは願いました……。家族が出来ますように。ずっと一人やっていたわたしに、急に家族なんか出来るわけ無いのは分かってました……。せやから、諦めて寝よ思ったらヴィンセントさんが現れました……。突然現れたからびっくりしましたけど……。嬉しかったんです。やっと……。ヒック……。家族が……。ウック……。出来る思て……。」

話終えたとき、遂にははやては泣き出してしまった。

わずか8歳の少女が抱えるには重すぎる現実をはやては背負い続けてきたのだ。

誰にも話さず……いや、誰にも話せずに。

そして、ヴィンセントは覚悟を決めた。

何も言わずに右手でそつとはやてを抱き寄せた。

彼女の顔は、ヴィンセントの胸元にある。

突然の出来事にはやては戸惑ったが

ヴィンセント「大丈夫だ……はやて。」

その一言に身体が震えた。

それは、夢の中でルクレツィアに言った言葉、そのものだった。

ヴィンセント「私は、どこにも行かない。」

はやて「……………ふえ？」

その言葉に弱く、か細い声だが、はやては驚いた。

ヴィンセント「こんな私でいいのならば……………」

はやて「グスッ……………ヒック……………」

あまりの嬉しさに、止めどなく涙が流れてくる。

ヴィンセント「私が……………君の家族になろう。」

はやて「うあ……うわあああああああ……!!」

遂に緊張が途切れたのか、声を上げて泣き出してしまった。

はやて「さ、さみしかっ………ひとりは……い、いやや………けど  
……だ、だれも………」

押さえ続けた胸の内を、さらけ出すように言おうとしたが

ヴィンセント「今は、何も言わなくていい………好きなだけ泣け。」

はやて「うぐ、うわああああああん!!」

ヴィンセントの胸元、はやては涙を流し続けた。

離れる事の無いように、ヴィンセントの服を掴んだまま……。

【新暦64年、6月4日】

この日、八神はやては一人の男によって、救われた。

【第3話】新しき家族く久しぶりの会話く（前書き）

イマイチ意味のわからないタイトル…（汗）  
今後も続くと思います……………。

御感想や御意見は随時お待ちしております。

【第3話】新しき家族く久しぶりの会話く

ヴィンセント「落ち着いたか？」

はやて「グスツ……………はい……………その、ごめんなさい……………」

あれから暫くの間、はやては泣き続けた。

孤独からの解放……………それがなによりも嬉しかったのだ。

はやてが泣いている間、ヴィンセントは右手で抱き締めながらも器用に、はやての頭を撫でていた。

既に目は真っ赤に充血し、目元は腫れ上がってはいる。

ヴィンセント「なぜ、謝る？」

はやて「服、汚してしもて……………」

確かに、ヴィンセントの服の胸元は、はやての涙でびっしょりと濡れている。

……………黒なので、ほとんど目立たないが。

ヴィンセント「気にするな。」

しかし、本人は全く気にしていない。

はやて「あの……………ホンマにええんですか？」

ヴィンセント「問題ない。」

はやて「いや、服の事やなくて……………」

ヴィンセント「？」

なにか、言いづらそうにはやては口ごもった。

暫しの間を空け

はやて「わたしの…………その…………家族になってくれるって…………。」

彼女は不安だった。

先程のヴィンセントの言葉が嘘だとしたら、自分は再び、孤独な生活が続けることになるからだ。

それだけは…………もう、嫌だった。

ヴィンセント「それは君次第だ。」

はやて「…………え？」

はやてにはヴィンセントの言葉が分からなかった。

ヴィンセント「私は先程、家族になろうとは言ったが、この家の主ははやて…君だ。私の勝手で、君の家族にはなれない。それと、先程の言葉は嘘ではない。この地に、私は身寄りすら無いからな。」

はやてはやっと、理解した。

ヴィンセントははやての許可を待っているのだということ。

はやては迷うことなく

はやて「ほんなら……私の家族になってください。」

最高の笑顔でそう言った。

ヴィンセントもあまり変えない表情だが、確かに微笑みながら

ヴィンセント「ああ……よろしく頼む。」

優しさを込めた言葉で、そう言った。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

取りあえず、話が落ち着いた頃

はやて「ところで、ヴィンセントさん……」

話題を切り出したのははやてだった。

はやて「さっきの言葉は、どういう意味なんですか？……この地に身寄りはいないって。」

先程の会話で、ヴィンセントが言った言葉を彼女は聴いていたのだ。

言葉を聴くだけなら、日本に家族はいないということになるが、ヴィンセントはそういう意味で言ったわけではないと感じ取ったのだ。彼女の質問に、ヴィンセントは

ヴィンセント「私は平行世界から来たからな。」

はやて「……………え？」

再び、爆弾を投下した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「なるほど……………つまり、ヴィンセントさんは戦いで起こった大爆発に巻き込まれて、可能性の数だけ存在する世界、【平行世界】からこの世界に流れ着いたっちゆうことですか？」

ヴィンセント「……………ああ、それで大体合っている。」

はやての物覚えの速さに、ヴィンセントは軽く驚いた。ヴィンセントは自分がいた世界の事や魔法、辿り着いた経緯をはやてに話した。

……………もちろん、カオスやオメガ、そして己の過去の事はあまり話

さなかつたが……。

はやて「それにしても魔法かぁ……わたしにも使えるんやるか？」

そこは8歳の女の子……魔法に憧れるのも無理はない。

ヴィンセント「恐らく、不可能だろう。この世界にはマテリアが存在しない。」

はやて「そっか……まあ、しゃあないな。」

そこは理解の速いはやて……簡単に諦めたが

はやて「せやけど、わたしが危なくなったらヴィンセントさんが助けてくれるんやる？」

冗談でこんなことを言ってみた。

しかし、そこはヴィンセント

ヴィンセント「ああ、任せておけ。」

はやて「ふえ！？……あ、あうう／＼／」

変化の乏しい表情が災いし、はやては顔を赤らめてしまった。  
しかも

ヴィンセント「大丈夫か？顔が赤いぞ。」

はやて「だ、大丈夫です！！／＼／」

はやて（真顔で言わんといてえな……カッコ良すぎるで／＼／）

彼は鈍感である……。

はやての気持ちに気付くワケがなかった。

ヴィンセント「そうか……《くう》……取りあえず食べないか？」

はやて「……………ハイ／＼／／／」

あれだけの大泣きの後である。

しかも、その後は久しぶりのお喋りだったのだ。  
腹が鳴るのも無理はない。

はやて「と、取りあえず……これ、テーブルの上に置いてもらえ  
ます？」

ヴィンセント「……………ああ。」

ヴィンセントもはやてに料理を渡され、テーブルの上に並べた。  
そして、全ての料理が並び、彼等は家族となってから初めての食卓  
に向かった。

#### 【第4話】海鳴市へ服を買おう

はやて「こんなのはどや？ヴィンセントさん。」

ヴィンセント「いや、それは少し……。」

はやてとヴィンセントは海鳴市のショッピングモールにある服屋に  
来ていた。

しかも、今の彼の格好は黒いスーツに白い手袋をしている。

なぜこうなったか？

それは、朝食後まで遡る。

#### 《回想開始》

朝食を食べ終えたはやて達は、リビングにて寛いでいた。

その時、はやてが思い付いたように口を開いた。

はやて「そういえばヴィンセントさんはこの町の事、全然知りませ  
んよね？」

ヴィンセント「ああ。」

当然と言えば当然だ。

ヴィンセントは今日、ここに来たばかりだからだ。

はやて「ほんなら案内します。」

はやてとしては久しぶりに誰かと出掛けられるチャンスなのだ。しかし、相手はヴィンセント……その意図に気付くこともなく……

ヴィンセント「いや、別に構わない……。」

断ってしまった。

いや、彼としては世話になるのに迷惑はかけられないという思いの方が大きい。

しかし、その返事を聞いたはやては……

はやて「わたしと出掛けるん……嫌なんですか……？」

【上目遣い】&【涙目】という最強コンボを繰り出してきた。

その仕草に、ヴィンセントも彼女の過去を聴いているが故にノーとは言えず……

ヴィンセント「そういうわけではない……。」

なんとも言えない返事をした。

しかし、はやてにとっては好都合な返事だった。

はやて「ほんなら行き」だが 「……え？」

ヴィンセント「はやては別に構わないのか？」

はやて「はい、むしろ行きましょうー！」

先程の表情は何処へ……上手くいったと言わんばかりの笑顔だった。はやては、既にヴィンセントの性格をある程度まで理解していたのだ。

この時、ヴィンセントの目には狸の尻尾と耳を生やしたはやてが見えたとか見えなかったとか……。

ヴィンセント「しかし……服はあるのか？」

はやて「え？……あっ！」

似合ってはいるのだが、今のヴィンセントの格好は目立ちすぎるのだ。

黒い皮のタイトのような服に赤いマントと、なんのコスプレだ？と言われそうな格好なのだ。

そして、なによりも目立つのは左腕の義手だった。

指先が鋭く尖った彼の義手は、この日本では法に触れてしまうものだった。

はやて「うーん、そうやなあ……あつ、せや！ー！」

少し悩んだのち、はやては解決策をおもいついた。

はやて「確か、父さまが丈の間違ったスーツを買ってしまってた言っただよつな……。」

ヴィンセント「スーツ？」

はやて「まあ、見た方が速いですね。」

・  
・  
・

・・・

「ヴィンセント」……これが？」

はやて「はい。」

スーツを見た瞬間、ヴィンセントは思わずタークスの制服を思い出した。

しかも、そのスーツは彼がタークスに所属していた時、何度も着用していた物にあまりにも酷似していた。

同時に、宝条に撃たれた苦い記憶も思い出したが……。

はやて「どうしても捨てれんくて置いていた物やけど、こつこついう時にあってよかったわ……。」

寂しげに呟いた、はやての言葉に思考を戻したヴィンセントは……

「ヴィンセント」ああ………ありがとう。」

静かに、お礼の言葉を呟いた。

それは、はやてに向けた物なのか……それとも彼女の父に向けた物なのかは不明だが……。

はやて「取りあえず、それ着てください。それと、この手袋で義手を隠せば大丈夫なはずです。」

「ヴィンセント」そうだな………わかった。」

はやて「ほな、まずは服を買いに行きましょう。」

そして、ヴィンセントは着替えて、はやてと共に海鳴の街に繰り出してきた。

《回想終了》

はやて「うーん……………ヴィンセントさんはイケメンやし、少し派手なんでも似合いそうなんやけどなあ……………」

実際、ヴィンセントはかなりの美形である。

それこそ、街中を歩けば誰もが振り返ってしまうほどの……………。

長く伸ばした黒髪に中性的だが整った容姿、そして高身長である。

そんな彼がスーツを着て歩いているのだ……………目立つのも仕方がない。このショッピングモールに来る途中でも、すれ違った大勢の女性が彼の顔を見るなり黄色い声を上げていた。

そして、今も少し離れた所から黄色い声が聴こえている。

はやて（なんやろ……………？なんかイライラする……………。）

しかし、はやてとしてはそれが面白くない。

出会ってまだ間もないが、既にはやてにとってヴィンセントの存在は大きいものとなっていた。

しかし、未だ8歳の女の子……………イライラの原因は分からなかった。

ヴィンセント「私としては、このスーツだけで十分だ。」

はやて「遠慮やったらなしです！わたし達はもう家族なんやから……………」

「…。」

ヴィンセントも服を買ってもらう事に抵抗があった。いくら家族になったとはいえ、お金ははやての物である。彼もついつい遠慮してしまうのだ。

しかし、はやてには彼が遠慮している事が分かっていた。

ヴィンセント（仕事を探さねばな……。）

密かにそう思ったヴィンセントであった。

ヴィンセント「ならば……その言葉に甘えるところ。」

はやて「そうしてください……取りあえず、このカッターシャツとこのジーンズ、そんでもってこのジャケットはどうです?」

はやてが選んだのは赤いカッターシャツと黒いジーンズ、そして黒いジャケットだった。

ヴィンセントには赤と黒が一番似合つと思つたからである。彼も気に入つたのか

ヴィンセント「ああ、それでいい……。」

二つ返事でそれに決めた。

はやて「ほな、これにしましょ。後は……ヴィンセントさんは義手やから夏場も長袖になるんやなあ。夏用のスーツも買つときましょ。」

ヴィンセント「すまない……ありがとう。」

そして、他にもチヨイスしてくれたはやてに対してお礼を言った。

そして、彼等はいくつかの服を購入し、店を後にした。

【第5話】翠屋と御神の剣士

ショッピングモールで服を購入したはやて達は、ヴィンセントの案内を兼ねて食料の買い出しをするため、商店街にいた。現在、彼等がいるのははやてがよく行く肉屋である。

……………そこではやては

はやて「うーん……………おっちゃん、もう少し負けてくれへん？」

値切っていた……………。

店主「嬢ちゃん、今日はいつもより値切るなあ……………あの兄ちゃんに

何か作るのかい？」

店主が指を指した方には、スーツを着た高身長の方、ヴィンセントがいた。

ちなみにヴィンセントは少し離れた場所から、その様子を眺めていた。

はやて「う、うん……まあ、その……」

顔を赤くし、言葉を濁したはやての様子を見て、店主は意地の悪い顔で

店主「そっか、そっか。嬢ちゃんにも春が来たんだなあ……」

はやて「か、からかわんとして下さい！」

はやてをからかったのだ。

もちろん、はやては反論したが、誰の目から見ても凶星にしか見えない。

店主「そういう事なら仕方ねえ……オマケだ！ついでにコイツもサービスだ！！」

はやて「う……何がそういう事なんかは納得いかんけど、まあ、ええわ。」

結局、店主の言葉に納得は出来なかったが、食材が安く手に入ったので良しとした。

そこに買い物終わりを計らったヴィンセントが、彼女達に近づいた。

ヴィンセント「終わったか？」

はやて「はい、サービスしてもらいました！今夜は楽しみにしていたください！」

ヴィンセント「そうか……ありがとう。」

あまりにも嬉しそうな表情で話すはやての頭を撫でながら、ヴィンセントは静かにお礼を言った。

撫でられているはやては擦ったそうだが、どこか嬉しそうだ。

店主「必死になって値切ったもんなあ、嬢ちゃん。まあ、それもこい「わー、わー……！」……取りあえず、今夜は楽しみにしてな、兄ちゃん。」

店主が言おうとした事をはやては必死になって遮った。

その代償として、顔はトマトのように真っ赤だが……。

ヴィンセント「どうやら、かなり安くしてくれたようだ……店主、すまない。」

店主「気にすんなって。今後ともご贔屓に。」

ヴィンセント「ああ。はやて、行くぞ。」

はやて「あう……ハイ……／＼／」

そうして、彼等は肉屋を後にした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヴィンセント「他に買う物はないのか？」

はやて「はい、これだけです。」

肉屋を後にしたはやて達は、野菜や日用品など、いくつかの買い物を済ませていた。

時刻は午後1時を回ったばかり、少し遅い昼食時だ。

はやて「ちよつと遅いけどええ時間やし、休憩も兼ねて、どこかでお昼にしましょ。」

ヴィンセント「そうだな……どこか行きたい場所はあるのか？」

はやて「はい、この商店街にある【翠屋】っていうお店なんですけど……ずっと行きたかったんやけど、わたしはこんな身体やし……一人やと行きづらくて……。」

ヴィンセント「ならば、そこにしよう。今は私もいる。」

一人だった時を思い出したのか、はやては少し表情を暗くしたが、ヴィンセントの言葉に再び、明るくなった。

はやて「はい……そうでしたね。今はヴィンセントさんが居るんやから……。」

ヴィンセント「ああ……道案内は頼むぞ。」

はやて「任しといて下さいー!」

はやての案内の元、ヴィンセントは車椅子を押しながら翠屋へ向かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

### 【翠屋】

高町夫妻が経営する、スイーツとコーヒーが美味しいと評判の喫茶店である。

何度もテレビや雑誌に載っているため、わざわざ遠くから訪れる人も少なくない。

店主である高町士郎は、かなり空いてきた客足を見計らって、この店のパーティシエであり妻である桃子と休息を取っていた。

その時、客が来た事を伝える入口の鐘が鳴り、車椅子に座った少女とスーツを着た長身の男が入ってきた。

前者かはやて、後者がヴィンセントである。

士郎&桃子「いらっしゃいませ〜」

ヴィンセント「彼女は車椅子なんだが……大丈夫か？」

桃子「はい、大丈夫ですよ。コチラへどうぞ。」

このような会話をしながら、彼等は席に着いた。はやては初めて来た店の中を興味深そうに見渡し、ヴィンセントに話しかけた。

はやて「なんか、落ち着いた感じのええお店やなあ……そう思いません？ヴィンセントさん。」

ヴィンセント「ああ、そうだな……気に入ったか？」

はやて「はい！」

桃子「うふふ……ありがと。」

はやてが出した評価に、桃子は嬉しそうだ。

その光景をカウンターから眺めていた士郎も微笑んでいた。

しかし、内心ではそういう訳にはいかなかった……。

その原因はヴィンセントだった。

彼がヴィンセントを見たとき、己の中の御神の剣士としての本能が警笛をならした。

あの男と戦ってはいけない……と。

自分は彼に恐怖している……そう思うのにそれほど時間はかからなかった。

しかし、同時に彼がとてつもなく大きなモノを背負っている事も感

じ取った。

士郎（いや……今、あそこに居るのは一つの家族だ。）

それが何なのかは分からないが、自分が知るべきではないと思ったのか、士郎は考えるのを止めた。

ちなみに、ヴィンセントも士郎がタダ者ではないことに気付いていた。

だが、敵対するならまだしも、今はこの店のマスターだと考え思考を中断した。

桃子「ご注文は？」

はやて「うーん……ほんなら、わたしはナポリタンで。後はシュークリーム2つ。ヴィンセントさんは？」

ヴィンセント「そうだな……同じものを頼む。」

桃子「はい。ナポリタンが2つ、シュークリームが2つでよろしいですか？」

はやて「はい。」

桃子「分かりました。少し待っててね。」

そうして士郎と桃子は、店の奥へと入っていった。

暫くして、注文した料理が運ばれてきた。  
それを見たはやてとヴィンセントは

はやて「うわあ〜……美味しそうや。」

ヴィンセント「ふっ……確かにな。」

見ただけで美味だと思わせる料理を見て、賞賛した。

桃子「うふふ……ありがとう。」

桃子も二人の言葉に嬉しそうだ。

桃子「取りあえず、召し上がれ。」

はやて「はい！いただきます。」

ヴィンセント「ああ、いただきます。」

そうして食事が始まった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「はあ〜……美味しかったわ〜」

ヴィンセント「ああ……。」

料理の美味しさに、はやては満足そうだった。

一方、ヴィンセントは料理を食べたとき、かつての仲間でスラムのバー【セブンスヘブン】を切り盛りしていた【ティファ・ロックハート】の事を思い出した。

彼女の料理も美味だった事は、今でも思い出せる。

ヴィンセント「そろそろ行くか……勘定してくる。」

はやて「そうですね。ほんならお願いします。」

そう言って、はやてはヴィンセントに財布を渡した。

ちなみに、ヴィンセントは既にはやてから、この世界の通貨の事は知っている。

勘定の最中、士郎が突然口を開いた。

士郎「君は……一体何者だ？」

ヴィンセント「……どういう意味だ？」

ヴィンセントには士郎が何を言いたいのかが分からなかった。

士郎「君から発せられる気……明らかにタダ者ではない。」

ヴィンセント「ふん……タダ者ではないのは、そちらも同じだろう？」

士郎「ッ!?!……やはり気付いていたか。」

士郎は恐怖を押し殺し、ヴィンセントに聞いたが、逆に自分の事を指摘され、絶句した。

ヴィンセント「私は……ただの人間だ。そして」

ヴィンセントは一呼吸置き、桃子と話しているはやてを少し見た後、視線を戻して一言

ヴィンセント「あの子の家族だ。」

士郎に向けて言い放った。

士郎もヴィンセントの意志を感じ取り、安堵した表情で笑いかけた。

士郎「……ふっ、そうだな……。すまない、変なことを聞いてしまったな。」

ヴィンセント「気にするな……そちらにも、守りたい者があるのだろっ?。」

士郎「ああ、私も君と同じさ。……高町士郎だ。」

士郎は右手を差し出し

ヴィンセント「ヴィンセント・ヴァレンタインだ。」

ヴィンセントも握り返した。

士郎「ヴィンセント……か。君とはいい酒が飲めそうだ。」

ヴィンセント「ふっ……そうだな。」

家族を守りたい物同士、気があったのだろっ……太郎とヴィンセントは直ぐに仲良くなった。

士郎「これはサービスだ。あの子と一緒に食べてくれ。」

そう言っつて、士郎が差し出したのはシュークリームだった。

ヴィンセント「いいのか？」

士郎「ああ。」

ヴィンセント「すまない……ありがとう。」

ヴィンセントも微笑みながら礼を言った。

桃子「あらあら……士郎さん、嬉しそうね。」

突然、声が聴こえた方に振り向くと、はやてが乗った車椅子を押した桃子がいた。

はやて「ヴィンセントさんも嬉しそうやね。」

ヴィンセント「ふっ……そうかもな。」

はやての言葉に、ヴィンセントも肯定の意思を示した。

はやて「ほんなら桃子さん、わたしらは帰ります。」

桃子「ええ。また来てね、はやてちゃん。」

はやて「はい！」

士郎「ヴィンセントも、また会おう。」

ヴィンセント「ああ……またな。」

そうしてはやて達は翠屋を後にした。

店を出て少し経った後、ヴィンセントが口を開いた。

ヴィンセント「これからどうするんだ？」

はやて「取りあえず、一度家に帰ります。それから病院の定期検診です。」

ヴィンセント「そうか……分かった。」

そうして、一度家に帰る事になった。

【第6話】海鳴大学病院へ思わぬイベントへ

はやて「ほんならヴィンセントさん、先生には遠い親戚やっ  
て下さい。」

ヴィンセント「分かった。」

翠屋を後にしたはやて達は、一度家に帰り、午前中に買った食材や  
日用品を整理した。

現在、定期検診の為に病院へと向かっている最中である。

では、何故このような会話をしているのか……それは、ヴィンセン  
トのこの世界での存在が関係してくる。

本来、ヴィンセントはこの世界には存在しない人間だ。

そんな人間がはやての事を知っている人物に、突然【はやての家族】  
と言えば、怪しむのは目に見えている。

今から行く【海鳴大学病院】には、はやての事を知っている人物が  
いるのだ。

辻褄を合わせておかねば、大変な事になりかねない。

ヴィンセントもその事を聞いているので、直ぐに納得した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

暫くして、彼等は病院に着いた。

受付に行き、はやてはいつも通りの手順で手続きを済ませた。その時、受付に居たナースがはやての後ろに立っているヴィンセントを見て、顔を赤らめたのは言うまでもない。

もちろん、はやてにとっては面白くなかったが……。

ヴィンセント「何を怒っている？」

はやて「……………別に怒ってません。」

そうは言っても頬を膨らませ、不機嫌なオーラを出しているのだ……ヴィンセントが分からないわけがない。

聞くべきではないと考えたのか、ヴィンセントは一つ溜め息をついた。

そうこうしている内に診察室へ着き、ヴィンセントが扉を開けた瞬間、何かの破裂音が聴こえた。

????「はやてちゃん、お誕生日おめでとう!!」

はやて「え、え?……………い、石田先生…………?」

音の正体はクラッカーだった。

そして、それを鳴らしたのはこの病院の医師であり、はやての主治医でもある【石田幸恵】だった。

彼女は、身寄りのないはやての事を気につけ、診察と同時に誕生日会を計画したのだ。

もちろん、病院には許可を取ってある。

石田「なにばーつとしてるの？早く入って。」

はやて「は、はい……。」

戸惑いながらもはやて達は診察室に入った。

石田医師はそこで、はやての車椅子を押している人物に気が付いた。一瞬、怪しげな視線を向けたが、はやてが全く気にしていないので、よしとした。

石田「初めまして、はやてちゃんの主治医の石田幸恵です。あなたは？」

ヴィンセント「ヴィンセント・ヴァレンタインです。はやてとは遠戚です。先日、仕事が全て片付いたので、独り身だったはやてと暮らす為に日本に来ました。」

さすがはヴィンセント、伊達にトークスに所属してた訳じゃあない。石田医師もそれを信じたのか、ヴィンセントに向けて微笑んだ。

石田「そうですね……はやてちゃん、よかったじゃない！最高の誕生日プレゼントね！」

はやて「はい！ヴィンセントはええ人だから、安心です！」

一人だった時のはやてを知っている石田医師としては、自分の事のように嬉しかった。

当時のはやては、笑ってはいてもどこか寂しそうだったからだ。しかし、今は心の底から笑ってくれている……彼女にとっては、それが堪らなく嬉しかった。

はやて「…せやけど石田先生……………」

唐突にはやてが口を開いた。

そして、はやての顔を見た瞬間、石田医師は恐怖した。

大人が子供に恐怖する　　と言つのも可笑しな話ではあるが、冗談ではない。

何故なら、今のはやては顔が笑っていても目が笑っていない。

石田「な、なあに？……………はやてちゃん。」

はやて「ヴィンセントさんは……………上げへんで？」

その言つた瞬間、はやてがどす黒いオーラを出し始めた……………後ろに修羅がいそうなほどの……………。

石田医師は顔を青ざめながら、壊れた機械人形のように首を何度も縦に振った。

その光景を見ていたヴィンセントは、一つ溜め息をつき、はやてに話しかけた。

ヴィンセント「はやて、落ち着け。」

はやて「……………ふえ？」

間の抜けた声と共に、はやてが出していたオーラも霧散した。

ヴィンセント「私はどこにも行かん……………少なくとも私が生きている限りな。」

はやて「あっ……………はい……………」

そうして、はやては再び、笑顔となった。

石田医師は目でヴィンセントにお礼をし、ヴィンセントもそれを返した。

石田「と、取りあえずケーキがあるから食べましょう。ヴィンセントさんもどうぞ。」

はやて「はい、ありがとうございます。」

ヴィンセント「すみません、石田先生。ありがとうございます。」

そうして、はやての誕生日会が始まった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

誕生日会が終了後、はやての検診が始まった。

はやては今、検査に行っているのです、ここに居るのはヴィンセントと石田医師だけである。

石田「ヴィンセントさんは、はやてちゃんの病気についてはご存知ですか？」

ヴィンセント「ええ……本人に聞きました。」

石田「そうですね……。」

石田医師は悲しげな表情を浮かべたが、直ぐに真面目な顔になった。

石田「あの子の病気は、原因不明の麻痺なんです。足が動かなくなるのはまだしも、年々進行していくばかりなんです……。治療法を探してはいるんですけど……。手掛かりすら掴めなくて……。」

ヴィンセント「そうですか……。」

彼女の話聞き、ヴィンセントも悲しげな表情を浮かべた。

石田医師は俯きながら話し出した。

石田「両親が亡くなってから、はやてちゃんが心の底から笑ってくれた事はありませんでした。でも、今日のはやてちゃんは心の底から笑ってくれていました。あんな笑顔……。本当に久しぶりに見ました。……。きつと、あなたに会えたからだと思います。だから」

言葉と同時に、彼女は顔を上げてヴィンセントを見た。

石田「お礼を言わせてください……。ありがとうございます……！」

それは、はやてをずっと見続けてきた【一人の人間】としての言葉だった。

ヴィンセントも彼女の言葉を聞き、自身も語りだした。

ヴィンセント「私は……。多くのモノを失ってきた……。」

石田「え……？」

ヴィンセント「大切な人を助けようとして失敗した……。結果、自分の身さえ傷付いた。そして私は、過去に囚われたまま生き続けた。」

【すまない……。】

そう言っただけ彼女に謝ったのだろっ。

ヴィンセント「だが、かつての仲間には逃げているだけだと教えられた。」

【時を止めた私に、前へ進む事を教えたのは……お前達だったんだがな。】

そう言っただけ彼に決意させた事もあったな。

ヴィンセント「逃げることは誰にでも出来るが、それはやってはいけない事だ。」

【あなたに生きて欲しかったんだ】

彼女の想いを知ったからこそ……終わらぬ時を生きる覚悟が出来た。  
……だからこそ

ヴィンセント「彼女が生きること諦めない限り……私は後ろを向くつもりはありません。」

生きていてよかった……彼女がそう言える時が来るまで、私は彼女を支え続けよう……。

石田「はやてちゃんを……お願いします。」

ヴィンセントの言葉を聞いた石田医師は、涙を流しながら、静かにそう言った。

石田（彼にならあの子を任せられる……。）

気にかけていた孤独な少女を、任せられる人物が目の前にいる……それだけで今は十分なのだから。

ヴィンセント「はい。」

返事は短いが、その言葉に秘められた意志は、なによりも大きかった。

はやて「あー！ヴィンセントさん、先生泣かしたらアカンやる!？」

話が終わった直後、検査からはやてが帰ってきた。

彼女は泣いている石田医師を見て、ヴィンセントを責めたが

石田「大丈夫よ、はやてちゃん……これは嬉し涙だから。」

はやて「嬉し涙って……まさかヴィンセントさん、わたしというものがありません……浮気は許さへんで？」

石田「ち、ちよっと、はやてちゃん!？」

再び、どす黒いオーラを出し始めたはやてに石田は慌てだした。

しかも、何故か標的は石田医師だった。

はやて「先生……ちょっと【OHANA SHI】しよか？」

この日、海鳴大学病院の一室からは巨大な悲鳴が聞こえたらしい。

【第7話】暖かき晚餐〜1日の終わり〜

はやて「〜」

はやては現在、鼻唄を唄いながら夕食の準備をしている。

病院ではやてによる【O H A N A S H I】の時、ヴィンセントは追い出されたので、何が中で起こっていたのかは知らない。石田医師の物と思われる悲鳴が聴こえた後、部屋に戻ると、やたらと肌がツヤツヤしているはやてと何故か少し糞れている石田医師がいたのは余談である。

その後、家に帰り現在に至る。

ちなみにヴィンセントは、はやてに待っているように言われ、リビングにて夕食が出来上がるのを待つことにした。

彼は現在、考え事の最中だ。

【職探し】

これが今の彼の悩みだった。

はやての家族として生きることを決めたが、働かない訳にはいかない。

しかし、彼には戸籍が存在しない。

そんな人間が働けるほど、この世界は甘くはない。

裏家業の事も考えたが、今の彼には愛銃【ケルベロス】がない。オメガが生まれた際、魔晄炉の中に落としてしまったのだ。

何故かケルベロスの姿を象ったレリーフは残っていたが……。  
他にも力はあるのだが、この世界で使うのは躊躇われる力だ。

しかも、裏の仕事をするとすることは、はやてを危険に晒してしま  
う可能性がある。

それだけは避けねばならない。

また、今日出歩いていて気付いたのだが、誰かにつけられていたの  
だ……それも一日中……。

こんなこともあり、仕事をしながらも出来るだけはやての近くに  
いるべきだと考えたヴィンセントだが、条件が非常に難しいために悩  
んでいた。

ヴィンセント「……………どうするべきか……………」

はやて「何がなん？」

ヴィンセント「ッ!?……………はやてか……………どうした？」

突然聴こえた声に反応すると、はやてが心配そうにヴィンセントを  
見ていた。

ちなみにはやてが敬語を使わないようしているのは、ヴィンセント  
が止めるように言ったからである。

だが、まだ抜けきれていないのか……………時々敬語になってしまっよう  
だ。

はやて「晩ごはん出来たらから呼んだんやけど、返事もなかったか  
ら呼びに来たんよ。そしたらヴィンセントさんがなんか悩んではっ  
たから……………どないしたん？」はやての言葉を聞き、時計を見ると、

はやてが料理を始めてから一時間が経過していた。

ヴィンセント（随分と長い時間、悩んでいたようだ……。）

かなり長い時間、悩んでいたことにヴィンセント自身も驚いた。

ヴィンセント「大した事じゃない……気にするな。」

はやての頭を撫でながら、安心させるようにそう言った。

はやて「う、うん……ヴィンセントさんがそう言っんやったら……。」

少し不安げだったが、撫でられて安心したのか……追求しようとはしなかった。

ヴィンセント「取りあえず、食べるか……。」

はやて「はい。」

そうして、台所に向かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヴィンセント「これは……。」

ヴィンセントは、目の前にある料理を見て思わず唾然とした。

そこにあるのは、日本食の数々だった。

わずか8歳の子供が、これ程の料理を作れるとは思いもしなかったのだから。

しかし、今朝の料理を食べたヴィンセントは直ぐに納得した。

はやて「えへへ……驚きはったか？ヴィンセントさん。」

ヴィンセント「ああ……だが、今朝の事を考えると納得できるかな。」

はやて「そっか……。でも、言いましたやん？今夜は楽しみにしててくださいって。」

ヴィンセント「ふっ……そうだったな。」

はやて「そんなことは兎も角……食べましょ。」

ヴィンセント「ああ、そうだな。」

そして、彼等は席に着き、夕食を食べ始めた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「一緒に寝てくれませんか？」

はやて達が今いるのは、はやての部屋である。

食後、彼等は風呂に入り、その後ヴィンセントが彼女を部屋に運び現在に至る。

ちなみにはやてはパジャマを着ているが、ヴィンセントはここに来たときの服……即ち普段着である。

彼曰く、こちらの方が落ち着くらしい。

ヴィンセント「……なぜ？」

はやて「えーと……そ、その……いけません？」

ここでもはやては、【上目遣い】×【涙目】という凶悪コンボを繰り出してきた。

ヴィンセントは一つ溜め息をつき

ヴィンセント「……今日だけだぞ。」

そう言うてはやての右側に座り込んだ。

はやて「は、はいー！」

断られるかと思っていたのか、ヴィンセントの答えに嬉しそうに返事した。

疲れていたのか、はやては直ぐに眠りについた。

今日だけでたくさん出来事が起こったのだ……無理もない。

はやてが寝静まったのを見計らって、ヴィンセントも自分に与えられた部屋に戻ろうとしたが

ヴィンセント（……ん？）

引っ張られる感じがして、そちらの方向に目を向けると

はやて「すー……すー……」

はやてがヴィンセントのマントの裾を掴んでいたのだ。  
しかも、離そうとすると嫌がられるのだ。

ヴィンセント「ハア………仕方あるまい。」

小声でそう呟き、ヴィンセントも大人しく元の位置へ戻り、自身も眠りについた。

【第8話】電話屋と誘拐〜思わぬ出会い〜

店員「いらっしやいます。」

このような決まり文句を聞きながら、はやて達が入っていったのは、海鳴市のあるケータイショップだった。

では、なぜこうなったか……それは

ヴィンセント「電話屋はどこだ？」

ヴィンセントのこの一言からだった。

ヴィンセントとはやてが会ってから数週間、彼等が基本的に過ごす所は、はやての憩いの場所【海鳴市立図書館】だった。彼等はここで1日のほとんどを過ごし、その後買い出しを行うという生活を続けていた。

しかし、ヴィンセントが仕事を探すため、共に行動出来ない事が何度もあった。はやてが図書館を出た後、ヴィンセントが合流するという方法だったのだが、なかなか合流出来ない事が多々あったのだ。しかも、そういうときに限ってはやてがアクシデントに巻き込まれるのだ。

時には車に轢かれかけ、時には同年代の子供に苛められ、時には変質者に襲われかけ、時にはヤの付く人に絡まれたり……と様々である。

いつもギリギリの所でヴィンセントが助けるのだが、彼としては冷や汗モノだ。

そんなこともあり、連絡手段を手に入れるべきだと考えたヴィンセントは、携帯電話を買うため、はやてに相談を持ちかけた。

ちなみにヴィンセントが本来持っていた電話は、ケルベロスと共に魔晄炉の中に落としてしまい、今は無い。

事情を聞いたはやては二つ返事でOKを出し、ケータイショップに向かい、現在に至る。

ちなみに突然の事だったので、はやてはカタログを持っておらず、直接見に行くと同時に買うことにしたが

はやて「ヴィンセントさんは機能重視と見た目重視……どっちにします?」

ヴィンセント「……………さあな。」

ヴィンセントの反応は曖昧だった。

なにせ、彼はカダージュとの戦いが終結後、携帯電話を購入したのだ。

その際、かつての仲間【バレット・ウォーレス】の娘、マリんに「信じられない」と呆れられたのは良く覚えている。

ヴィンセント「機械は……………苦手だ。」

はやて「へえ……………ヴィンセントさんにも苦手な物があるんや……………意外やわあ。」

ヴィンセント「……………」

普段、弱点をあまり見せないヴィンセントの新しい一面を見つけたのが嬉しいのか、はやてはにやけた。  
ヴィンセントは静かにそっぽを向いた。

はやて「そう拗ねんといってください。ゆっくり探しましょう……………ね?」

ヴィンセント「……………ああ。」

そうして、ヴィンセントの電話探しが始まった。

・  
・  
・  
・  
・

はやて「こんななんはどつです?」

ヴィンセント「いや……それは少しややこしすぎる。私はこっちの方がいいのだが……。」

はやて「うーん……でも、それはちょっとダサいような……。」

こんな感じで電話探しは難航していた。

はやてが薦めてくれる種類は操作が少しややこしかったり、ヴィンセントが選んだ種類は形がダサかったりするのだ。  
これでは埒があかない。

ヴィンセント「それだと……ん?」

ヴィンセントの目に入ったのは、この世界に来る前に自分が持っていた電話と瓜二つだった。

はやて「なんかいいのありました?」

ヴィンセント「はやて、私はこれがいいのだが……。」

そう言っつて自身が選んだ物をはやてに渡した。

はやて「そうですね……これやったら操作もややこしくないし、見た目もええし……ほんならこれにしましょ。」

ヴィンセント「ああ。」

そうして、受付に向かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

店員「ありがとうございました。」

ヴィンセントの携帯電話を無事、購入したはやて達は、家に帰る事にした。

ヴィンセントの手には先程購入した携帯電話があった。

彼は購入した直後、持っていたケルベロスレリーフをアクセサリとして着けることにした。

その際、はやてがそのレリーフを興味深く見ていたのは余談である。

ヴィンセント「今日は特に予定はないのか？」

はやて「はい。」

ヴィンセント「そうか。ならば家に……ん？」

家路に向かう途中、黒いワンボックスが彼等の横を猛スピードで通り過ぎた。

その際、ヴィンセントには見えていた……口をガムテープで塞がれた一人の少女が……。

どう考えても誘拐である。

面倒事を嫌うヴィンセントだが、こういうのはあまり見過ごせない。

ヴィンセント「はやて、先に家に帰れ。」

はやて「え？」

ヴィンセント「少し、やることができた。」

はやて「ち、ちよいヴィンセントさん!？」

そう言っつてヴィンセントは駆け出した。

後ろでははやてが騒いでいるが、この際、気にしている暇はない。

彼は走り去る車を追うために、速度を上げた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヴィンセント「くっ……見失ったか……。」

いくら常人離れた身体能力を持っていても、猛スピードで走っている車には追いつけず、見失ってしまった。

ヴィンセント「……仕方あるまい。」

そう言っつてヴィンセントは飛び上がり、近くにあったビルの屋上に飛び乗った。

人が近くにいなかったのが幸いである。  
そして、ビルや民間を屋根伝いにして暫く移動を続けると

ヴィンセント「……見つけた……！」

あの黒いワンボックスを無事、見つけることができた。

車が停まっているのは海鳴市の沿岸部に存在する、倉庫街だった。

ヴィンセントは音を立てずに着地し、気配を消して物影に隠れ、入口の様子を窺った。

ヴィンセント（見張りは一人……所持しているのはハンドガンか……。）

犯人が所持しているのはマガジンタイプの拳銃だった。

ヴィンセントはそれを確認し、犯人が余所見をした瞬間を狙って間合いを詰め

ヴィンセント「ふっ！」

見張り「ぐっ……！」

鳩尾を殴り、犯人を昏倒させた。

犯人は一瞬で意識を失い、音を立てずに倒れた。

ヴィンセントは犯人が所持していた武器を確認すると、マガジンタイプの拳銃と弾数15発のマガジンが1本だった。

ヴィンセント（なんとかなりそうだな……。）

そう思いながら、マガジンをスーツの内ポケットに入れ、中の様子を探った。

中に居たのは口をガムテープで塞がれ、ロープで縛られている金髪の少女と黒いスーツを着こんだ男が8人いた。すると、なにやら会話が聴こえてきた。

ボス「おい、返事はどうだった？」

犯人A「はい、払うとの事です。」

犯人B「ですがボス……このガキは返すのですか？」

ボス「返すわけないだろう……コイツは将来、かなりの美人になる。今のままでも、そっちの趣味がある奴には高値で売れるしな。」

身代金目的の誘拐だが、犯人達は少女を家に返すつもりなどなかったのだ。

このまま売り飛ばすつもりなのだと、ヴィンセントは悟った。

ボス「そう言えばお前、そっちの趣味だったな……味見してみるか？」

犯人B「い、いいんですか!?!」

ボス「ああ……いいぜ。」

犯人B「ウツヒョー! ラッキーだぜ!!」

男の一人が大声を上げながら少女に近づいた。

一方、少女は顔を青くして必死に抵抗しようともがいていた。

犯人C「お前、相変わらずだな。」



一つの銃声と共に少女に覆い被さった男が、力なく倒れた。それと同時に何度も銃声が響き渡り、大量の弾丸が犯人達の所持していた武器を弾き飛ばした。

ボス「な、なんだ!？」

犯人A「だ、誰だコラア！」

犯人C「出て来いやあ!!！」

犯人達がそう叫んだ瞬間、入口からヴィンセントが走り、四発の弾丸を発射した。

それらは犯人の内二人に命中し、腕や足を正確に穿った。

ヴィンセントは走りながらそのまま壁を蹴ると同時に、弧を描きながら回転し、三発の弾丸を発射した。

それらは全て、犯人の一人の両足と右腕を穿ち無力化した。

そのまま彼は反対側の壁を蹴ると同時に、マガジンを入れ替え、再び、弧を描きながら弾丸を発射した。

その数、合計12発。

それら全て、ボスと呼ばれた男以外の両足と片腕を正確に穿ち、無力化することに成功した。

ヴィンセントは着地し、振り返ると同時に銃口を最後の一人に向けた。

ヴィンセント「さて、後は貴様だけだが……どうする?」

僅だが殺気を込めて男を睨み付けた。

ボス「ふ、ふざけるな！コイツがどうなってもいいのか!？」

男は震えながらも、近くに居た少女を寄せ、頭に銃を向けて人質とした。

少女も恐怖し、再び、顔を青くした。

だが、相手が悪かった。

この【ヴィンセント・ヴァレンタイン】の命中精度は次元が違うのだ。

それこそ針穴に糸を通すなど容易いほどに……。

ドンッ！

ボス「ぐ！ ガハッ!！」

故に、銃を撃ち落とすなど造作もない事ない。

銃を弾き飛ばされ、無防備となった男との間合いを一気に詰め、顔面に強烈な蹴りをお見舞いした。

男は回転しながら吹き飛ばされ、音を立てて壁に激突した。

・  
・  
・

・・・

ヴィンセント「無事か？」

その後、ヴィンセントは犯人達を拘束し、抵抗できないようにした後、人質となっていた少女を解放した。

少女は目の前で起こったことに対して未だ戸惑っていたが、ヴィンセントの言葉を聞き安心したのか

????「は、はい……。」

声は小さいが、肯定の意思を示した。

ヴィンセント「そうか……ではな。」

しかし、そう言ってヴィンセントが去ろうとすると

????「ま、待ってください！……お礼をさせてください！！」

声を張り上げてヴィンセントを呼び止めた。

しかも、お礼をさせるとまで言ってきたのだ。

ヴィンセント「気にするな……礼が欲しくて助けた訳じゃあない。」

????「で、でも……。」

ヴィンセントが断ろうとすると涙を浮かべ、泣きそうな顔を始めた。

これにはヴィンセントも困ってしまい、どうするべきかと思案して

いると

????「お嬢様！アリサお嬢様〜！！」

アリサ「さ、鮫島！？」

入口から身なりのいい老人が警察と共に走ってきた。  
どうやら鮫島と言っらしい。

そして、この少女の名前はアリサと言っらしい。

鮫島「お嬢様、よくぞご無事で……この鮫島、非常に心配して  
おりましたぞ！」

アリサ「ええ……この人のおかげで。」

少女がそう言うと、老人はヴィンセントの方を見て

鮫島「申し遅れました。私、バニングス家執事の鮫島と申します。  
お嬢様を助けていただき、誠にありがとうございます。」

アリサ「えっと……アリサ・バニングスです。助けてくれてありが  
とうございます。」

二人そろって、深々と頭を下げてきた。

ヴィンセント「ヴィンセント・ヴァレンタインだ。先程も彼女に言  
ったが、礼が欲しくて助けた訳じゃあない……気にするな。」

そう言って再び、去ろうとすると

鮫島「お、お待ちください！お嬢様の恩人に礼を返さぬなど、バニングス家の立場がありません！」

アリサ「そ、そうよ！せっかくお礼して上げるって言うてるんだから、ありがたく受け取りなさいよ！！」

この始末である……。

鮫島の方は未しもアリサに関しては完璧な上から目線である。

しかも、なぜか目尻には涙が浮かんでいる。

ヴィンセントも今にも泣き出しそうなアリサを見て、一つ溜め息をつき

ヴィンセント「……仕方ない……分かった。」

肯定の意思を示した。

ヴィンセントの言葉を聞いた鮫島は安堵し、アリサは嬉しそうだ。

鮫島「ありがとうございます！それでは、こちらへどうぞ。」

アリサ「よ、よかった……取りあえず、着いてきなさいよね。」

そうして、現場は警察に任せ、彼等はバニングス邸へと向かった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

鮫島「では、あなた様のご希望を言ってください。私どもで可能な

ことならば何でも叶えましょう。」

あれからバニングス邸へと向かったヴィンセントは、執事である鮫島と助けられた張本人アリサを交えて話していた。

聞くところによると、バニングス家は世界中に支社を持つ大企業で、財界や政界にも多大な影響力を持っているらしい。

その事を聞いたヴィンセントが、神羅の事を思い出したのは言うまでもない。

ちなみにバニングス家当主【デビット・バニングス】は、娘を助けてくれたヴィンセントの力になるように鮫島に命令したそうだ。

ここでもヴィンセントは断ろうとしていたが

アリサ「さつさと言いなさいよ！言うまで今日は帰さないんだからね！！」

こう言われる始末である。

家に帰れないのは非常に困るため、ヴィンセントは何かと考えていると

ヴィンセント「そう言えば、戸籍は作れるのか？」

自身には戸籍が無いことを思い出したのだ。

政界にも影響力があるのなら、戸籍を作って貰えるかも知れないと考えたのだ。

もちろん、アリサの返事は

アリサ「簡単よ。バニングス家をなめないで貰える？」

肯定だった。

ヴィンセント「ならば、私の戸籍を作って欲しい。訳あって、私には戸籍が無い。それと」  
ヴィンセントは一拍置いて

ヴィンセント「私を海鳴市立図書館で働けるようにして貰えないだろうか？」

アリサ「え？」

鮫島「なぜでございますか？」

ヴィンセントの要求はあまりにも衝撃的だった。

大金を要求する訳でもなく、株を寄越せと言うわけでもない。  
戸籍の用意となぜか図書館で働く事、これだけだった。

アリサは助けられた際、ヴィンセントの射撃の腕前を直に見ていたのだ。

てつきりアリサは彼が昔、どこかの軍に所属していたと考えていたので、戸籍が無いことには心底驚いた。

一方、鮫島は無力化された犯人達を一掃したヴィンセントを見て、驚きと恐怖を感じていた。下手に刺激すればコチラの身を危険にさらすと考え、恩を売るために礼をさせると言ったが、彼があまりにも遠慮深い事に戸惑っていた。

鮫島とアリサが戸惑っていることを見抜いたヴィンセントは話し始めた。

家族がいる事、家族が車椅子で生活している事、家族がまだ幼い事、

家族が休学中で毎日図書館にいる事、そのために出来るだけ近くで働きたい事など……。

アリサは彼の話聞いて、思わず感動してしまった。

家族の為にそこまでしようとするヴィンセントの在り方は、友達思いなアリサにとっては羨ましい物だった。

アリサが鮫島に目配せすると、彼も了承したのか、頷いた。

鮫島「分かりました。この鮫島、責任を持ってヴァレンタイン様の戸籍を作らせていただきます。」

アリサ「図書館の事も任せていて。なんとかしてみせるわ。」

二人とも、協力の意を示してくれた。

ヴィンセント「そうか……よろしく頼む。」

鮫島「はい、お任せください。」

アリサ「ええ……出来上がり次第、アンタの家に届くようにするわ。」

ヴィンセント「わかった。」

そうして、ヴィンセントは家に帰るため、バニングス邸を後にした。

後日、八神家にヴィンセントの存在を示す住民票と図書館で司書補佐として採用すると言つ連絡が届いた。

ちなみにあの日、機嫌を悪くしたはやてを慰めるのにヴィンセントが苦勞した事を知る者はいない……………。

【第9話】二つの仮面、残された謎（前書き）

明けましておめでとうございます。

本当は一昨日の夜に更新しようと考えていたのですが、年末年始を友達と徹夜で騒いで暮らした結果、二日間をとことん寝て過ごす羽目になってしまいました。

本当にすいません……。

今回はバトルを中心に書いてみました。

はつきり言ってbad badです……。

それではどごぞ。

## 【第9話】二つの仮面と残された謎

ヴィンセントが図書館で働き始めてから半年の月日が流れた。  
12月……世間ではクリスマスや大晦日などで忙しくなる時期である。

いつも通り、ヴィンセントははやてと共に図書館へ向かい、いつも通り共に帰るつもりだった。

しかし、今ヴィンセントは食材の入った袋を持ち、一人で商店街を歩いている。

理由は冷蔵庫の中がすっからかんだったことをはやてが忘れていたからである。

はやては自分の責任だから自分でやると言っていたが、定期検診なので買い出しができず、代わりにヴィンセントがその役目を承ったのだ。

しかし、はやては定期検診が終わったら自分が行くと言い張り、一向に譲らなかつた。

そこでヴィンセントは石田医師に連絡を取って図書館に来てもらい、はやてを強制的に病院へ向かわせた。

……その時、恨めしそうにヴィンセントを見ていたのは気にしないことにしよう。

ヴィンセントは商店街を出て、家路に着いていた。

暫く歩き、海沿いの公園に出た瞬間、周りから人が消えたのだ。

時刻は夕方……走ったり回っていた子供の声すら聴こえなくなってしまう。

ヴィンセント「なんだ……？」

突然の出来事に驚いたヴィンセントだが、直ぐに自分以外の気配を感じ取った。

近くにあったベンチに荷物を置き

ヴィンセント「居るのは分かっている……出て来い。」

気配がする方へ向き、言い放つと

仮面の男「……………」

仮面をつけた男が現れた。

ヴィンセント「何者だ？」

仮面の男「……………」

ヴィンセントの問いかけに男は何も答えず、静かに構えた。

ヴィンセントも構え、男に向き合った。

そして、同時に駆け出した。

ヴィンセント「ふっ！」

仮面の男「はあっ！」

二つの拳がぶつかり合ったが、威力が均衡していたのか、お互いの拳が弾かれた。

仮面の男「せやあっ！」

ヴィンセント「……………！」

男はもう片方の拳でヴィンセントを殴ろうとしたが、ヴィンセントは義手で男の攻撃を逸らした

仮面の男「何っ!?!」

ヴィンセント「はっ!」

男は驚愕の声を上げたが、その刹那、ヴィンセントの放った回し蹴りが男の顔面を捕らえた。

仮面の男「ぐああっ!」

ヴィンセントの蹴りを食らい、男は大きく吹き飛ばされた。

ヴィンセントは追撃を加えるため、一気に距離を詰めようとしたが

ヴィンセント「ッ!?!くっ!」

上空から迫り来る魔力弾に気付き、大きく距離を取った。  
そして、仮面の男の方を見ると

仮面の男B「無事か?」

仮面の男A「ああ………なんとかな。」

仮面の男が二人居たのだ。

油断していた訳ではないが、突然の出来事にヴィンセントは思わず歯噛みした。

ここで言うておくが、ヴィンセントは決して接近戦のエキスパートではない。

彼は銃による中距離からの支援を主とする戦いを得意とする。確かに彼は接近戦も可能だ。

しかし、それはあくまでも可能なかただけである。

自らがカオスとなったときや内に潜む魔獣の姿になったとき、体の底から沸き上がる闘争本能により接近戦が得意にはなる。

また、一対一の状況では、自身の身体能力を駆使し、どのような強者でも接近戦で倒すことが出来るだろう。

だが、今の状況はそうではない。

相手は二人。

先程の攻撃を見るに片方は接近戦主体、もう片方は支援型である。

現在、銃を持たないヴィンセントにとっては非常に苦しい状況である。現在カオスは眠っており、その力を使うことはできない。

また、内に潜む魔獣【ガリアンビースト】を使えば周囲は焦土と化してしまうだろう。

ヴィンセント（……どうする？）

仮面の男A「うおおおお！」

持ちうる手札を切ることができず、思案しているも束の間、仮面の男がヴィンセントに向かって突っ込んできた。

男が放ってきた右ストレートをかわしたが、彼に向かって飛んできたのは大量の魔力弾だった。

ヴィンセント「ッ！」

仮面の男B「ハアッ！」

横に転がってかわしたが、また新たに発射したされた魔力弾が彼に

向かって飛んできた。

ヴィンセント「くっ!」

仮面の男A「でやあっ!」

ヴィンセントは再び、転がってかわしたが、次に待っていたのは蹴りだった。

ヴィンセント「!?!?.....ぐっ!」

ギリギリの所で義手を使って防ぐことができたが、大きく吹き飛ばされてしまった。

ヴィンセント「くっ.....面倒だな。」

思わず悪態を吐いた。

だが、彼の目は諦めていなかった。

その真紅の瞳に灯る光は薄れるどころか益々、輝いているように見えるだろう。

ヴィンセント（早く帰ってやらねばな.....。）

ヴィンセントの脳裏に浮かんだのは、笑っているはやてだった。

自分と会うまでただ一人、孤独に生きてきた少女。

突然現れた初対面の自分を介抱し、朝食まで用意してくれていた。その時に聞いた彼女の想い。

今でも鮮明に覚えている彼女の叫び。

【一人はもう嫌だ】と……。

ヴィンセント（私は……負けるわけにはいかない！）

覚悟を決め、内に潜む魔獣の因子を覚醒させるために魔力を放出した次の瞬間

??? Stand by ready?

突然聴こえた電子音……そして

??? Set up!

ヴィンセント「なに！？……ぐっ！」

再度聴こえた電子音と共に、ヴィンセントは鮮紅色の光に包まれ、思わず目を閉じた。

暫くすると光が消え、目を開けると

ヴィンセント「これは……一体？」

自身の姿に驚愕した。

前身が黒いレザー製の服、先端が鋭く尖った鉄鋼が付いた靴、先端が破れていたり穴が空いていたりする真紅のマント。

それは前の世界で彼が毎日着ていた服であり、この世界では家にいるときに着ている服だった。

そして何より彼が驚いたのは、共に戦い続けた相棒であり、戦いの途中で失ってしまった彼の愛銃【ケルベロス】が彼の右手の中にあつたのだ。

仮面の男A「ば、バカな！？デバイスを持っていなかったハズだ！」

仮面の男B「落ち着け！………貴様、どう言うことだ？」

ヴィンセント「デバイス？」

驚愕している仮面の男達が放った聞き慣れない言葉に、ヴィンセントは疑問を疑問で返した。

仮面の男B「何も知らないようだな………まあ、いい。………いくぞ！」

これ以上、聞いても無駄だと悟った男の足元が光り魔方阵が現れた。そして男の周囲に魔力弾が大量に形成され、それら全てがヴィンセントに向けて発射された。

その数、全部で15発。

それら全てがヴィンセントを穿とうと迫り来る。

ヴィンセントは咄嗟にケルベロスを構え、引き金を五度引いた。

ケルベロスから放たれた魔力弾は、男が放ってきた魔力弾とは全く違っていた。

一つ…色である。

男の魔力弾が蒼白色なのに対し、ヴィンセントの魔力弾は鮮紅色である。

二つ…魔力弾の形である。

男の魔力弾は球体であるのに対し、ヴィンセントの魔力弾はハンドガンの弾と同じ形をしている。

魔力弾と言うよりは弾丸と言った方が正しいのかも知れない。

三つ…質量差である。

男の魔力弾は握りこぶし程の大きさなのに対し、ヴィンセントの弾丸は親指ほどの大きさしかないのである。

しかし、ヴィンセントの弾丸は意図も簡単に男の魔力弾を打ち消した。

四つ…魔力弾の速度である。

それこそ圧倒的な差があるのである。

男の魔力弾の数倍の速さでヴィンセントの弾丸は放たれているのである。

仮面の男A「ば、バカな！？……ぐっ！」

男が驚くのも束の間、ケルベロスから放たれた弾丸は相手の魔力弾を打ち消すだけでは飽きたらず、仮面の男を穿とうと瞬く間に迫った。

高速で迫り来る弾丸に男はかわしきれず、数発が擦ってしまった。

仮面の男A「くそっ！はあああああ！！」

悪態を付き、叫び声と共に突っ込んできた男の蹴りに対し、ヴィンセントは最小限の動きでかわし、頭部に向けて引き金を引いた。

仮面の男A「ぐあああああああ！！！！」

仮面の男B「ロツテ！！くそっ！」

男に当たった弾丸は爆発し、吹き飛ばした。

吹き飛ばされた男は意識を失い、気絶していた。もう一人の男は吹き飛ばされた男を抱き抱えると、足元に再び、魔方陣を展開して消えていった。

ヴィンセント「逃げられたか……。」

そう呟いたが、懸念すべきはその事ではない。

先程の電子音、いきなり変わった服、そして失った筈の愛銃【ケルベロス】。

その事を考えようとしたが、再び、光に包まれ、目を閉じてしまった。

そして、目を開けると

ヴィンセント「……………どうなっているんだ？」

ヴィンセントの服はスーツに戻っていた。

手に持っていたケルベロスは既に消えてしまっていた。

そして、消えていった子供達がいつの間にか戻っていたのだ。

何が起こったのかはさっぱり分からず、ヴィンセントは暫しの間立ちずくんだが、取りあえずは家に帰る事にした。

帰り道を歩きながら、ヴィンセントは男が襲撃してきた理由を考えていた。

突然現れ、無言で攻撃してきた謎の男。

そして、奴等から感じた気配は普段から感じている物だった。誰かにつけられている、誰かに監視されている……そう感じたときの物と同じだったのだ。

だが、奴等の狙いははやてではなく自分だった。

一瞬、アリサが誘拐されたときに戦った奴等の仲間かと考えたが、奴等には魔力が無いことを思い出したので却下した。

仮面の男達は間違いなく魔力を使用していた。

現在、ヴィンセントの近くにいる者で魔力を持っているのはヴィンセントとはやてだけである。

他には、はやての部屋にある鎖で縛られている奇妙な本である。

ヴィンセント（……………まさかな。）

ヴィンセントは仮面の男達の狙いはあの奇妙な本かもしれないと考えたが、少し思索した後、否定した。

もし、奴等の狙いはあの本だとするならば、不自然な点がある。あの本が目当てならば、誰もいない時を見計らって盗めばいい。今日のようにヴィンセントを襲撃する必要はない筈だ。

ヴィンセント（いや……………奴等の狙いは私か。）

奴等の狙いは間違いなく自分だった。

もし、はやてが狙いだったのならば自分を襲撃するのではなく、彼女を狙えばいいのだから。

ヴィンセント（それとも……………狙いははやてか？）

奴等の本当の目的がはやてだとすると、益々意味が分からなくなる。

だが、全てが繋がっていた事件を経験しているヴィンセントはこの考えが一番近いかも知れないと考えた。

そうこう考えている内に家に着いたので、ヴィンセントは思考を止め、家の中に入っていった。

ちなみに服が汚れている事に気が付いたはやてに、何があつたかを問いただされたのは言つまでもない。

……………無論、なんとか誤魔化したが。

【第9話】二つの仮面と残された謎（後書き）

今回は英語を使っていますが、作者は基本的に英語が出来ません。ですので、今後はデバイスも日本語化すると思いますのでご了承ください。

【第10話】 真実と幻想、新たなる力（前書き）

会話文が多すぎるような……。

文章がgdgd過ぎないだろうか……？

他の作者様と似すぎとか言われないだろうか……？

心配事が尽きません……。

そんなことは兎も角、第10話をご覧ください。

## 【第10話】 真実と幻想、新たなる力

ヴィンセントが襲撃を受けた日から年も明けて1月。

あの日からヴィンセントは毎日のように、己の携帯電話につけられたケルベロスレリーフを眺めていた。

もちろん、何故レリーフを見ているのかと、はやてに何度も聞かれたのは言うまでもない。

時刻は午後11時を回った所、はやては既に夢の中、ヴィンセントは自室にて又もやケルベロスレリーフを眺めていた。

ちなみにヴィンセントは、はやての父の部屋を自分の部屋として使っている。

あの日以来、彼の頭の中にあるのは襲撃を受けた際、突然現れた愛銃【ケルベロス】の事だった。

戦闘終了後、直ぐに消えてしまったので詳しいことは分からないが、あれは間違いなく長年使い続けてきたケルベロスだった。

しかし、銃口から放たれたのは鉛の弾丸ではなく魔力な弾丸だった。マテリアを使用すれば、銃口からは属性が付与された魔弾を放つことができたが、あの時銃口から放たれたのは、間違いなく自分自身の魔力の塊だった。

マテリアを使用せずに魔法を行使する事など、彼にはできない筈なのだが、彼は実際にやってのけたのだ。

そして、仮面の男達が言っていた【デバイス】と呼ばれるもの。デバイスとは一体なんなのか……見たことも聴いたこともないのが現状である。

だが、どれだけ考えても出ることのない答えを追い求めるのは無駄だと考え、彼自身も眠ることにした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヴィンセント「……また、ここか……。」

眠りについたヴィンセントは、再び、己の精神世界に来ていた。  
彼がここにいる理由、それが分かるのに大して時間はかからなかつた。

ヴィンセント「居るんだらう？ルクレツィア。」

本来、消えていった彼女が、ここに居る筈はないのだが

ルクレツィア「気付いていたんだ……。」

その言葉と共にルクレツィアは現れた。

ヴィンセント「久しぶりだな……。」

ルクレツィア「うん……久しぶりだね。」

今の二人の間にかつての戸惑いはなく、誰が見ても仲のいい友人同士  
の挨拶に見えるだろう。

実際、ヴィンセントとルクレツィアはお互い微笑んでいた。

???「ふっ……仲が良いな、お二方。」

ヴィンセント「ッ!？」

突然聴こえた声に、ヴィンセントは思わず身構えたが

ルクレツィア「大丈夫だよ……。出てきて。」

ルクレツィアはヴィンセントを安心させるように笑いかけ、声の主  
に出てくるように促した。

???「安心なされよ、我がロード。我が分かるか？」

その言葉と共に白い空間が歪んで現れたのは、黒い姿態をした三つ  
首の巨大な犬だった。

ヴィンセントは彼の放った【ロード】と言う言葉に一瞬戸惑ったが、

その雰囲気はとても馴染みあるものであり、つい最近、突然現れて消えていったかつての愛銃と酷似していた。

ヴィンセント「まさか………ケルベロス？」

ケルベロス「やはり覚えてくれていたか、我がロードよ……。」

ヴィンセントの問いかけに、ケルベロスは嬉しそうに肯定の意思を示した。

だが、ヴィンセントには腑に落ちない事がいくつかあった。

ヴィンセント「ルクレツィア、説明してくれないか？」

そこで、先程から様子を眺め続けている彼女に質問した。

ルクレツィア「ふふ、ええ………分かってるわ。」

彼女も分かっていたのか、少し真面目な顔になり、説明し始めた。

ルクレツィア「あなたがこつちの世界に来たとき、銃と一緒に落とってしまった筈のレリーフがあったでしょ？」

ヴィンセント「ああ。」

ルクレツィア「あれがこの子、ケルベロスなんだ。あなたが世界を渡る際、こちらでも使えるように私がデバイスに改造したんだ。」

ヴィンセント「デバイスとはなんだ？」

ヴィンセントの疑問はそこだった。

始めて聴く単語ではないが、どういう物なのかは全く知らなかった。ルクレツィア「こつちの世界には次元世界というものがあるの。たくさんの世界が存在するって考えてもらえればいいよ。その中には魔法文化が存在する世界があつて、魔法を使用する人の事を魔導師つて言うの。デバイスは魔導師が魔法を行使するのに必要な道具なんだ。」

ヴィンセント「それでは、私も魔導師なのか？」

ルクレツィア「うん。魔導師が魔法を使用するにはリンカーコアが必要なんだ。これが無いと魔法を行使できないの。」

ヴィンセント「そうか……。」

リンカーコアについては以前、彼女から説明を受けているので直ぐに理解できた。

どうやら自分にはリンカーコアが存在し、ルクレツィアは自分が魔法を行使できるように、ケルベロスをデバイスに改造したようだ。

ヴィンセント「私が襲撃された時の事を知っているか？」

ルクレツィア「うん……。」

ヴィンセントの質問にルクレツィアは表情を暗くした。

だが、直ぐに元に戻して彼の言葉を待った。

ヴィンセント「あの日まで私の元にケルベロスは現れなかった。突然現れたと思つたら直ぐに消えてしまった。それがどう言うことか分かるか？」

ルクレツィア「うん。ケルベロスを改造したのはよかったんだけど……私はこっちの世界にあまり介入できないから、完全に改造することができなかつたんだ。そこで、私の残された精神とケルベロスをリンクさせて、ゆっくりと完成させていったの。」

ケルベロス「だが、完成間近だったとき、ロードが襲撃された。」

ルクレツィアの説明を繋げるようにケルベロスがそう言った。

ケルベロス「ロードの戦い方は接近戦で力を発揮する物ではない。だが、あの状況では内に潜む魔獣を覚醒させねばならなかつた。」

ルクレツィア「あなたは気付いていないかもしれないけど、あなたの身体はディーブグラウンドとの戦いでボロボロなんだ……。こっちの世界に流れ着いてからは平穩に暮らしているからもう少して完治するのに、あそこでガリアンビーストを開放したら取り返しのつかない事になりかねなかつた。だから、無理矢理完成間近のケルベロスを起動させることにしたんだ。」

ヴィンセントは自分の身体の事を知らなかつた事を悔いた。

もしもあの時、開放していたら、はやてを悲しませることになつていたからだ。

ルクレツィア「ごめんなさい……。あなたにちゃんと伝えておくべきだつたよね。」

ヴィンセントの考えていることを感じ取つたのか、ルクレツィアは謝つた。

ヴィンセント「気にするな……あれは私の落ち度だ。」

だが、ヴィンセントは悪いのは自分だと言わんばかりに、彼女の謝罪を受け取らなかった。

ルクレツィア「でも……………」

ヴィンセント「気にするな。やはり君は思い込みが激しいぞ。」

それでも謝ろうとするルクレツィアにヴィンセントは少し呆れてしまった。

ヴィンセントの言葉が予想外だったのか、彼女は頬を膨らませて彼を睨んだ。

ルクレツィア「もう……………でも、ありがとう。」

だが、暫くして微笑みながらお礼を言った。

ケルベロス「お二方、もう宜しいか？」

ルクレツィア「え、ええ……………」

ヴィンセント「すまない……………」

二人の妙な空気に気まぎれなくなったケルベロスが口を挟み、話題を元に戻した。

ルクレツィア「話を元に戻すね。完成間近だったケルベロスは使用した影響でメンテナンスが必要だったんだ。それで本来渡す筈だった先月に渡せなかったんだ。」

ヴィンセント「そうか……もう一つ、聞きたいことがあるんだが……」

ケルベロスが現れた過程は理解したが、彼にはもう一つ聞かなければならないことがあった。

ルクレツィア「なに？」

ヴィンセント「私の身体は、いつ頃完治するんだ？」

それは自身の身体の事だった。

もし再び、仮面の男が現れた際、あの力を使わないとは言いきれないからだ。

そうなれば、はやてを守ることにすら出来なくなる。

ルクレツィア「それは今から大体3ヶ月くらいだね。桜の咲く季節

……それが完治するときだね。」

ヴィンセント「そうか……ありがとう。」

ルクレツィア「ケルベロスは完成しているから安心して。暫くの間はこの子だけになるけど、私が全力で作ったあなたの相棒だから。」

ケルベロス「よろしく頼むぞ……我がロード。」

そう言ってケルベロスは銃の姿となり、ヴィンセントの右手に収まった。

ヴィンセント「ああ……こちらこそ、宜しく頼む。」

ヴィンセントもそう言ってケルベロスホルスターに収めた。そして、ルクレツィアを見ると彼女の身体が透け始めていた。

ルクレツィア「もう、時間だね。」

ヴィンセント「ああ……そうだな。」

ルクレツィア「あの子を……守ってあげてね？」

最後にそう言って、彼女は消えていった。

ヴィンセント「分かっている……それが私のすべき事だ……家族としてな……。」

誰もいない空間の中……彼の声は小さくとも響いていた。

・

・

・

・

・

ヴィンセント「……………」

薄暗い部屋の中でヴィンセントは静かに目を覚ました。

時刻は午前6時。

はやては未だ寝ている時刻である。

ヴィンセント「ケルベロス……起きているか？」

彼は自分の携帯電話に繋がれたレリーフに目を向けた。

ケルベロス ああ……どうした？ロード。

夢の中とは違い、電子音の混じったケルベロスの声に少し戸惑ったが、大したことではないので気にしないことにした。

ヴィンセント「これから宜しく頼むぞ。」

ケルベロス 無論だ、我がロードよ。

部屋の中に静かに響く声は、互いに認めあった友のような雰囲気醸し出していた。

【第10話】 真実と幻想、新たなる力（後書き）

ケルベロスのCVは諏訪部順一さんにしています。

雰囲気、合っているんだろうか？

【番外編】無印直前〜ヴィンセント・ヴァレンタインの設定〜（前書き）

PV：27000アクセス突破！！

ユニーク：3000人突破！！

正直、驚きました……。

読者の皆様、こんな駄文を読んで頂き、本当にありがとうございます！！！！

名前通り、今回はヴィンセントの設定です。  
他にもケルベロスの設定があります。

それではどうぞ。

ネタバレになっていないだろうか……？

【番外編】無印直前〜ヴィンセント・ヴァレンタインの設定〜

この小説に置けるヴィンセントとケルベロスの設定を書かせていただきます。

名前：ヴィンセント・ヴァレンタイン

身長：184cm

体重：不明

血液型：A型

誕生日：10月13日

年齢：57歳（外見年齢27歳）

《海外版のプロフィールを採用》

魔導師ランク

（通常）S+

（リミットブレイク）SS+

魔力値ランク

（通常）S

（リミットブレイク）SS

## 【概要】

長い黒髪をした長身の男性で、物静かな性格。何事にも関心がないように見えるが、決して冷徹な人間ではなく、内には熱い感情を秘めている。

黒の服と赤いマントを羽織り、左手は義手を付けている。

外見年齢は27歳だが、宝条の人体実験を受けた結果、身体の中にガリアンビーストが同居するようになり、身体の老化が止まってしまう。

以後、神羅屋敷の地下でひっそりと眠りについていたが、クラウドたちと出会ったことで、悪夢と戦う事を決意し、仲間と共に星を救った英雄の一人となった。

3年後の戦いで、自身の身体のコモドを知った。

その際、一途に想い続けた最愛の女性【ルクレツィア・クレシエン】の想いを知り、己を取り巻いた因縁を断ち切るため、自分の中の力オスを覚醒させ、戦いに終止符を打とうとした。

しかし、オメガは滅びることはなく、ヴィンセント自身もオメガと共に平行世界に渡ってしまった。

現在は渡った際に出会った少女【八神はやて】と暮らしながら、海鳴市立図書館で司書補佐として働いている。

戦闘スタイルは中距離からの支援を主とし、時には接近戦もこなすオールラウンダー。

だが、接近戦は対一の時はどれだけの猛者が相手でも身体能力や体術を駆使して勝ち抜けるが、一対多数……それもかなりの使い手になると接近戦だけでは苦しくなってしまう。

## 【補足】

《リミットブレイク》

ガリアンビーストに変身中。

使用すると魔力をかなり消費する。

デバイス名：ケルベロス

種類：インテリジェントデバイス

術式：ミッドチルダ式

形状：銃

待機状態：レリーフ

カートリッジ：手動装填型 6 発 × 3

#### 【概要】

三つの銃身を持つ特殊な拳銃。銃身部分にはケルベロスの装飾が施されており、グリップにはケルベロスレリーフが取り付けられている。

長年、ヴィンセントが使用し続けた愛銃を、ルクレティアがこの世界でも使い続けられるように改良したもの。

カートリッジを使用せずとも魔力弾を使用できるようになっている。また、カートリッジロード時は、一気に3発ずつ使用する。

ヴィンセントの精神世界では具現化する事が可能で、ヴィンセントの事をマスターとして、友として心の底から信頼している。

搭載されているAIは非常に特殊で、ユニゾンデバイスのAIに非常に近い。

現在のミッドチルダの技術では解析すらもできない程、複雑な構造をしている。

他にも何らかのシステムを積んでいる。

【番外編】無印直前〜ヴィンセント・ヴァレンティンの設定〜（後書き）

技の解説などは登場した際に書かせていただきます。

【第11話】桜の季節〜始まる物語〜（前書き）

遂に無印開始です。

こんな感じだろうか？

出来ればご感想をお願いします。

それではどうぞ。

【第11話】桜の季節〜始まる物語〜

季節は4月……桜の咲く季節である。

あれから仮面の男達からの襲撃もなく、ヴィンセントの身体も無事完治した。

はやて「ヴィンセントさん、あの本取ってきてくれへん？」

ヴィンセント「これか？」

はやて「うん、それや。おおきに。」

このように、はやてが取れない本をヴィンセントが取るという光景がほぼ毎日、図書館で見られるのは言うまでもない。

ヴィンセントがこの世界に来てから、はやてはよく笑うようになった。

リハビリにも人一倍真剣に取り組み、早く歩けるようになってきている。

石田医師ははやての変わるきっかけとなったヴィンセントに礼を言っただが

ヴィンセント「私はなにもししていない……彼女が変わったのは彼女自身の力だ。」

そう言って、一向に礼を受け取らなかつた。

石田医師もヴィンセントの言葉に渋々と引き下がったが、はやてが歩けるようになった際には礼を受け取って欲しいと言うと、ヴィンセントもそれを了承した。

まあ、お互いが微笑んでいた現場にはやてが出会した際、はやてが  
石田医師に【O H A N A S H I】したのは言うまでもない…  
…。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヴィンセント「そろそろ帰るぞ。」

はやて「せやな。今夜はすき焼きやで。楽しみにしてや？ヴィ  
ンセントさん。」

ヴィンセント「ああ。」

時は進み、時刻は夕方……丁度いい時間である。  
そうして、彼等は図書館を後にした。

家路に着き、海沿いの公園に入ったとき、はやてが突然口を開いた。はやて「そう言えば……今日、夢の中で【助けて】って声が聴こえたんよ。」

ヴィンセント「……………はやてもか？」

はやてが言った言葉に、ヴィンセントも心当たりがあった。それは夢の中で聴こえた、何者かが助けを求めた声だった。ヴィンセントは以前、ケルベロスから念話と言うものを教えられているので、これが念話だということには気付いていた。同時に巨大な魔力を感じたが、大したことではないと思うことにした。

はやて「“も”って事はヴィンセントさんも？」

ヴィンセント「ああ。だが……………なぜ？」

ヴィンセントの疑問は、はやてが念話を聴いた事ではない。この世界は次元世界の1つ【地球】と呼ばれる世界で、この世界に魔法は存在しない筈である。素質がある者が時々現れるとはケルベロスから聞いているが、本来知られる筈の無い魔法を使用する者がこの世界にいる筈がないのだ。ヴィンセントの知っている範囲で、魔法の事を知っており尚且つ素質がある者ははやてだけである。では、魔力を感じたか？考えられる事は何者かが次元の壁を越え、この世界に辿り着いた事くらいだろう。

同時に、魔力を放出する道具を使用或いは暴発させたか……………。

はやて「……………ヴィンセントさん？」

ヴィンセント「……………気にしても仕方がない。はやて、この事は忘れる。」

はやて「う、うん……………」

はやての呼び掛けに我に返ったヴィンセントは、彼女にこの事を忘れるように言った。

はやては一瞬戸惑ったが、有無を言わさないヴィンセントの迫力を感じ取り、気にしないことにした。

ヴィンセント「早く帰ろう……………私たちの家に。」

はやて「あ……………うん！」

先程の空気は何処やら……………微笑ましい雰囲気を感じながら彼等は帰っていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

その日の夜、ヴィンセントははやての部屋にいた。

はやては既に夢の中である。

何やら不安になったらしく、今日は一緒に寝て欲しいそうだ。

その際、【上目遣い】×【涙目】の凶悪コンボを繰り出したのは言うまでもない。

ご丁寧にヴィンセントがどこかへ行かないよう、マントの裾を掴ん

でいる。

ヴィンセント自身も諦めて眠ろうとしたその刹那

ヴィンセント「ッ!？」

巨大な魔力を感じ取り、不意にベランダを見た。

幸い、カーテンは閉められておらず、その場から見る事が出来た。彼が見たのは桃色の巨大な光だった。

闇夜に真っ直ぐ伸びた光は非常に美しかったが、そこからは非常に高い魔力が感じられた。

ケルベロス　ロード……。

ヴィンセント「ああ……始まるのか？新たな物語が……。」

不意に呟いたその言葉の意味を知るものは、恐らくはいない……。

【第12話】青い宝石〜星光の少女〜（前書き）

過去最長です。

ちなみにかなりroad roadです……。

技が出てくるので、その説明を後書きに書いておきます。

それではどうぞ。

【第12話】青い宝石と星光の少女

巨大な魔力を感じた日から数日、ヴィンセントは翠屋に向かっていた。

ちなみにはやては定期検診である。

終了後に迎えに行くと言束を交わし、その間、久しぶりにあの店で過ごすことにした。

始めてあの店に行つて以来、ヴィンセントはちよくちよくと翠屋に来店していた。

店の店主【高町士郎】とヴィンセントの仲はあの日以来非常によく、時々、夜の街で酒を飲む仲でもある。

一度、彼の息子【高町恭也】も来たことがあったのだが、酔つた際にシスコングリを異常なまで発揮し、何故かヴィンセントに攻撃してきたので、ヴィンセントと士郎の二人によつて完膚無きまでに叩きのめされた。

もちろん、帰つた際に母【桃子】によつて O H A N A S H I された訳で……。

何の問題も無く、翠屋に着いたヴィンセントは扉を開けた。

士郎「いらつしゃ……ヴィンセントか？久しぶりだな。」

桃子「あらあら、お久しぶりね？」

ヴィンセント「ああ……久しぶりだな。士郎、桃子。」

客の来店を告げる鐘と共に自身を出迎えてくれた高町夫妻に、ヴィンセントも静かに礼を返した。

士郎「取りあえず座ってくれ。」

ヴィンセント「ああ。」

士郎の薦めに乗リ、ヴィンセントはカウンター席に着いた。士郎が桃子に目配せしたので、ふと彼女の方を見ると、彼女は【lose】と書かれたプレートを扉に掛けていた。

ヴィンセント「なにをしているんだ？」

士郎「ん？……見た通りさ。」

ヴィンセント「……なぜ？」

ヴィンセントの疑問は至極当然だった。いくら店内に彼以外の客がいないからと言って、態々店を貸し切りにする理由が分からなかった。だが、次に士郎の放った言葉は以外だった。

士郎「……君に相談があるんだ。」

桃子「聞いてもらえないかしら？」

いつの間にか戻ってきていた桃子も真面目な顔で問いかけてきた。もちろん、ヴィンセントもこの世界でできた友人の頼みを断る筈もなく

ヴィンセント「……私で構わないのなら、問題ない。」

意外とあっさり了承した。

士郎「すまない……ありがとう。」

桃子「突然ごめんなさい……所でご注文は？」

ヴィンセント「ブレンドとシュークリームを頼む。」

桃子「ええ、分かったわ。」

士郎「少し、待っていてくれ。」

そうして、二人は店の奥に消えていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

暫くして高町夫妻がキッチンからコーヒーとシュークリームを持って来た。

士郎はヴィンセントの隣に座り、その隣に桃子が座る形となった。全ての準備が終わり、士郎が静かに口を開いた。

士郎「相談と言うのは……なのはの事なんだ。」

どうやら彼の悩みは高町家の末っ子【高町なのは】の事らしい。

心優しく、大人しい正確で近所からはとてもいい子だと言われているらしい。

ちなみにヴィンセントはなのはと美由希には会ったことがなく、士郎の話でしか知らない。

士郎「最近、夜にこっそり家を抜け出すんだ。怪我も無く、無事に帰ってくるから特に何も……いや、気付いていないふりをしているんだが……どうにも心配だな。」

ヴィンセントは口を挟まず、士郎の話を静かに聞いている。

士郎「最近、疲れた表情をしていたから理由を聞いてみたんだが大丈夫だよ、心配しないで」と、言われてしまったな……。」

桃子「あの子……あの日からそうなのよ。」

ヴィンセント「……あの日?」

桃子の言葉にヴィンセントは遂に口を挟んだ。

桃子「士郎さんが昔、大怪我を負った話は聞いたかしら?」

ヴィンセント「ああ。」

その事は士郎から聞いていた。

彼は昔、己の武術を使ってボディガードのような仕事をしていらしい。

要するにタクスのような物らしい。

だが、翠屋を経営し始め、自身も引退しようと考えていた矢先、突然の不意を突かれて大怪我を負ったらしい。

奇跡的に助かったが、今でも苦い思い出らしい。

桃子「あの日から私はこの店の経営ばかりに集中してたわ。長女の美由希は土郎さんの看病、恭也は土郎さんの仇を取るうと無茶ばかりしてた……。」「

つまり、なのは誰にも構ってもらえない状況だったようだ。

だが、土郎に聞いた通りの正確ならば自分も手伝うと言い出しそうだ。

桃子「そんなとき、なのはが自分も手伝いたいって言ってきてくれたわ。」「

ヴィンセント（やはりか……。）

やはりヴィンセントの考えは的中していた。

桃子「でも、私たちはあの子に心配させたくなくて……。【大丈夫、心配しないで】って言ったの……。でも……。」「

土郎「あの子はそれ以来、自分は要らない子だと思ってしまったみたいだ。私が退院してこの家に戻ってきた時には、私たちに甘えようとしないう大人びたようになっていたんだ。」「

ヴィンセント「つまり、誰にも迷惑をかけなければ要らない子にはならない……。そう彼女は考えたんだろう。」「

ヴィンセントの言葉に高町夫妻は驚き、俯いて黙り込んでしまった。どうやら凶星のようだ。

ヴィンセント（こんなところにもいたとはな……。）」

彼の考えている人物はもちろんルクレツィアだ。

どうやら、なのはの思い込みの激しさはルクレツィアと同じかそれ以上かも知れないと、ヴィンセントは思ってしまった。

しかし、彼からすればこの高町夫妻も随分、思い込みが激しいように見えるだろう。

ヴィンセント「お前達は、彼女に甘えて欲しいのか？」

士郎&桃子「もちろんだ（よ）！」

士郎「あの子は私たちの娘だ！」

桃子「なのはが辛くて、悲しいこととかがあったのなら……私たちが助けてあげたい！」

士郎「君に聞きたいのは、私たちはどうするべきなのかって事なんだ……。このまま待つべきなんだろうか？なのはが甘えてくるのを……そして、最近出歩いていることを聞くのも。」

士郎と桃子の想いは、子を想う親として当然だった。

だが、その想いを聞いたヴィンセントはそれを知ったからこそ疑問があった。

ヴィンセント「お前達の想いを……彼女は知っているのか？」

士郎達の話聞いていて可笑しな点があったのだ。

もし、なのはがその想いを知っていて、それでも彼らに【迷惑をかけてはいけない】【要らない子にはなりたくない】思っているの

なら、それはただの勘違いでしかない。  
だが、なのはがその想いを知らないのならば話は別だ。  
なぜなら、彼女は“なんにも”知らないのだから。  
ヴィンセントにも経験がある。

“なんにも”知らなかったが故に長い間、過去に囚われ続けたのだから……。

だが、今なら言えるだろう……最も大切な事は何なのか？

士郎「いや……。」

桃子「きつと……いえ、知らないわ。」

士郎と桃子の返答にヴィンセントは思わず“やはりな”と呟いた。  
ヴィンセント「何が正解などと、私には言えん。答えなど……数え  
切れないほどあるのだからな。」

士郎「そ、それはそ……だが……う……え？」

ヴィンセント「……言葉にしなければ、何も伝わりなどしない。」

ヴィンセントの言葉は、今の士郎達が答えを得るには十分だった。彼の言葉には重みがあった。

それも、自身が身を持って経験してきたと言わんばかりの……。聞いた直後は呆気にとられていたが、答えを得たように微笑みだした。

士郎「ふっ……確かにそうだな。」

桃子「どうして今まで気付かなかったのかしら……。」

どうやら悩みは解決したようだ。

ヴィンセント「答えは見つかったようだな……。」

ヴィンセントもふつと笑った。

士郎「ああ………すまない、ありがとう。」

桃子「あなたのおかげだわ……本当にありがとう。」

ヴィンセント「気にするな。知っているだけだ……それ故に私は……」

ヴィンセントは思わず自身の過去を話し掛けたが、今は話すべきではないと考え、口を嗣ぐんだ。

もちろん士郎達には聴こえていたが

士郎「いつか話してくれ……君の過去を。」

桃子「その事で悩みがあるなら、私たちが聞くわ……ね？」

ヴィンセントから話すのを待つそうだ。

自身の過去については決別しているので悩みなどは無いのだが、彼らには悩んでいるように見えたようだ。

ヴィンセント（つくづくお節介な連中だ……。）

そう思いながらも、彼の表情は非常に嬉しそうだった。

ヴィンセント「そうだな……いずれ話すさ。」

士郎&桃子「「待っているよ（わ）。「」」

ヴィンセント「ああ。」

話が一段落し、乾いた喉を潤すためにコーヒーを飲もうとティールップに手を着けた瞬間、士郎が口を開いた。

士郎「しかし……君はいつたい何歳なんだ？」

桃子「その若さで、随分と凄まじい人生を歩んでいるように見えるけど……。」

士郎達の質問は至極当然だった。

ヴィンセントの外見は20代後半にしか見えないので、彼らはヴィンセントが年下だと思っているらしい。  
ヴィンセントは特に問題は無いと考え

ヴィンセント「……57だ。」

自らの年齢を暴露し、少し冷めたコーヒーを喉に流し込んだ。

士郎「……」

桃子「……」

士郎&桃子「なんだってー（なんですってー）！！！！」

昼下がりの翠屋に、巨大な叫び声が響いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

士郎「ところで今度旅行に行くんだが……君もどうだ？」

桃子「もちろん、はやてちゃんも一緒に。」

あれからどうしてそんなに若く見えるのか二人に散々問い詰められたが、過去が関係していると言うと潔く引き下がった。

いつか話してくれると信じているのだろう。

そして現在、今度旅行に行くそうさ。

話によると、なのはの親友のご家族も一緒に行くそうさ。

その際、はやてと共に行かないかと誘われているが

ヴィンセント「すまないが……その日は仕事だ。そして、はやては定期検診だ。」

士郎「そうか……残念だ。」

桃子「みんなにあなた達の事を紹介しようと思っていたのだけれども……。」

士郎と桃子は非常に残念そうだ。

ヴィンセント「いずれまた、誘ってくれ。」

士郎&桃子「ああ（ええ）」

そして、暫く雑談をした後、はやてから連絡があったのでヴィンセントは翠屋を後にした。

……翠也のシュークリームが入った箱を手にとって。

その後、はやてを迎えに行った際、シュークリームは石田医師を交えて美味しく戴いた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

翌日、ヴィンセントは仕事がはやく終わったので、はやてと共に買い物に向かった。

買い物も無事に終わり、帰り道を歩いていると

ヴィンセント「ッ！？はやて！！」

はやて「ふえ？……な、なんや！？」

巨大な木の根が彼らに迫ってきた。

異変にいち早く気付いたヴィンセントによって、車椅子ごとはやての危険は免れた。

ケルベロス　ロード、最近感知される魔力と波長が同じだ。どうやら近くで暴発したようだ。

ヴィンセント「そのようだな。」

はやて「ヴィ、ヴィンセントさん？……今の声は一体……。」

ヴィンセントとケルベロスはどうやら何が起きたかは瞬時に理解したようだ。

だが、はやては何が起きたか分からず、突然聞いたケルベロスの声に益々、訳が分からないようだ。

ケルベロス　ロード、起動するか？

ヴィンセント「ああ……頼む。」

ケルベロス　了解した……Stand by ready?

ヴィンセント「ケルベロス、セットアップ！」

ケルベロス　Set up!

ケルベロスの電子音と共に、ヴィンセントはバリアジャケットに換装した。

その姿ははやてにとって見慣れた姿であり、だが、何時もよりも遅しく見える姿だった。

はやて「ヴィンセントさん、その姿って……」

ヴィンセント「はやて、一人で帰れるか？」

はやて「う、うん。」

ヴィンセント「ならば先に家に帰れ。後で全て話す。」

はやて「うん……ちゃんと帰ってきてな？」

ヴィンセント「分かっている……行け。」

はやては不安そうにヴィンセントを見つめていたが、彼の意思を読み取ったのか……直ぐにその場を去った。

はやてが見えなくなったのを確認したヴィンセントは、未だ巨大化し続けている大樹に目を向けた。

ヴィンセント「行くぞ……ケルベロス。」

ケルベロス 了解した。

彼はビルに飛び乗り、大樹に向かって駆け出した。

すると、大樹はヴィンセントを敵と認識したのか大量の巨大な根を伸ばして攻撃してきた。

ヴィンセント「……………！」

ケルベロス クライムショット

ケルベロスから放たれた弾丸は巨大な根に当たった瞬間、爆発を起

こして根を消していった。

彼は根つこの一つを蹴って飛び上がり、彼に目掛けて攻撃してきた根つこを全て、正確に撃ち抜いた。

だが、どれだけ攻撃しても直ぐに再生するためヴィンセントも攻めあぐねていた。

ケルベロス　ロード、左方向200m地点に生体反応。同時に魔力も感知した。

ヴィンセント「分かった……そちらに向かうとしよう。」

ビルの上に着地したヴィンセントは、直ぐにケルベロスが感知した生体反応目掛けて駆け出した。

同時にその地点から大量の桃色の光の線が大樹に目掛けて飛んでいた。

ケルベロス　あれは検索魔法のようだ。どうやら核となる場所を探しているのだろう。

ケルベロスの言葉にヴィンセントは何も言わずに頷いた。

そして、光の線が消えたと同時にその場に辿り着いた。

その場にいたのは、見覚えのある栗色の髪をした少女とフェレットのような動物だった。

????「ふえ!?!?だ、誰!?!?」

????「あなたは一体!?!?」

ヴィンセント「ヴィンセント・ヴァレンタイン……あれを封印するの?」

少女とフェレットもどきに彼はそう告げた。

なのは「た、高町なのはです！そうですけど……。」

ユーノ「ユーノ・スクライアです。ヴィンセントさんは一体……？」

ヴィンセントの登場になのは達は非常に驚いていた。

ヴィンセントも彼女が士郎達の娘【高町なのは】だとは思わなかった。たので表情にこそ出さなかったが、内心では少し驚いていた。

だが、今は急を要するのでヴィンセントは淡々と告げた。

ヴィンセント「何が起きているかは知らんが、協力しよう……ケルベロス、封印はできるか？」

ケルベロス 問題ない。

ケルベロスの同意と共にヴィンセントは銃口を大樹へと向けた。

なのは「は、はい！レイジングハート、お願い！」

レイ シューティングモード

彼女のデバイス【レイジングハート】が変形し、先端が音叉状になった。

どうやら砲撃仕様のようだ。

ヴィンセント「行くぞ……！」

ケルベロス ルシファードライブ

なのは「はい！ダイバイイン……」

ケルベロスの先端には鮮紅色の魔力、レイジングハートの先端には桃色の魔力が収束された。  
そして

ヴィンセント「ルシファードライブ！」

なのは「バスター！！」

圧倒的な……暴力とも取れる巨大な魔力は、大気を貫きながら街を覆う大樹を覆い隠した。

レイジングハート Stand by ready?

なのは「リリカルマジカル！ジュエルシールドシリアル？、封印！！」

レイジングハート Sealing

先程まで大樹があった場所にはシリアルナンバーが浮かび上がった青い宝石【ジュエルシード】が浮かんでいた。

ユーノ「す、凄い……」

その光景を近くで見ていたユーノは、二人の砲撃魔法の凄まじさに驚きを隠せないでいた。

・  
・

・  
・  
・

夕焼けに染まるビルの上に、二人の人間と一匹の動物が佇んでいた。

なのは「周りの人に……迷惑かけちゃったね……。」

ユート「そんな……なのはちゃんとやってくれてるよ！」

なのはの視線は大樹によって破壊された街に向かっていった。

それは災害にあった被災地を思い起こさせる程、凄まじい状況だった。

ヴィンセントの頭には、3年前、メテオ災害によって破壊されたミッドガルの光景が浮かんでいた。

ヴィンセント頭を振り、なのはの方を見た。

今、考えるべきなのは彼女の事である。

高町なのは……間違いなく、高町家の末っ子だろう。

まさか小学3年生の少女が魔導師になっているなどとは夢にも思わないだろう。

恐らく、最近夜中に出掛けるというのは魔法絡みだろう。

そうならば、誰にも話すことなどできないだろう。

そして、彼女が士郎達に聞いた通りの子ならば、この惨状は自分のせいだと思っているのだろう。

それに先程の言動も、自分のせいだと言わんばかりのものだった。

ヴィンセント（世話が焼ける者が多いな、この街は……。）

そう思い溜め息をついたが、嫌な気分ではなかった。  
彼は自分の隣で今にも泣きそうになっている少女の頭を撫でた。

なのは「ふえ……?」

突然、頭を撫でられたために変な声が出てしまったようだ。

目尻に涙を溜めたなのは、自身の頭を撫でている人物を見上げた。

ヴィンセント「何が起こっているかは知らんが、そう自分を責める必要はない。」

なのは「で、でも……」

ヴィンセント「この惨状を防げなかった自分が悪い……そう考えているのか?」

ヴィンセントの言葉に、なのはは俯いて震えだしてしまった。

ヴィンセント（凶星か……。）

やはり彼女は思い込みが非常に激しいようだ……それも、かなりの……。

ヴィンセント「過ぎた時は戻りはしない。過去に囚われ続けても、何も解決はしない。」

ユーノ「そんな言い方しなくても!!」

ヴィンセントの言葉になのは更に俯いてしまった。

その様子を見たユーノも口を挟んだが、ヴィンセントは構わず、言

葉を続けた。

ヴィンセント「迷いを断ち切れ。今の自分に、成すべき事があるのならな……。」

その言葉と共になのは頭から手を離し、背を向けて歩き出した。

なのはもヴィンセントの言葉を聴いて、顔を上げた。

彼女の顔には、既に迷いはなかった。

なのは「あ、ありがとうございます……！」

吃りながらもお礼を言つと、ヴィンセントは立ち止まった。

ヴィンセント「それと……君の両親は心配していたぞ。」

なのは「え？」

その言葉に彼女は驚きを隠せなかった。

初めて会った目の前の男性が、両親の事を知っていたのだから無理はない。

ヴィンセント「全てが終わったら話してやれ。あの二人の事だ……君から話してくれるのを待っていることだろう。それと……。」

つくづくお節介だな……などと考えていたが、ついでなのでもう一言、言っておくことにした。

ヴィンセント「あの二人は、君に甘えて欲しいそうだ……。」

なのは「ふえ……？」

そう言って彼は再び、歩き始めた。  
後ろで可笑しな声が聴こえたが、気にせず帰ることにした。

ただ一人の家族が待つ家へ……。

ちなみに家に帰ってから、はやてに色々と説明することになったの  
は言つまでもない。

【第12話】青い宝石と星光の少女（後書き）

【クライムショット】

誘導性は一切無く、攻撃力と速度に特化した魔力弾。魔力弾の形状はなのはの【アクセルシューター】のような球状ではなく、先端が尖った弾丸のような形。

【ルシファードライブ】

簡単に言うとヴィンセント版【ディバインバスター】。ちなみに威力は【ディバインバスター】の三倍（銃口が三つあるので）カートリッジを使用したり更に魔力を収束して威力を上げることができる。

### 【第13話】青い宝石と閃光の少女

なのはと出会った日から数日、ヴィンセントとはやてはいつもと変わらぬ生活を送っていた。

あの日から2つの魔力反応があったが、直ぐに治まったため気にしないことにした。

恐らく、なのはが封印したのだろう。

だが、ごく最近、なのはとユーノ、そしてジュエルシード以外の魔力も感知している。

彼女達以外にもジュエルシードを回収している者がいるのだろうか？ その考えが一番近いと思ったので、彼は基本的に介入しないことにした。

あのような物を回収してくれる者がいるのならば、自分はやての近くにいてやれる……そう、彼は考えた。

実はヴィンセントはあの日、巨大な魔力の正体【ジュエルシード】の詳細を聞いていない。

彼にしては珍しいミスだ。

詳細の分からない相手とむやみに戦って、怪我をするわけにもいかないと思っているのだろう。

例え怪我をしても、彼の再生能力ははずば抜けているので問題は無いのだが……。

はやて「うーん……」

ヴィンセント「？……どうした？」

共に昼食を取っていると、はやてが唸りだした。

はやて「あ……うん、今夜は何にしようか迷ってるんよ……。」

どうやら、夕食を何にするか迷っているようだ。

ヴィンセントが何も言わずにいると、彼女は再び、唸りだした。

ヴィンセント「ふっ……。」

はやて「ああ！ヴィンセントさん、何笑とるん！？」

あまりの光景にヴィンセントが笑ってしまい、それを見たはやては頬を膨らませて怒りだした。

ヴィンセント「ふっ……すまない。」

はやて「むー……ホンマに悪い思てんの？」

ヴィンセント「ああ……今夜は外で食べるか？」

はやて「なんか、上手いこと話ずらされたような気がするけど……まあ、ええわ。その代わり、ヴィンセントさんの奢りな？」

話をずらされた仕返しに、ヴィンセントに奢るように言ったが

ヴィンセント「分かった。」

はやて「ッ！？……／＼／＼／＼」

真顔で言い返され、しかもその顔を間近で見てしまったため、はやては頬を赤らめた。

ヴィンセント「休憩は終わりだ。帰るまでにどこへ行きたいか考えておいてくれ。」

そう言つて、彼は先に図書館の中に戻つていった。

一方、はやては

はやて「……あの顔はカッコよすぎやで………／＼／＼／＼／」

頬を赤らめたまま小一時間、その場で固まっていたそうだ。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヴィンセントとはやては海鳴の街を歩いていた。

あれから時は進み、午後5時。

夕食時にはまだ早い時間である。

あの後、はやては結局どこで食べるか決められなかった。

仕事が終わったヴィンセントがはやての元に向かうと、彼女は頬を赤く染め、本は開いていたが逆さになっていた。

原因はもちろん、ヴィンセントにあるのだが、彼が気付くわけもなく……。

そんな事もあり、彼らは街に出てから探す事にしたようだ。暫く雑談をしながら歩いていると公園に入った。

ヴィンセント「？」

はやて「？……ヴィンセントさん？」

突然立ち止まったヴィンセントに、はやては疑問の言葉を投げ掛けたが、彼は無言のままベンチの元に向かった。

ヴィンセント「これは……。」

彼は視界に入っていたある物を手にとった。

それは、シリアルナンバーが浮かんでいる青い宝石だった。間違いなくジュエルシードである。

はやて「ヴィンセントさん、それは。」

いつの間にか、はやてが自分で車椅子を動かして彼の横に来ていた。彼女にはこれが何なのかは分からないだろう。

何故なら魔法の事など、ヴィンセントと会うまで知らなかったのだから。

ヴィンセント「いや……少しな。」

はやて「ふーん……綺麗な石やなあ……。」

ジュエルシードなど、彼女の目には綺麗な青い宝石にしか見えないだろう。

だが、これは本来この世界に存在しない筈の物である。しかも、暴発して周囲を破壊する爆弾のようなものだ。

ヴィンセント（後で持っていくでしょう。）

そんな危険な物を放置しておくわけにはいかないの、後ほどなのはに渡そうと考え、ヴィンセントはそれをポケットに入れようとしたが

???「それを渡してください。」

突然、澄んだ声が聴こえた。

そして、声が聴こえた方に目を向けると

???「その石……ジュエルシールドを渡してください。」

金髪の長い髪をツインテールにし、黒い服を着たはやてやなのはと  
同じ年くらいの少女が黒い戦斧のような杖を此方に向けていた。

そして

???「さっさと渡さないと、カブツといくよ!？」

少女の隣には黒いTシャツとジーンズを着て、オレンジ色の髪をした犬耳の女性が此方を威嚇していた。

何故か二人とも、はち切れんばかりの栄養補助食品が大量に入った  
スーパ―の袋を携えて……。

【第14話】夜天と閃光〜意外な展開〜（前書き）

投稿が遅れ、申し訳ありません。

アルバイトが始まったため、今後の更新が遅れると思います。

それではどうぞ。

## 【第14話】 夜天と閃光〜意外な展開〜

フェイト・テストロッサは悩んでいた。

本来、彼女はこの世界【地球】にいる人物ではない。

彼女の出身の地は、この世界ではない世界【ミッドチルダ】という世界である。

では何故、彼女はこの世界にいるのだろうかという疑問ができてしまう。

彼女の目的は古代遺失物【ロストロギア】の一つ【ジュエルシード】を集めることである。

何らかの事故により、搬送中だったジュエルシードがこの世界にばらまかれたらしいのだ。

フェイトはジュエルシードを母に集めてくるように指示され、この街にいるのだ。

彼女自身も母の笑顔が見たいが故、ここにいる。

しかし、ジュエルシードを集める過程で出会った少女がいた。

白いバリアジャケットに身を包み、やたらと魔力が高いが経験が少なすぎる素人魔導師である。

言わずと知れた【高町なのは】である。

彼女もジュエルシードを集めているのだ。

しかし、今のなのはではフェイトの障害にはなりえない。

今までに二回戦っているが、どちらもフェイトの勝ちである。

今後もジュエルシードを巡って戦うことになるのは避けられないだろう。

しかし、フェイトの悩みはそこではない。

彼女は一見、冷静かつ無表情のように見えるが実際はそうではない。寧ろ真逆である。

フェイトは本来、優しい性格なのだ。

いや、優しいなどと言うものではない。

彼女は優しすぎるのだ……。

そんな彼女が人を傷付けるような行為をして、平気でいられる訳がない。

それどころか、戦うことすら辛いのかもしれない。

それでいて、内にその想いを溜め込んでしまうのだ。

疲れない訳がないだろう。

???「……………ト、フェイト！」

フェイト「な、なに！？アルフ。」

突然、大声を上げた自身の使い魔【アルフ】の声にフェイトは驚いてしまった。

アルフの素体は狼で、群れからはぐれて死にかけていたとき、フェイトに助けられ、彼女の使い魔として生まれ変わった。

それ故に彼女への信頼と愛情は非常に厚い。

それ故に彼女は辛いのだ……自分の主人が悩んでいるのは……。

アルフ「どうしたんだい？ぼーっとしちゃってさ……。」

フェイト「う、ううん……早く、ジュエルシードを見つけないとって思っ……。」

実際、考えている事は違うのだが、フェイトにとってアルフは大切な家族である。

故に真実を話せなかった。

アルフ「ならいいんだけどさ……悩みがあるなら言っておくれよ。あたしはフェイトの力になりたいんだからさ。」

フェイト「うん……ありがと、アルフ。」

今のフェイトには、アルフの優しさが嬉しかった。

アルフ「あたしはフェイトの使い魔なんだからさ……当然さ。それより……。」

フェイト「うん、帰ってご飯食べないとね。」

そう言った彼女が持っているスーパーの袋の中には、これでもか……と言っほどの栄養補助食品が入っていた。  
彼女達にとって、これが食料なのだから。

アルフ「これだけあれば、暫くは困らないだろうね。」

フェイト「うん、そうだね。」

なんとも言えない会話をしながら、帰り道の公園を通ろうとすると、二人の人が公園の中にいた。

一方は長い黒髪でスーツを着た長身の男性、一方は車椅子に座ったショートカットの少女である。

だが、男の手にあったのはひし形の青い宝石【ジュエルシード】であつた。

フェイト「それを渡してください。」

彼女はデバイス【バルディッシュ】を起動し、ジュエルシードを持っている男に向けた。まさか、こんな所で見つけるとは思わなかったが、嬉しい誤算である。

男と少女はフェイトの声に反応し、此方を向いた。

フェイト「その石……ジュエルシードを渡してください。」

アルフ「さっさと渡さないと、ガブツといくよ!？」

フェイトは警告と言わんばかりにバルディッシュを彼に向け、アルフは牙を向けて威嚇していた。

ヴィンセントはどうするべきか考えていた。

最近感じたジュエルシード以外の魔力は恐らく、彼女達だろう。

そして目の前にいる少女は、自身が持っているジュエルシードを求めている。

だが、問題は隣にいる女性だ。

こちらがジュエルシードを渡さないと今にも飛び掛かってくるだろう。

現在、隣にははやてもいる……彼女だけでも逃げられればいいのだが、そうはいかない。

最悪の場合、人質に取られてしまうだろう。

ちなみにはやては、状況を理解できずにオロオロしている。

ヴィンセント「これをどうするつもりだ？」

取りあえず理由を聞くことにした。

彼女達が危険な事にジュエルシードを使わないのなら、渡してしまっても構わないからだ。

だが

アルフ「ごちゃごちゃ言っていないでさっさと渡しな！！」

ついに痺れを切らした女性が殴り掛かってきた。

はやて「ひっっ！！」

ヴィンセント「ふっ！！」

はやては驚いて目を瞑り、ヴィンセントはいち早く反応して女性の拳を受け止めた。

アルフ「なっ!?!」

ヴィンセント「落ち着け……取りあえず、話を聴け。」

アルフ「こんのお」アルフ、待って。「……フェイト?」

ヴィンセントが落ち着くように促すと、アルフと呼ばれた女性は再び、殴ろうとしたが、フェイトと呼ばれた少女に止められた。どうやら話し合いはできそうだ。

ヴィンセント「……話を聴いてくれるか?」

フェイト「はい……あ、あの……」

無事に話し合いができるみたいだが、フェイトはなにやら言いたそうだ。

ヴィンセント「?」

フェイト「……その子、大丈夫ですか?」

彼女の指した方には、目を瞑ったまま震えているはやてがいた。

ヴィンセント「はやて、もう大丈夫だ。」

はやて「うう……ホンマに?」

余程怖かったのか、目には涙が浮かんでいた。

フェイト「あうう……そ、その……ごめんなさい!!」

アルフ「ふえ、フェイトが悪いんじゃないよ!あたしが悪いんだ!ごめんよ!」

フェイト「で、でも……」

突然、フェイトが謝りだした。

そしてアルフも謝り出した。

そのまま二人は自分が悪いと言って、一向に譲ろうとしなかった。いきなりの出来事にヴィンセントとはやても驚いてしまった。

だが、このままでは話が進まないの、ヴィンセントは

ヴィンセント「……」

フェイト「ひゃうっ!?!」

アルフ「あうっ!?!」

無言のまま、二人の頭にチヨップを喰らわせた。

突然の痛みに二人もつい驚いてしまい、変な声を出してしまった。

ヴィンセント「このままでは話が進まない……取りあえず落ち着け。」

アルフ「うう……わ、分かったよ……」

フェイト「あうう……ごめんなさい。」

アルフは大人しくなり、フェイトは涙目になって謝ってきた。

はやて「ヴィンセントさん、女の子に暴力はアカンで。」

すかさずはやてが口を挟んだが

ヴィンセント「このままでは話が進まない。時間の無駄だ。」

はやて「うっ……。」

正論で返され、言葉に詰まってしまった。

フェイト「あ、あの……えっと……さっきは驚かせてごめんなさい。大丈夫……かな？」

そこに頭を押さえたフェイトが、戸惑いながらもフェイトに謝ってきた。

はやて「え？……うん、大丈夫や。あっ！わたしは八神はやてって言います。」

突然の謝罪に驚きはしたが、はやては自身の無事を教えた。

また、フェイト達に対して自己紹介をした。

フェイト「あっ！えっと……フェイト・テストロッサです。こっちはアルフ。」

アルフ「アルフだ。」

はやて「フェイトちゃんにアルフさんか……ええ名前やなあ。」  
フェイト「あ、ありがとう……。」

アルフ「ありがとな。フェイトが付けてくれた名前だよ。」

フェイトもいきなりで驚きはしたが、はやての意思を読み取ったのか、彼女も自己紹介をした。

その際、はやてに名前を褒められて顔を赤くした。

一方アルフは主人に付けてもらった名前を褒められ、嬉しそうだ。

その証拠に尻尾を大きく振っていた。

ヴィンセント「ヴィンセント・ヴァレンタイン……二人とも、取りあえず座れ。」

そこで、半分空気と化していたヴィンセントが口を挟んだ。  
どongoの黒いKYか……と、口を挟みたくなるが、この際、良しとしよう。

フェイト「そうですね……アルフはいい?」

アルフ「ああ。」

はやて「あっ!ちょっと待って、ヴィンセントさん。」

これから話し合いになると思いきや、はやてが口を開いた。

ヴィンセント「……なんだ?」

今度は何事かと思ったヴィンセントだったが、はやてが言った言葉に同意せざる得なくなった。

はやて「これから食べに行くんやったら二人も一緒にどうやる？…  
…それに……………」

はやての目は二人が持っているスーパーの袋に向けられていた。

ヴィンセントもはやての目線の先にある物を見て、呆れたように溜め息をついた。

ヴィンセント「一つ聞きたいんだが……………それはなんだ？」

フエイト「え？……………私達のご飯だよ。」

「一体、何を言っているんだ……………と言わんばかりの返答にヴィンセントは益々呆れてしまった。

ヴィンセント「……………」

フエイト「？」

ヴィンセントの無言にフエイトは首を傾げた。  
仕草は可愛らしいのだが、如何せん間が悪い。

はやて「……………いやる。」

ヴィンセント「？……………はやて？」

両者の沈黙を破るようにはやてが

はやて「可笑しいやろ！！こんな栄養補助食品がご飯やって！？？ど  
う考えても変やろ！！なんやねん、このカローメイトとかSO  
JOYとかウィーゼリーとか！！アンタら、ご飯ちゅう物をナメ

とんのか!？」

思いつきりツツコンだ。

さすが似非関西人はやて、関西人もビックリなツツコミである。

はやて「似非ちゃうわー!」

地の文読むな、子狸め。

はやて「子狸言うな、ゴミ作者!」

ナメんな!ゴミにもプライドはある!!

ヴィンセント「はやて、誰に向かって言ってる?」

はやて「え?……そんな目で見んといてえな、ヴィンセントさん。」

ヴィンセントの声が聴こえたのでそちらを見ると、なんとも可哀想な子を見る目でヴィンセントがはやてを見ていた。

……ざまあみる(笑)

はやて「なんかムカつく声が聴こえたけど、この際ええわ……それより、フェイトちゃんとアルフさん?」

フェイト&アルフ「ひい!?!」

はやてが事の元凶である二人に目を向けると同時にどす黒いオーラを出し始めた。

後ろには修羅が居そうである。

フェイト達ははやての出すオーラに当てられ、怯えた声を出して抱

き合った。

はやて「ご飯が何たるか……ちょっと【OHANA SHI】  
しよか？」

フェイト&アルフ「ひいいい！……！」

今回のOHANA SHI、ある意味、本家の悪m「悪魔じゃ  
無いもん！」「……もとい、高町なのはよりも邪悪かも知れない……。

ヴィンセント「話が進まん……。」

はやて「あ痛っ！？」

またもや話が進まなくなったので、ヴィンセントがすかさずはやて  
の頭にチョップを喰らわせた。

はやて「うう……なにすんの？」

ヴィンセント「自業自得だ。」

涙目になって頭を押さえながら言ったが、またもや一言で返された。

ヴィンセント「行くぞ。」

はやて「……うん。」

フェイト「あ、あの……」

ヴィンセント「付いてこい……いいいな？」

フェイト&アルフ「はい(ああ)。」

取りあえず、街に向かうことになったが

フェイト「アルフ、尻尾。」

アルフ「あっ……。」

尻尾と耳を隠すのを忘れていたアルフであった。

【第15話】少女たちの絆〜友と言つ言葉〜（前書き）

予想よりも投稿が遅れました。  
申し訳ありません。

今回、過去最長の8000字オーバーです。  
しかし、文章はダメダメです（汗）  
それでも宜しければご覧ください。

それではどうぞ。

【第15話】少女たちの絆と友と言つ言葉

アルフ「ウマイ！」

フェイト「ア、アルフ落ち着いて食べなよ！」

はやて「あはは、フェイトちゃんかてご飯粒付いてるで？」

フェイト「え！？／＼／＼」

アルフ「おつちよちよいだねえ、フェイト。」

フェイト「ア、アルフ！／＼／＼」

はやて「あはは、賑やかやなあ。」

ヴィンセント「……………」

現在、彼らがいるのは海鳴市で最も美味いと評判のトンカツ屋である。

その店の一角で起こっている光景は騒がしくもあるが、同時に微笑ましくもある。

アルフがはしたなく見えるくらい馬鹿食いして、それをフェイトが注意するも、はやてにご飯粒が付いていることを指摘されて顔を赤らめ、更にアルフがそれをからかうと言つものである。

ヴィンセントは何も言わず、ゆっくり食べながらそこ光景を眺めていた。

まるで家族を見守る父親のような視線で……。

フェイトとアルフ、そしてはやてが仲良くなったのは少し前である。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

公園で起こった出来事の後、一同は街に繰り出した。

未だジュエルシードはヴェンセントが持ったままであるが、訳を聞いてから渡すと言ったのでフェイト達は納得していた。

また、はやてがアルフに犬耳と尻尾があった理由を聞いたが、既に説明済みである。

はやて「二人は何食べたいん？」

実際、何を食べるかは決まっていなのが現状である。

そこではやては、フェイト達に何を食べたいか聞くことにした。

フェイト「わ、私はベテ「肉ー!!」ち、ちょっとアルフ!？」

アルフ「いいじゃないか。せつかく奢ってくれるってんだから、お言葉に甘えなきゃ損じゃないか。」

フェイト「そうかもしれないけど……で、でも……」

アルフの言っている事は的を射ている。

確かに奢ると言われたのなら、それに従うのが社会では普通かも知れない。

しかも、この時言っているのはヴィンセントである。

子供が大人に甘えるのは当たり前……ヴィンセントはこの一年でそう考えるようになった。だが、目の前にいるフェイトという少女は遠慮しがちである。

フェイトの様子からして、迷惑を掛けてしまっているとも思っているのだろう。

ヴィンセント（この街は思い込みの激しい者を集める力でもあるのか？）

ヴィンセントがそう思うのは無理もないだろう。

何せ、彼がこの街で出会った人物は思い込みの激しい者ばかりだからだ。

彼女を見ていると、高町家の末っ子を思い出してしまう。

彼女達は非常に似ている。

だが、似ているが故に仲良くなれるかも知れない。

そうすれば

ヴィンセント（いや……それは私の考えることではないな。）

ヴィンセントは思考を振り払い、未だアルフと討論しているフェイトの頭を撫で始めた。

フェイト「え!？」

突然頭を撫でられ、フェイトは驚きを隠せなかった。

どうすればいいのか分からないようだ。アルフに視線を向けるも、アルフ自身もヴィンセントの行動の意図を掴めずにいた。

アルフ』どういつつもりだい?』

ヴィンセント』……………」

怪しげな視線を向けながら念話で話しかけたが、ヴィンセントは答えない。

一方、はやてはヴィンセントが何を言いたいのかが分かっているのか……何も言わずに動向を見つめていた。

ヴィンセント「遠慮しているのか?」

フェイト「……はい。」

ヴィンセント（やはりな……。）

考えは当たっていた。

今のヴィンセントにとって、このような幼い子供が遠慮ばかりするのは可笑しいような気がしてならなかった。  
フェイトは表情を暗くし、俯いてしまった。

ヴィンセント「甘えてはいけないなどと誰が決めた?」

フェイト「……………」

答えられなかった。

いや、答えが分からないのだから。  
フェイトは益々俯いてしまった。

ヴィンセント「お前は子供だ。ならば甘えておけ……甘えられる相

手が居る時はな。」

フェイト「あつ…………。」

その言葉と共にヴィンセントはフェイトの頭から手を離し、歩き始めた。

フェイトはヴィンセントの放った言葉に跳ねるように顔を上げ、自分より前を歩くヴィンセントの背中を見つめていた。

はやて「フェイトちゃん…………。」

フェイト「あつ…………はやて。」

二人の動向を見つめていたはやては、未だ困惑の意志が籠るフェイトに話しかけた。

はやて「わたしは…………いや、わたしらはフェイトちゃんが何を悩んでるんかは知らへん。」

フェイト「……………」

はやて「せやけど…………ずっと悩みっぱなしやったら、人間なんか直ぐに壊れてしまう。」

フェイトにははやてが何を言いたいのか分からなかった。

はやて「…………わたしもそうやったから。」

フェイト「え？」

アルフ「どういう事だい？」

はやての言葉にフェイトは驚きを隠せなかった。  
今の彼女を見た限り、悩んでいるようには見えなかったからだ。  
今まで静観していたアルフも同じことを考えていたのか、驚いた様子だった。

はやて「わたしは……元々、一人ぼっちやったんよ……。」

フェイト「……………」

はやて「両親は死んでしもてな……親戚も居らんかったし、足はこ  
んなんやから友達も居らんかった。」

フェイト「そう……なんだ。」

はやての過去……それはフェイトからすれば辛い物でしかない。  
実際にフェイトは表情が暗くなった。

フェイトには家族がいる。

今は笑ってはくれなくても、いつかは笑ってくれる筈の母と使い魔  
のアルフである。

もし、自分の目の前から二人が消えてしまったら……。  
そう考えると、非常に心細くなった。

はやて「一人は嫌やった……毎日が長くて辛かった。このまま誰に  
も気付かれずに死んでくんかなあ……なんて考えては泣いてたんよ。」

フェイト「……………」

はやて「せやけどな……」

はやては言葉を続けた。

はやて「ヴィンセントさんと会って、家族になってくれて……わたしは一人やなくなった。」

その顔は辛かった過去が懐かしく思えるほど、穏やかだった。

アルフ「なんだか……フェイトと出会う前のアタシみたいだね……。

」

アルフの呟きはもちろん、はやて達に聴こえていたが、はやては言葉が続けた。

はやて「さつき、ヴィンセントさんがフェイトちゃんに言った言葉はな、わたしが昔ヴィンセントさんに言われた言葉なんよ。」

フェイト「えっ？」

はやてが言った言葉に、フェイトは思わず声を上げた。

まさか、先程の言葉をはやても言われていたとは思わなかったようだ。

はやて「出会って一月くらい経った頃やなあ……ヴィンセントさんはわたしの一人にさせへんように、職場までわたしに合わせてくれたんよ。その時、聞いたんや。わたしと居って迷惑やないんかって……。」

今思えば、どれだけ馬鹿な事を言ってるんやろかと、はやては呟いた。

はやて「そしたら言われたんや。【私達は家族だ。そのような事に  
気に病む必要はない。それと、お前はまだ子供だ……甘えられる相  
手が居るうちは甘えておけ。】ってな。」

フェイト「それで……はやてはどうしたの？」

自分と同じ言葉を言われたはやては一体、どのような行動を取った  
のか……フェイトには気になった。

はやて「泣いてしもたなあ……。」

フェイト「えっ？」

はやて「あまりにも嬉しゅうて泣いてしもたんよ。それ以来やなあ  
……難しい事を考えるんは大人になってからやって思うようになった  
たんはな。今のわたしにはヴェンセントさんが居る……甘えさせて  
もらえるんやったら子供のうちは甘えとこつて、今は思つとる。」  
せやからな……とはやては言葉を続けた。

はやて「ヴェンセントさんがフェイトちゃんにああ言ったんやつた  
ら、今のうちだけヴェンセントさんに甘えとき。初対面の人間に気  
を使うな言うのも難しい事やけど、あの人は妙に頑固やから……多  
分、フェイトちゃんが断つても強引に連れていくと思つて。」

ヴェンセント「頑固ですまなかつたな。」

はやて「わひゃあ!？」

言葉と共に突然、頬に冷たい感触が来たため、はやては変な声を出

してしまつた。  
後ろを振り向くと、目を細めてはやてを睨んでいるヴィンセントがいた。

はやて「ヴィンセントさん、いつの間に！？て言つか、どこ行ってたん！？」

ヴィンセント「ついさっきだ。そして、お前達の方だ。」

そう言つてヴィンセントはフェイトとアルフ、そしてはやてに飲み物を渡した。

フェイト「あ、ありがとう………ごさいます。」

アルフ「ありがとよ。」

二人はお礼を言つた後、蓋を開けて一口飲んだ。  
結構話していたのか、喉はカラカラだったようだ。  
冷たい飲み物が気持ち良く喉を潤してくれた。

ヴィンセント「何を話していたかは知らんが、そろそろ行くぞ。今から街へ向かえば調度いい頃合いだろう。」

時刻は午後6時前。

辺りは薄暗くなり始め、所々街灯が付き始めていた。  
確かにいい頃合いだ。

はやて「ホンマや………いつの間にか随分と経つてたんやなあ。気付かんかつたわ。」

ヴィンセント「二人とも、構わんな？」

アルフ「ああ、ご馳走になるよ。」

はやてはかなり時間が経っていた事に驚いていた。  
また、アルフはヴィンセントの誘いに迷うことなく肯定の意思を示した。

そして、一同が歩き出そうとした途端

フェイト「あ、あの……」

ただ一人、はつきりと返事していなかったフェイトが口を開いた。  
口調は戸惑っていた時と同じだった。

ヴィンセント「遠慮はいらんと言った筈だ。」

フェイト「そうじゃなくて……！」

ヴィンセント「？」

フェイトの様子を見て、未だ遠慮していると考えたヴィンセントだったが、どうやら違ったようだ。

また他の事で遠慮しているようだ。

そのまま暫くの間、お互いが沈黙していたのだが

フェイト「……………ですか？」

ヴィンセント「？」

フェイトの頬が赤く染まり、何かを言ったようだが、如何せん声が小さかったのでよく聴こえなかった。

アルフ「フェイト……そんなんじや聴こえないよ？」

だが、精神リンクしているアルフにはフェイトが何を言いたいのかが直ぐにわかったようだ。

それをヴィンセントに伝えればいいのだが、この使い魔はフェイトの口から言わせたいようだ。

フェイトは益々赤くなった。

それこそ湯気が出てるように見えるほどだ。

だが、何時までも黙っているわけでもなく、ヴィンセントの隣まで来て

フェイト「手……繋いでもらってもいいですか……？／＼／」

そう言った。

かなり恥ずかしかったのか、顔は更に赤くなり、目は潤んでいた。しかも、ヴィンセントを見上げる形になるのである。

彼女なりにヴィンセントに対して甘えようとしているのだ。

ヴィンセント「ああ……アルフ、すまないがはやてを頼む。」

アルフ「あいよ。』ありがとよ……。』」

ヴィンセント「気にするな。』」

フェイトの想いには気付いたヴィンセントは、アルフにはやての車椅子を押すように頼んだ。

その際、アルフがヴィンセントに念話で礼を言った。

アルフは感謝していた。

ついさっき初めて会った筈の男と少女は自分達を気遣うだけでなく、

不器用すぎる己の主人の心を少なからず救ってくれたのだ。  
感謝しない訳がない。

アルフ『それでも言わせておくれよ……ありがとう。』

ヴィンセント『……ああ。』

念話で一度は断った礼を受け取った後、ヴィンセントはフェイトに手袋を外した右手を差し出した。  
手袋を着けているため分からないかもしれないが、左手は義手である。

子供と手を繋ぐには適さないだろう。

フェイトはおずおずとヴィンセントの手を握った。

フェイト（暖かいな……。）

自然とそう思った。

肌の温もりではなく、心が暖かくなった気がしたのだ。

アルフ「よかったねえ、フェイト……。」

フェイト「うん……。」

はやて「うう〜。」

そんなほのぼのとした空気を壊すかのように、はやてが唸り始めた。

フェイト「はやて、どうかしたの?。」

はやて「……なんでもない。（わたしかて、ヴィンセントと手を繋

ぎたいのに……。）」

思っけても口に出せないはやてであった。

ヴィンセント「では行くか……。お前達は何が食べたいんだ？」

アルフ「肉ー！！」

フェイト「あ、アルフ！……。えっと、お任せします。」

はやて「あつ、それやったらトンカツにせえへんか？」

フェイト「とん……」

アルフ「……かつ？」

はやてが言ったトンカツが何なのか、ミッドチルダ出身の二人には分からなかった。

はやて「うーん……。口で説明するより見た方が早いな。ヴィンセントさんはかまへん？」

ヴィンセント「問題ない……。トンカツならば士郎に聞いた店がある。海鳴で一番美味いと評判だそうだ。」

はやて「あのお店か……。確か個室やったからお話もできるわな。」

ヴィンセントが薦めた店をはやても知っていたようで、行き先は直ぐに決まった。

はやて「色々と聞きたい事もあるし、そろそろ行くか？」

ヴィンセント「そうだな、行くぞ。」

フェイト&アルフ「はい（ああ）」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「そっかぁ……フェイトちゃんとアルフさんの出会いはそんなんやったんか。」

食後、はやて達はフェイトとアルフの出会いを聞いていた。

フェイト「うん……どうしても見過ごせなくて。」

アルフ「アタシはフェイトに助けてもらったただけじゃなく、使い魔にまでしてもらったんだ。だからアタシは、命を掛けてフェイトを守ってやるんだ。」

言い終わると同時に胸の前で拳をグツと握った。

ヴィンセント「その想いは立派だが、お前が死ねばフェイトは悲しむぞ。」

フェイト「そうだよ……アルフがいなくなるのは嫌だよ……。」

ヴィンセントの指摘と共に、フェイトは今にも泣きそうになってアルフにそう言った。

アルフ「あわわ！……ご、ごめんよフェイト！」

はやて「アルフさん、慌てすぎや。」

涙目のフェイトに慌てて謝ったアルフに対し、フェイトは冷静にツッコんだ。

ヴィンセント「さて、そろそろ本題に入るとしよう。」

そう言った途端、部屋の中は静まり返った。

涙目だったフェイトでさえ、一瞬で落ち着いた。

ヴィンセント「お前達はこれを……ジュエルシードを集めている理由はなんだ？」

そう言っつてヴィンセントは、ポケットからジュエルシードを取り出した。

フェイトはジュエルシードを見た途端に顔を俯かせたが、話すつもりだったのだろう……決意を秘めて顔を上げた。

フェイト「……母さんが欲しがってるんです。」

ヴィンセント「お前の母がか？」

フェイト「はい……。」

フェイトは語りだした。

自身の母【プレシア・テスタロッサ】がジュエルシードを求めていることを。

自分達はジュエルシードを集めてくるように言われたこと。理由は分からないこと。

何時の頃からか、笑ってくれなくなった母だが、ジュエルシードを集めれば、いつかまた、笑ってくれる筈だからなど……。

ヴィンセントとはやては静かに話を聴いていた。

だが、ヴィンセントには幾つかの疑問があった。

何故、幼い自分の娘にジュエルシードを集めるように言ったのだろうか？

ジュエルシードを集めて一体何をするつもりなのだろうか……。だが、フェイト自身は純粹に母の為に集めているのだ。

その想いが、話しているフェイトからひしひしと伝わってくるのが分かる。

フェイトが話している間、何故かアルフが表情を暗くしていたが、本人が話さないのなら聞くべきではないと彼は考えた。

フェイト「だから……私にはジュエルシードが必要なんです。」

ヴィンセント「そうか……。」

フェイト「わ、わっ！ー！」

ヴィンセントはそう言ってフェイトにジュエルシードを投げ渡した。

フェイトは慌てて受け取った。

ヴィンセント「母の笑顔を見れるといいな……。」

フェイト「はい！あの……ありがとうございます！ー！」

フェイトは立ち上がり、ヴィンセントに頭を下げた。  
ヴィンセントの存在は、既に彼女にとって大切な物となっていた。

はやて「アルフさん、どないしたん？」

アルフ「え！？……な、なんでもないよ。」

アルフの表情が暗いことに気が付いたはやてが彼女に聞いたが、アルフは何でもないと言ったので納得することにした。

はやて「ほんならええけど……あつ、わたしな、フェイトちゃんに言いたいことがあるんよ。」

フェイト「えつと……なにかな？」

急に話を振られたフェイトは少々戸惑いながらもはやてに聞いた。  
だが、フェイトははやてが次に言った言葉に心底驚く事になる。

はやて「わたしと友達になってくれへん？」

フェイト「えっ！？」

ヴィンセント（なるほどな……。）

まさか友達になって欲しいと言われるとは思わなかっただろう。  
フェイトはどうすればいいのか分からず、慌てながらアルフに助けを求める視線を向けていたが、アルフ自身もどうすればいいのか分からないようだ。

だが、ヴィンセントにははやてが友達になって欲しいと言った理由

が分かっていた。

天涯孤独で休学中のはやてに友達が居るわけもなく、ヴィンセントという家族ができたとしても、同年代の友達が居るわけではないのだから……。

フェイト「あの、えっと……その！……あうう……。」

焦りがピークに達したのか、フェイトは泣きそうになっていた。

はやて「やっぱり……アカンのかなあ。」

フェイトの反応を見たはやても、ついに泣きそうになっていた。断られるとも思っているのだろう。

仕方がないと思いつながら、ヴィンセントは口を開く事にした。

ヴィンセント「フェイト、どうすればいいのかわからないのか？」

フェイト「うう……はい……。」

やはり、ヴィンセントの思った通りだった。

ヴィンセント「お前はどうしたいんだ？」

本人の意志が最優先である。

フェイトが嫌なら仕方がないだろう。

仮にそうだとしても、ヴィンセントは彼女を責めるつもりはなかった。

フェイト「私は……友達になりたい……。」

はやて「え……?」

フェイト「はやてと友達になりたい……でも、分からないんだ……  
どうすれば友達になれるのか……。」

フェイトははやてと友達になりたいようだ。  
しかし、なり方が分からないのだ。

はやてはフェイトの言った言葉が嬉しかったのか、泣きそうだった  
表情は一変し、満面の笑みを浮かべていた。

はやて「そんな簡単や。」

フェイト「えっ?」

はやてはそう言って手を差し出した。

はやて「はい……握手。わたしは八神はやてや。」

フェイト「え、えっと……フェイト・テストロッサです。」

フェイトも差し出された手をおおずおおずと握り、戸惑いながらもはや  
てと同じように自分の名前を言った。

はやて「よろしくな。これでわたしとフェイトちゃんは友達や。」

フェイト「うん……ありがとう、はやて。」

あまりに嬉しかったのか、フェイトは目尻に涙を溜め始めた。  
だが、同時に満面の笑みを浮かべていた。

アルフ「よ、よかったねえ〜……フェイトお〜……グスッ……。」

だが、先に泣いたのは使い魔のアルフだった。  
無理もないだろう。

彼女にとって、フェイトの幸せは彼女の幸せなのだから。

フェイト「もう、アルフったら……。」「

はやて「あはは、アルフさんとも友達になられへんか？」

アルフ「もちろんさ〜！」

はやて「わひゃあ！？あ、アルフさん！？あはは、くすぐったいで  
！」

はやてがアルフにも友達になろうと言った途端、アルフははやてに  
抱き着いて頬擦りし始めた。

その光景を見ていたヴィンセントは、ふっと笑い、目を閉じたが

フェイト「あの……。」

ヴィンセント「ん？」

いつの間にかフェイトが彼の隣に来ていた。

ヴィンセント「どうした？」

フェイト「貴方とも……友達になれますか？」

恐る恐るフェイトはそう言ってきた。

大の大人が小学生くらいの少女と友達と言うのも変な話ではあるが、自然と嫌な感じはしなかった。

ヴィンセント「ああ……ヴィンセント・ヴァレンタインだ。」

フェイト「よかった……フェイト・テストロッサです。」

ヴィンセントが差し出した右手をフェイトは嬉しそうに両手で握った。

数秒が経ち、ヴィンセントが手を離そうとすると

ヴィンセント「?……どうした?」

フェイトが離したくないと言わんばかりに握る力を強くした。

フェイト「もう少し……握ってていいですか?」

ヴィンセント「別に構わんが……。」

フェイト「そ、それじゃあ……。」

ヴィンセントがそう言うと、フェイトは彼に持たれ込んだ。もちろん、手を握ったまま……。

フェイト（父さんがいたら……こんな感じなのかな?）

心の中でそう思っていたのは、誰にも分からないだろう。こうして、騒がしくも暖かい時間は過ぎていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

その後、彼らは会計を済ませ、店を後にした。  
別れ際、いつかまた会おうと約束して……。

だが、運命は時として残酷である……。

約半年後、彼らはぶつかり合う……互いの信じる道のために……。



【第16話】闇夜にてゝ出会ったが故にゝ（前書き）

タイトルが思い付かない（汗）

今回と次回は閑話です。

今回はジュエルシードが暴走した日の夜、次回は高町家……特に高町夫妻となのはがメインの物語です。

その後、数話を挟んでA・S開始になります。

それではどうぞ。

【第16話】闇夜にても出会ったが故に

フェイト達と出会って少し時間が経った日の夜、ヴィンセントとはやてはいつも通りの生活を送っていた。

ヴィンセント「……………！」

屋根の上に居たヴィンセントは、突然巨大な魔力を感じ取った。この魔力はジュエルシードの物だろう。

……………だが

ヴィンセント「この感覚は……………」

今までに感じたジュエルシードの魔力よりも、遥かに強大だった。そして、空間が震えているような感じがするのだ。

ケルベロス ロード、ジュエルシードが暴走したようだ。その際、次元震が発生したのだろう。

ヴィンセント「次元震？」

ケルベロスがヴィンセントに話しかけた。

だが、ケルベロスの言葉の中にはヴィンセントが聞いた事の無い単語が存在していた。

ケルベロス 次元震とは、空間内で起こる振動と爆発の事だ。最悪の場合、世界を滅ぼしかねない。

ヴィンセント「面倒だ……………」

ケルベロスから次元震の説明を受けたヴィンセントは一言呟いた後、直ぐに立ち上がって現場に向かおうとしたが

ヴィンセント「……ん？」

ケルベロス どうやら治まったようだ。

次元震が治まったようだ。

恐らく、なのはかフェイトが封印したのだろう。

その後、家の中に入り、リビングにて寛いでいると

ピンポーン

はやて「ん？……こんな時間に誰やる？」

ヴィンセント「私が出よう。」

突然、家の呼び鈴が鳴った。

ヴィンセントは玄関に向かい、扉を開けると

アルフ「ヴィ、ヴィンセントお……」。

気を失ったフェイトを抱えたアルフが、今にも泣きそうな表情で立っていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・

.....

ヴィンセント「怪我は大したこと無さそうだ。」

はやて「気を失つとるだけやから安心し。」

アルフ「よ、よかったよ、フェイトお……。」

あの後、アルフ達を家の中に迎え入れたヴィンセント達は、フェイトをソファアに寝かせ、傷の手当てを行った。

幸い怪我は大したこと無かったので、フェイトは現在、はやての部屋で眠っている。

ヴィンセント「何があつたんだ？」

ヴィンセントが理由を聞くと、アルフは話し出した。

街の中にジュエルシードがあることは分かったが、場所が特定出来なかったために強制発動させたくない。

その後、自分達と同じくジュエルシードを集めている魔導師がいて、ジュエルシードを回収しようとした際、お互いのデバイスがぶつかり合い、暴走したとのことだ。

その際、フェイトが素手でジュエルシードを封印したそうだ。

結果、フェイトが気を失つたため、どうすればいいのか分からず、前に住所を聴いていた此所に来たらしい。

はやて「随分と無茶したんやなあ……。」

アルフ「うつ……そう言われると、何とも言えないよ……。」

ヴィンセント「無茶をしたお前達が悪い……自業自得だ。」

アルフ「あうっ……。」

二人に責められたアルフの耳は垂れ下がり、尻尾も萎れてしまった。落ち込んでしまったようだ。

まあ、はやては責めていると言うより呆れているのだが……。

ヴィンセント「しかし、プレシアがそこまでしてジュエルシードを求める理由はなんだ？」

暴走した場合、世界を滅ぼしかねない代物であるジュエルシードをプレシアが必要とする理由が何なのか……ヴィンセントが疑問に思ったのはそこだった。

アルフ「それが……分かんないんだよ……。」

ヴィンセント「分からない？」

アルフ「ああ……アタシ達はただ、ジュエルシードを集めてこいって言われただけなんだ。何に使うかなんて知らないんだよ。」

どうやらアルフは何も知らないようだ。

そうなるとフェイトも知らないのだろう。

前に理由を聞いた際、母が欲しがっているとしか言わなかったのだ。

アルフ「それよりも……あの女は……。」

するとアルフは拳を握りしめ、怒りの表情を示した。

はやて「……なんかあったんか？」

アルフが怒っている事に気が付いたはやてが理由を聞き出すと  
アルフ「あの女はフェイト「アルフ?」……フェイト!?目が覚め  
たんだね!」

目を覚ましたフェイトがリビングに入ってきた。

はやて「あつ、フェイトちゃん!もう大丈夫なんか!?!」

ヴィンセント「もういいのか?」

フェイト「うん……もう大丈夫だよ。」

フェイトを労る二人の言葉に対し、彼女はそう言った。

アルフ「よかったよ、フェイトお〜!」

アルフはそう言うと、泣きながらフェイトに抱き着いた。

フェイト「心配かけてごめんね……もう大丈夫だよ。」

アルフ「うん……うん!」

そんなアルフを宥めるようにフェイトは彼女の背中を擦った。

フェイト「でも、どうして此所に?」

はやて「アルフさんが連れてきたんや。」

ヴィンセント「お前が怪我をした際、どうすればいいか分からなかったそうだ。それで此所に連れてきたらしい。」

フェイトの疑問に答えたのは、はやてとヴィンセントだった。

フェイト「えつと……じゃあ、この包帯も……」

はやて「うん、わたしが巻いたんよ。せやけどビックリしたで。いきなりアルフさんがフェイトちゃんを抱えて来たんやから。」

少々、大袈裟気味にはやてがそう言った。  
するとフェイトの表情が少し沈んだ。

フェイト「ごめんなさい……。」

ヴィンセント「ッ!？」

フェイトの謝り方がルクレツィアにあまりにも似ていたため、ヴィンセントは思わず驚いてしまった。

ヴィンセント「いや……彼女は彼女だ。ルクレツィアではない……。」

未だ俯いたままのフェイトに対しはやてが「だ、大丈夫やから!気にせんといて!」などと言っている光景を見ながら、ヴィンセントは心の中でそう呟いた。

・  
・

・・・  
・・・  
・・・

フェイト「そろそろ帰るね。」

時刻は午後11時過ぎ。

フェイト達は帰ることにした。

あの後、会話の中にアルフまでもが入り込み、かなりカオスな状況になっていた。

ヴィンセントは関わらないようにリビングから抜け出し、屋根の上に暫く居ることにした。

はやて「泊まっていたらええのに……。」

フェイト「ごめんね……でも、明日は母さんの所に行かなくちゃいけないから。」

実はフェイト達に泊まっていくようにはやては言ったのだ。

しかし、明日はプレシアの所へ向かわなくてはいけないのでフェイトは断った。

ヴィンセント「アルフ、どうしたんだ？」

アルフ「な、何がだい？」

フェイトから母と言う単語が出てきた途端、アルフの表情が暗くなつたのだ。

その事に気付いたヴィンセントが、念話でアルフに話しかけた。

ヴィンセント「フェイトとプレシアの間に何かあるかは知らんが、

何かあればお前が彼女を助けてやれ。』

アルフ『……そうだね、そうだよね！アタシはフェイトの使い魔なんだから！』

ヴィンセントの言葉に思うところがあったようだ。恐らく、彼女はもう大丈夫だろう。

フェイト「じゃあまたね……はやく、ヴィンセント。」

はやく「うん、いつでも待ってるで。」

アルフ「また来るよ！」

ヴィンセント「ああ……ではな。」

各々が別れの挨拶を済ませ、フェイト達は帰っていった。彼女達が帰ると、家の中は静寂に包まれた。

はやく「賑やかかった分、後が寂しいな……。」

ヴィンセント「ああ……そうだな。」

もうすぐ4月も終わり、日が変わろうとしている中、哀愁漂う二人の言葉が部屋の中に響き渡っていた……。

【第17話】高町夫妻の想い／親子の絆（前書き）

【第12話】の要素が濃いです。

ちなみに今回、ヴィンセントは名前だけです。

と言ってもこの話、実は前から書く決めていました。

私の中で高町夫妻は結構、お気に入りキャラです。

私としては、彼らをあまり空気にしなくなかったので（汗）

相変わらずの駄文ですが、どうぞ。

【第17話】高町夫妻の想い／親子の絆

なのは悩んでいた。

魔法と出会い、ジュエルシードを集める過程で出会った少女【フェイト・テストロッサ】のこと……。

そして、新たに現れたと同時にジュエルシード回収の全権を持つと言った【時空管理局】と言う組織について……。

自分は一体どうするべきか……。

ジュエルシードを集める事が最も大切な事ではある。

しかし、今の彼女にはジュエルシードを集める事よりも大切な事がある。

フェイトと友達になりたい……それこそが今の彼女にとって最も大切な事である。

自分の意志で見つけた大切な想いだからこそ、彼女は覚悟を決めた。時空管理局に協力し、ジュエルシードを集めるのを協力する事で、フェイトに再び、自分の想い伝えることを……。

だが、そのためには一時的に家を離れねばならない。

それはつまり、両親に話さなければならぬ事を意味する。

【ヴァインセント・ヴァレンタイン】と名乗る男性から聞いた両親の想い……。

自分を心配しているとのこと。

迷惑を掛けたくはない……だが、それでもやりたいことがあるのだ。そして、ジュエルシードを集める決意をさせた“あの言葉”……。

迷いを断ち切れ

なのは「お母さん。」

桃子「なあに？なのは。」

今の自分に、成すべき事があるのならよ……。

なのは「ご飯食べた後……大切なお話があるの。」

桃子「……分かったわ。」

だが、この時なのはは忘れていた。

二人のもう一つの想いを……。

・

・

・

・

・

現在、なのはと桃子は夕食後の洗い物をしている。

なのははこの後、桃子だけに話すつもりなのだ。

恐らく、父【士郎】と兄【恭也】は反対するだろうから……。

士郎「さて、恭也、お前達は先に裏山へ行つといてくれ。」

恭也「父さんは？」

士郎「少し野暮用でな……後で行くよ。」

恭也「分かった。」

この時、なのはは動揺していた。

恐らく、なのはが何かを話すことを土郎は知ってしまったのだろう。それは桃子が話してしまったのかは定かではないが、恐らくそうだろう。

美由希「あっ、恭ちゃん待って！私も行く！」

恭也「来るなら早くしろ。」

美由希「ちょっと待って……うぐっ!？」

物音と同時に美由希の呻き声が聴こえた。

恐らく、転んだのだろう。

なのはは一瞬驚いた後、桃子と目が合い、思わず笑ってしまった。

恭也「先に行くよ。」

美由希「行ってきまーす！」

なのは&桃子「「いってらっしゃーい。」」

そして、なのはと桃子は再び、洗い物を再開した。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

桃子「さあ、これでおしまいと。」

なのは「うん……。」

暫くして、洗い物も終わった。

なのはの足元にはユーノも居た。

桃子「さて、それじゃあ大事なお話ってなあに？」

なのは「……うん。」

いよいよ話す時が来たようだ。

桃子「リビングに行きましょう。」

桃子はそう言うリビングに向かって歩き出した。

なのはとユーノも桃子に続き、リビングへと向かうと

士郎「終わったのか？」

そこには士郎がいた。

桃子「ええ。」

なのは「あの、お母さん……お父さんも……？」

なのはは恐る恐る、桃子にそう聞いた。

もし、士郎が同席するのならば話の内容からして、自分が心配だからと反対される可能性が大きいからだ。

父は自分には優しい……それも優しすぎるくらい……。

現状を見る限り同席は確定だろう。

父が同席しないことを祈りつつ、桃子に聞いてはみたが

桃子「ええ……もちろんよ。」

当たり前だと言わんばかりの笑顔で返されてしまった。

桃子の返答になのはは表情を暗くし、俯いてしまったが

士郎「なんだ？……お父さんは聞いちゃいけないのか？」

父の声に反応して顔を上げると、そこにはジト目でなのはを見ている士郎が居た。

なのは「ち、違うの！そうじゃないの！」

なのはは慌てて否定したが、説得力に欠けてしまうとどうするべきか悩んでいると

桃子「士郎さん、そこまで。なのは、座って？」

なのは「う、うん。（お母さん……ありがとう。）」

桃子が士郎を宥めてくれたのだ。

なのはは心の中で桃子に感謝した。

士郎「さて、なのは……お前の話を聞く前に私は……いや、私達はなのはに言うておきたい事があるんだ。」



もし、そう言ってしまったのならば、自分は二度と此所には居られない……そう思うと怖くなってしまったのだ。

ユーノが念話で話しかけたが、反応すらしなかった。

士郎「迷惑を掛けてはいけないとも思っているのか？」

なのは「……やめて。」

自身の心に畳み掛けるように、士郎の言葉が突き刺さった。

なのはの口からは否定の言葉が出ていた。

目を瞑り、目尻には涙が溜まり始めていた。

桃子「自分が要らない子だなんて……思ってる？」

なのは「やめて!!」

桃子の言葉を最後に、なのはは力一杯叫んだ。

何も聴きたくないと言わんばかりに耳を塞ぎ、目からは涙が止めどなく流れ始めていた。

なのは「グスツ……もう……ヒック、言わないで……。」

ユーノ（なのは……。）

聴きたくなどなかった……。

なのはは手耳から手を放し、未だ震える自身の体を守るように抱き締めた。

ユーノは心の中で彼女の名前を呟いた。

彼は自分が許せなかった……何もできず、ただ見守る事しかできな

い自分が……。

桃子「やっぱり……ずっと思い詰めていたのね。」

士郎「すまなかった……お前の気持ちを察してやれなくて。」

なのは「……ヒック……ふえ？」

ユ一ノは高町夫妻の声が聴こえたため、思考を元に戻すと、なのはを挟むように二人が座っていた。

桃子はなのはを己の胸で抱き締め、士郎はなのはの頭を撫でていた。

桃子「あの日、なのはに心配しないでって言ったのは、あなたに心配させたくなかっただけなの。お母さんは……なのはが要らない子だなんて思ったこと……一度もないよ。」

なのは「……え？」

なのはが店を手伝いたいと言ったあの日が始まりだった。

あの日、桃子が言った言葉は、当時まだ幼かったなのはにとって勘違いしてしまうのも無理はなかったのだ。

士郎「お父さんが退院してから、なのはがお父さん達に甘えなくなつたのは、甘えててはいけない、迷惑を掛けてはいけないって思ったからかい？」

なのは「……うん……。」

士郎の問いに対し、なのはは恐る恐る答えた。

すると、高町夫妻は悲痛な表情を浮かべ、桃子に限っては今にも泣

きそうだった。

桃子「お母さん達は……なのはから甘えてくれるのをずっと……ずっと待ってたの。でも……」

士郎「なのははずっと、いい子で居ようとしてた。お父さん達は、いい子で居ようとするなのはを見るのは辛かった……」。

なのは「ち、違うの……悪いのは……なのはだよ……」。

自分の両親が語った想い……。

今にも泣きそうな母、己を責め続ける父。

未だ、悲痛な表情を浮かべ続ける両親を見て、なのはは自分が悪いと言ったが

桃子「違うわ……なのはは……何も悪くないわ……！」

なのはの言葉を否定すると共に、桃子は遂に泣き出してしまった。

桃子「なのはが辛くて……悲しいことがあったのなら……お母さん達は助けてあげたかったのに……」

士郎「言葉にしなければ何も伝わらない……そう教えられるまで、お父さん達は気付かなかった。」

なのは「あつ……」。

“言葉にしなければ何も伝わらない”

それはなのはがフェイトに向かって言った言葉……。

ジュエルシードを集める理由が知りたいから、友達になりたいから

こそ言った言葉……。

だが、その言葉を最も理解していなかったのは自分だった。

なのは「……うっ、ヒック……。」

なのは再び、泣きたくなった。

自分の愚かさに……自分を大切に思い続けてくれた両親に申し訳なく思い……。

士郎「だから……謝らせてくれ。」

桃子「ずっと……辛い思いをさせてしまって」

士郎&桃子「すまなかった(ごめんなさい)」

なのは「うぐっ……うわあああああああ……!!!!」

耐えきれず、なのは声を上げて泣き出した。

自分を大切にしてくれていた両親の胸の中で……。

桃子は涙を流しながらなのはを抱き締め、士郎はそんな二人を守るかのように抱き締めた。

なのは「う、ごめんなさい……ごめんなさい……。」

士郎「なのはは何も悪くないんだ……。」

桃子「今は泣きなさい……好きなだけ……。」

なのは「うわあああああああああ……!」

交わっているようで、すれ違い続けた親子の絆……。

だが、それも遂に終わりを告げた。

その裏に居た一人の男を、なのははいずれ知ることとなる。

だが、今はその時ではない。

彼女は泣き続けた……己の悲しみを吐き出すかのように……。

ユーノ（よかったね、なのは……。）

親子の絆を目の前で見ていたユーノは、なのはを祝福すると共に、  
両親が居ることにちよっぴり羨ましくなった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

あの後、なのはが落ち着いたのを見計らい、高町夫妻はなのはの話  
を聞くことにした。

なのはが話したのはユーノと出会ってから起こった出来事全て……。  
そのためには家を少し空けなければならぬことなど……。  
魔法やユーノの正体については黙っているが、いずれ話すと決めて  
いた。

なのは「もしかしたら、危ないかも知れない事なんだけど……大切  
な友達と始めた事……最後までやり通したいの。」

桃子「うん……。」

士郎「最後までやり通したい……か。」

桃子は目を瞑り、士郎はなのはの目を見ながらそう言った。

なのは「心配……かけちゃうかもしれないんだけど……。」

桃子「それはもう……いつだって心配よ。お母さんはお母さんだから、なのはの事がすごく心配……。」

なのはがそう言うと、桃子は顔を覆い、少し大袈裟だが不安そうに言った。

案の定、なのはは表情を暗くした。

士郎「だが、もう決めたんだろう?」

士郎は既になのはの決意を感じ取っていた。

それは桃子も同じである。

士郎がそう言うと、なのはは顔を上げた。

桃子「友達と始めた事……最後までやり通すって……。」

士郎「なのはが会ったその女の子と……もう一度話をしてみたいんだらう?」

なのは「……うん。」

桃子「なら、いつてらっしゃい。」

桃子はなのはに近づき、頭を撫でながらそう言った。

士郎「後悔だけはするなよ。」

士郎もなのはに近づき、頭を撫でた。

桃子「お兄ちゃんはお母さん達が説得しといてあげる。」

士郎「お前は思う存分やってきなさい。」

そう言うと、なのはは笑顔になり二人に対して笑いかけた。

なのは「ありがとう！お母さん、お父さん！」

なのははそう言うと、走って二階へと上がっていった。

現在、リビングに居るのは高町夫妻だけである。

士郎「やっと……言えたな……。」

桃子「ええ……。」

二人は憑き物が取れたかのように穏やかだった。

士郎「アイツに……ヴィンセントに感謝しないと……。」

桃子「ええ……でも、彼の事だから“気にするな”って言いそうだけど……。」

士郎「だな……。」

何気無い会話だが、高町夫妻にとってはこれ以上無い程、意味を持つ会話である。

今の彼らには、いつものリビングがこれ以上ないほど落ち着ける空間となっていた。

【第18話】暴れる力〜魔獣解放〜（前書き）

タイトル通り、“アレ”が登場します。

次回はどうしよう……（汗）

一気に飛ばしてヴォルケンス登場にしようかな……？  
と言っわけで、読者の皆様にアンケートをお願いします。

？ 一気に時間を進めてヴォルケンスを登場

？ 1、2話挟んで時間を進めてからヴォルケンスを登場

締め切りは1月25日の午前0時丁度とさせていただきます。

それでは、本文へどうぞ。

後書きに補足と技の説明があります。

【第18話】暴れる力〜魔獣解放〜

夕刻、ヴィンセントは全力で走っていた。

仕事が終わったため、帰宅しようとしたのだが、ジュエルシードが発動したのだ。

ケルベロスのエリアサーチによると海鳴臨海公園沖とのことだ。

結界は展開されておらず、下手をすれば街に被害がでかけない……。普段なら関わるうとはしないのだが、彼が感じたジュエルシードの数は六つ。

一つが暴走しただけで次元震が発生するほどの代物だ。

それが一斉に六つも同時に……。しかも、同じ場所で発動している状態である。

ヴィンセント（嫌な予感がする……。）

ヴィンセントの予感は、ほぼ的中している。

このまま封印されなければ海鳴市が……。いや、地球そのものが消滅しかねない。

ケルベロスによると、なのはやフェイトも現場に居るようだ。

恐らく、封印するためだろう。

だが、二人……。いや、ユーノやアルフが居たとしても心配である。

ヴィンセント（ふっ……。私は一体、いつから過保護になったのだろうな……。）

己の思考に皮肉るように、ヴィンセントは自分自身を自嘲した。

事実、彼はこの世界に来て以来、何かと世話を焼いている。

彼自身は気付いてこそいないが、ヴィンセントによって救われた者は数多い。

ある者は命を……。

また、ある者は心を……。

ケルベロス Stand by ready?

ヴィンセント「さて、私も向かうとしよう……。ケルベロス、セツトアップ！」

ケルベロス Set up!

鮮紅色の魔力光に身を包んだヴィンセントは稲妻の如く、臨海公園へ向かう道を駆け抜けた。

ヴィンセント「ケルベロス、恐らくだが今の私では封印はできない……。」「

ケルベロス ああ……。 “今のロード”ではな……。

弱音とも取れるヴィンセントの言動。

しかし、それは弱音ではない。

事実、ケルベロスには分かっていた。

ヴィンセント「“アレ”を使う……。お前は使ってやれん。」

銃であるケルベロスは、“アレ”を使う際、使用できない。だが

ケルベロス それは今のままの我では……。だ。

ケルベロスは真っ向から否定した。  
随分と意味深い言葉である。

ヴィンセント「どういう意味だ？」

ヴィンセントもケルベロスに聞いてみた。

ケルベロス 博士は我を作る際、ロードが普段から扱う形態だけではなく、“アレ”を使う際にもサポートできる形態を我に組み込んだ。  
だ。

ケルベロスによると、ルクレツィアはヴィンセントが“アレ”を使う事を予想し、対応できる形態を組み込んだらしい。

ヴィンセント（まったく、君にはいつも驚かされるよ……ルクレツィア。）

ルクレツィア『ふふっ……ごめんなさいね？』

思わず心の中で呟くと、ルクレツィアの声が聴こえた気がした。

ケルベロス そろそろ公園だ。ロード、心せよ。

ヴィンセント「ああ。………どうやら………」

ケルベロス 嫌な予感は当たってしまったようだ。

公園へ着くと開口一番、ヴィンセントはなって欲しくなかった展開になっていた事に密かに嘆いた。

海から空にかけて巨大な竜巻が巻き上がっており、現在進行形で巨大化している。

雲行きは怪しく、空からは大量の雷が降り注いでいた。

大気は震え、大地は揺れ、まさに天変地異と呼べる状況である。

ヴィンセント「ッ!?……次元震か？」

ケルベロス そのようだ。ジュエルシードが共鳴しあい、空間を歪めている。しかも、これは中規模だ。最悪の場合、この世界が滅びるかもしれない……。

空間の震えを感じたヴィンセントと現状を彼に伝えたケルベロスは、予想以上の展開に溜め息をつきたくなった。

だが、そんなことも言っていられない。

海上に浮かぶ四つの光……間違いなくなのは、フェイト、ユーノ、アルフだろう。

桃色と金色の閃光が幾度となく竜巻を穿っているが、全く意味を成していない。

翡翠とオレンジの鎖が竜巻を捕らえんと飛び交っているが、力づくで引きちぎられている。

しかも、閃光と鎖も時と共に減少してきている。

遠くから眺めているヴィンセントには見えていた。

次第に巨大化する嵐の中、落雷や水飛沫を必死に避けつつも攻撃しようとしている少女達が……。

ヴィンセント「いよいよ不味いな……。」

何時までも傍観し続ける訳にはいかない……そう考えたヴィンセントは己の魔力を放出し始めた。

ヴィンセント「ケルベロス、やるぞ。」

ケルベロス 了解した。リミットブレイク

ケルベロスの電子音と共に、鮮紅色の魔力がヴィンセントを包み込んだ。

そして、彼を包んでいた魔力が弾け飛んだ。

ヴィンセント「この姿も……久しぶりだな……。」

ケルベロス イフリートフォーム

エコーのかかった声とケルベロスの電子音と共に現れたのは、狼のような風貌と青紫の四肢、赤いマントを腰布のように纏い、銀の髪を揺らした魔獣【ガリアンビースト】……ヴィンセントの切札的存在である。

ケルベロス 調子はどうだ？我がロードよ……。

ヴィンセント「問題ない。」

ケルベロスは赤い線が入った漆黒の具足にに変形し、ヴィンセントの四肢に装備されていた。

ヴィンセント「では行くぞ。」

その言葉と共にヴィンセントは大地を全力で蹴った。

発射されたミサイルの如く、彼は空中で静止することなく速度を上げ、閃光と化した。

その速度は最早、音速を超えていた。  
大気を貫いて進む真紅の閃光となったヴィンセントは、未だ巨大化を続ける竜巻に激突した。

なのは「な、なにっ!？」

フェイト「くっ!」

ユーノ「一体、何が!？」

アルフ「何なんだよ!？一体!」

各々が突然の出来事によって発生した衝撃波に驚く中、ヴィンセントは身体に炎を圧縮して纏い、一気に放出して巨大な爆発を引き起こし、竜巻を分断した。

四人「う、嘘……。」

ヴィンセントを除いた皆が驚いた。

四人が全力で挑んだにもかかわらず、致命傷すら与えられなかった竜巻を、突然現れた獣人が竜巻を瞬時に天地に分断したのだから。

ケルベロス まだ終わりではないようだ。

ケルベロスの言葉通り、分断されて治まった筈の竜巻は再び、共鳴し合ったジュエルシードによって復活した。

だが、先程よりも規模が小さい。

どうやら弱まったようだ。同時に落雷もある程度落ち着き、四人は大勢を整えた。

ヴィンセント「私が竜巻を破壊する。お前達は封印しろ。」

四人「しゃ、喋ったああああ!?!」

とんでもない言い方ではあるが、この世界にガリアンビーストのヴィンセントを見たものは居ないのだ。

突然獣人が喋れば無理は………無くはない。  
獣が喋ると言う点では、アルフとユーノも同じである。

フェイト（でも、この声……どこかで……。）

唯一、ヴィンセントの声に気付きかけていたフェイトだったが、彼が既に動き始めていたため、封印に集中することにした。

フェイト（後で聞けばいいんだ……。）

一方、ヴィンセントは雲の上まで上昇し、両手に一気に魔力を圧縮した。手を上にかざし、そこに集まった魔力を炎に変換、圧縮を繰り返していた。

出来上がった物は火球……いや、高温かつ高密度の炎が圧縮された巨大な火球である。

ケルベロス デモンズインフェルノ

ヴィンセント「あああああ!?!」

ケルベロスの電子音が響き、そしてガリアンビーストの咆哮が轟くと同時に、ヴィンセントは火球を真下に向けて全力で放り投げた。火球は唸りを上げて突き進み、竜巻と接触するや否や、轟音を響かせて大爆発を引き起こし、止めと言わんばかりに巨大な火柱を発生

させた。

四人「……………」

真下に居た四人は考えられない破壊力を目の当たりにし、呆然と立ち尽くしていた。封印こそされてはいないが、六つのジュエルシードは再び、共鳴し合う事もなく浮かんでいた。

ヴィンセントは未だ呆けているのは達近づいた。

ヴィンセント「何をしている？さつさと封印しろ。」

なのは&フェイト「……………」

二人は答えない。

竜巻があつた場所を見ながらぼーっとしていた。

ヴィンセント「聴いているのか？」

なのは&フェイト「は、はい！！！」

もう一度言つとさすがに気が付いたのか、ヴィンセントの声に反応した。

二人はそろってジュエルシードに向かっていった。

ヴィンセント（さて、帰るとしよう……………。）

ヴィンセントは帰ることにした。

この場で変身を解除することも考えたが、そうになると質問攻めに遭う可能性がある。

そうなると面倒だからだ。

さらに、魔力の残量が少ない。

ガリアンビーストを解放すると、魔力の消費が激しくなる。ケルベロスのサポートによって、従来より燃費が良くなりはしたが、先程の攻撃に魔力を使いすぎてしまった。

このままでは変身を解除した直後、魔力の枯渇が原因で海面に落下しかねない。

ヴィンセント「「ではな……。」」

ユーノ「ま、待ってください！」

ヴィンセントがそう言って立ち去ろうとすると、ユーノが彼を呼び止めた。

だが、ヴィンセントは無視し、その場を立ち去った。

《アースラにて》

リンディ「あれは……一体……？」

時空管理局・次元航行艦アースラ艦長【リンディ・ハラウン】は混乱していた。

この艦が全権を負ったジュエルシード回収の件について、重要参考人である【フェイト・テストロツサ】を捕獲するため、彼女が強制発動させたジュエルシードを放置し、弱った所を捕獲する作戦だったのだ。

しかし、予定は大きくずれてしまった。

この世界の協力者【高町なのは】とジュエルシードを発掘した本人【ユーノ・スクライア】の命令無視。

彼女達はフェイトを助けるために現場に向かった。

向かってしまったのは仕方がない……封印後にフェイトを捕獲する計画に移行した。

だが、発動したジュエルシードは共鳴し合い、結果として次元震が発生してしまった。

それどころか、次元断層を引き起こす可能性があったのだ。今の彼女達には対処できないだろう。

息子であり執務官でもあるアースラの切り札【クロノ・ハラウン】ですらも対処できない状況だった。

しかし、自らも現場に向かおうとした矢先、生体反応と共に狼のような風貌をした獣人が現れ、一瞬にしてジュエルシードの暴走を抑え込んだ。

それにより、次元震は小規模にまで抑えられた。

だが、小規模ではあるが危険性は高い。

クロノを任せようとした矢先、あの獣人が上空に飛び上がり、巨大な火球を竜巻に向けて投げつけたのだ。

火球の破壊力は圧倒的で、次元震を抑えるどころか止めてしまった。封印魔導師が数人がかりで抑え込むのがやっとの状況を……だ。

あり得ない光景を目の当たりにし、アースラクルーは皆、呆然としてしまった。

それはリンディとて他ではない。

そうしている内に獣人は撤退……既に追跡すら不可能な状況となつてしまった。

エイミィ「し、信じられない……。」「

リンディ「どうしたの？エイミィ。」「

アースラクルーの一人【エイミィ・リミエッタ】が驚愕の表情で呟いた言葉を、リンディには聴こえていた。

エイミィ「先程のアンノウンが使用した二つの攻撃を解析してたんですけど……最初の竜巻を抑え込んだ爆発はS+、最後の次元震を消滅させた火球はSS+の威力があります……。」「

クロノ「なんだって!?!」「

SS+……それは管理局が定めるランクの中で最上位の部類に入る。獣人自体の魔導師測定を行った訳ではないので彼の正式な魔導師ランクは不明だが、単純計算でSS前後と予想される。

しかも、管理局に高ランクの魔導師は非常に少なく、彼らは皆エース……いや、ストライカーと呼ばれる部類となる。

クロノが驚くのも無理はない。

リンディ「……彼について考えるのは後にしましょう。それよりもクロノ執務官、あなたは現場に向かってください。」「

クロノ「か、かあさつ……艦長!……いえ、分かりました。」「

獣人に関する問題を後回しにしようとしたリンディにクロノは反論しようとしたが、先にすべき事を理解したため、直ぐ様現場に急行

した。

リンディ「さて……謎は深まるわね……。」

あの獣人は一体、何者なのか？

この世界に魔法文化は存在しない。  
だが、彼は魔力を保有している

それも、莫大なまでの……。

似たような生物が次元世界内に存在しているが、それらは魔力を殆ど持っていない。

それ以前に知性があまり無い。

あの獣人は人語を理解していたため、それはあり得ないだろう。

何者かの使い魔ではないかと言う考えが、最もしつくり来るだろう。しかし、管理局員や次元犯罪者、管理世界を含めた多くの人間の中で、あそこまで優秀な使い魔を使役している者など聞いたこともない。

……となると

リンディ「未発見の次元世界からの……次元漂流者かしら？」

この説が一番、有効だろう。

だが、あれだけの存在を使役できるものが居るのか……と言つ疑問が生まれる。

エイミィ「艦長、この世界の事件を調べてみたんですが、あのような獣人が起こした事件は全くありません。」

リンディ「そう……なら、今回の事件に関しては特に問題は無さそうだし、放っておくことにしましょうか。ジュエルシードを求めている訳では無さそうだし、大丈夫でしょう。」

エイミィ「ええ……クロノ君はうるさいでしょうけど……。」

リンディ「ふふっ……そうねえ……。」

一気に獣人に関する問題について考えるのを止めたリンディは、頭の堅い頑固な息子のクロノをどうやって説得するか考える事にした。

だが、それよりもジュエルシードに関する事件についてが先だ。向こうは戦闘になりかけているようである。

リンディ「……やることは山積みね……。」

不意に呟いた言葉は、誰にも聴こえることなく消えていった。

## 【第18話】暴れる力〜魔獣解放〜（後書き）

【ガリアンビーストに関する補足】

この姿の時のみ、ヴィンセントは魔力変換資質“炎熱”を持つ。

【ケルベロスのリミットブレイク】

イフリートフォーム

形状：具足（デビルメイクライ3のベオウルフの白い光の線を紅くした感じ）

【補足】

漆黒の具足に幾つもの紅い線が走っている。

ルクレツィアがケルベロスに組み込んだ形状の一つ。

ガリアンビーストとなったヴィンセントはケルベロスを使用できないため、魔力を使用して放つ火炎弾と格闘を主としていた。

しかも、魔力の消費が大きいのも難点である。

そこでルクレツィアはヴィンセントが戦いやすくなるよう、ケルベロスを改良した。

その結果、炎熱の変換効率を高めるシステムを組み込んだ。

また、クロスレンジにおける格闘がしやすくなるように具足となった。

他にも、周囲の魔力素を吸収し、魔力を効率良く使用できるシステムを搭載している。

だが、ガリアンビーストは魔力消費が非常に激しいため、変身時間の増加にしなければならない。  
ちなみに、この形態の時はカートリッジシステムは使用できない。

【技】

《メテオストライク》

身体に魔力を収束・圧縮した後、炎に変換し、一気に放出して巨大な爆発を引き起こす。

《デモンズインフェルノ》

メテオストライクと同じく、魔力を収束・圧縮した後、巨大な火球を作り上げて対象に投げつけ、大爆発と巨大な火柱を発生させる。  
収束・圧縮量はメテオストライクの比では無く、莫大な魔力を使用するため、ヴィンセントも一発が限界である。

技のイメージはデジモンのウォーグレイモンが使う【ガイアフォー  
ス】

【第19話】覚醒の刻々闇の書々（前書き）

長い間放置し続けて申し訳ございません。

色々とありまして……ハイ……。

その内二つは活動報告に書かせていただいております。

まあ、なんと申しますか……ホントに色々とありました。

二つ目は一番辛いです……。

もう少し引きずるかも……です。

それでは本編をどうぞ。

ggdgdなのは相変わらずですが……。

少し矛盾が出てきたので、後書きをご覧ください。

【第19話】覚醒の刻〜闇の書〜

はやて「ここは……？」

誰も居ない……何も無い空間の中にはやては居た。

ただ白く、聴こえるのは自分の発した声のみだった。

もちろん、彼女は立つことが出来ないので座り込んでいる。

はやて「うーん……夢なんかなあ？」

ルクレツィア「うん、夢だよ。」

はやて「わひゃあ!？」

はやての疑問に答えたのはルクレツィアだった。

どうやらルクレツィアは、ヴィンセント以外の人物の精神にも干渉できるようだ。

はやては突然現れたルクレツィアに驚き、変な声を上げてしまった。

ルクレツィア「ごめんね……驚かせるつもりは無かったんだ。」

未だ驚きと困惑の表情で焦っているはやてに、ルクレツィアは少々申し訳なさそうに謝罪した。

はやて「は、はあ……。あの〜、すいません、あなたは？」

ルクレツィアが謝罪したことにより、少しは落ち着きを見せたはやては、少々戸惑いながらも彼女の素性を聞くことにした。

ルクレツィア「あつ、そうだったね。私はルクレツィア……ルクレ

ツィア・クレシェント。」

ルクレツィア自信も自己紹介をしていなかった事を思い出し、己の名を明かした。

はやて「ルクレツィアさんですか……わたしは八神はやてです。」

はやてが自己紹介すると、ルクレツィアは彼女の前まで来てしゃがみこみ、はやてと目線合わせた。

そして、微笑みを浮かべながらも真剣な表情になり、はやてと向かい合った。

ルクレツィア「もうすぐ……あなた達にとって大切な物語が始まる……。」

はやて「えっ？」

言葉の意図が掴めず、はやては首を傾げた。

ルクレツィアは気にせず言葉を続けた。

ルクレツィア「その結末は分からないけど、あなたの一生を左右するほど大切な物語なんだ。だから」

ルクレツィアは言葉を切り、はやての頬に手を当てて言葉の続きを紡いだ。

ルクレツィア「 何があっても逃げちゃダメ。生きること諦めないで。」

ルクレツィアの放った言葉と共に、両者の間に暫しの沈黙が訪れた。だが、その沈黙もルクレツィアによって破られた。

ルクレツィア「これは夢だけど、私が言ったことは忘れないで欲しいんだ……。」

はやて「あの……それって、どういう事……えっ!？」

言葉と共に手を離れたルクレツィアに、はやては言葉の意味を聞くとしたが、それは出来なかった。

ルクレツィアの体が透け始めたからだ。

はやて「あ、あの!……なんで!？」

はやては狼狽え、パニックに陥った。

夢の中とはいえ、人が突然透け始めれば無理もない。  
一方、ルクレツィアは微笑みを浮かべながら【時間だね……。】な  
どと呟いていた。

ルクレツィア「じゃあね、はやて。それと……。彼をよろしく。」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「……うん……やっぱり夢かあ……そやけど妙に現実感が  
……。」

目を覚ましたはやては、あの夢が持つ現実感に少しばかり戸惑って  
いた。

はやて「……彼って……ヴィンセントさんの事なんか？」

はやては、消え行く瞬間にルクレツィアが呟いた言葉の意味を考えていた。

はやて「ヴィンセントさんとルクレツィアさん……どんな関係なんやろか？」

だが、最も気になったのは彼女とヴィンセントの関係だった。

彼らの付き合いは自分よりも圧倒的に長い……自然とそう考えてしまふ。

しかし、消え行く瞬間に見た彼女の表情は寂しさを含んでいた。

はやて「うーん……。」

はやては唸りながら某名探偵の如く、顎に手を当てて考え始めた。

そして、時間にして約30分後、誰かが扉をノックした。

もちろん、ヴィンセントである。

しかし、はやては

はやて「むーっ……。」

相も変わらず、顎に手を当てたまま唸っていた。

ヴィンセント「起きているか？」

今度はノックした後、呼び掛けてみた。

しかし、返事が帰って来るわけもなく、ヴィンセントは許可なくはやての部屋に入るのを少々戸惑いながらも、扉を開けて入った。

はやて「うにゆ〜……。」「

ヴィンセント「？」

考えすぎて知恵熱でもでたのか、はやては顔が赤くなり、それでも体勢は全く変わらずに考え続けていた。

もちろん、ヴィンセントには何が起こったのかなど分かる筈もなく、顔が赤いのは風邪のせいかと考え、はやての元へ向かうや否や、彼女のデコに己の右手を当てた。

はやて「ひゃあ!？」

当然の如く、突然デコに手を当てられたはやては驚き、考えを中断せざる得なくなった。

しかし、最初は驚いたものの、手の正体はこの家に住まう己の家族であることに気付き、目をそちらに向けた。

もちろん、はやては別の意味で顔を赤く染めたのを追記しておこう。

ヴィンセント「……少し熱い気がするが、大丈夫か？」

はやて「えっ? / / / /」

ヴィンセント「熱がある気がするが……どこか苦しくは無いか？」

はやて「えっ……………あつ……………ははは……………だ、大丈夫や。ちょっと考え事とつてな……………。知恵熱や、知恵熱! / / / /」

今は別の意味で顔が赤くなり、体温が高いのもそれが原因なのだが、はやてが言うわけがない。

ヴィンセント「そうか……所で、知恵熱が出るほど何を考えていたんだ？」

肝心な所には鋭いヴィンセントの事である。

はやてが何を考えていたのかが気になり、聴くことにした。

すると、はやては思い出したかのように手を叩き、　そや！……  
と言ってヴィンセントの方を向いた。

はやて「ヴィンセントさんはルクレツィア・クレシエントって人の事、知ってる？」

ヴィンセント「　ッ！？……はやて、なぜお前がルクレツィアの事を知っている？」

先程までの優しげな雰囲気は一瞬にして消え去り、代わりに部屋を満たしたのは一触即発になりかねない、ピリピリと肌を刺すような緊張感だった。

はやて「ひうつ！？……ヴィ、ヴィンセント……さん？」

だが、そんな緊張感にはやてが耐えられるわけもなく、今にも泣きそうになってしまった。

はやてをそんな状態にしてしまったヴィンセントはというと、その様子を見るや否や、自信も気付かずに出していた鬼気迫る雰囲気を消し去り、申し訳なさそうに彼女に向き合った。

ヴィンセント「すまない……。お前の口からルクレツィアの名を聞くとは思わなかった……。（私は……未だ決別できていないのか？）

「  
はやての頭を撫でながら、心の中では苦虫を噛み潰したような気分だった。」

だが、ヴィンセント自身は己の過去と決別はできている。

今回ののは、彼の中ではルクレツィアと言う存在は大きすぎるのが原因だろう。

しかも、家族と言えど話したことの無いはやてにその名を言われれば……だ。

はやて「う、ううん……ごめんな……。」

はやては自分が悪いと思ったのか、俯いてしまった。

ヴィンセント「いや、謝るのは……私だ……。」

だが、ヴィンセントとしては己が悪いと分かっているので、潔く頭を下げて謝った。

そして、両者の間に重苦しい沈黙が漂った。

はやて「……なあ、ヴィンセントさん……。」

先に沈黙を破ったのは、はやてだった。

ヴィンセントは静かに彼女の方を向いた。

はやて「今すぐ話して欲しい……なんて事は言わへん……。いつかでええ……ヴィンセントさんからルクレツィアさんの事を話してくれるんを、わたしは待ってる……。だからな」

彼女の本音を言えば、今すぐにも話して欲しい。

しかし、無理に聴くことを彼女は望まなかった。  
いつか、彼の方から話して欲しいから……。  
たがら

はやて「その時には教えてな?……」  
「ヴィンセントさんの過去も。」

ヴィンセント(……気付いていたのか。)

ヴィンセントがこの世界に辿り着いた際、彼はかつての世界の事や  
辿り着いた経緯などは説明したが、己の過去についてはあまり話し  
ていなかった。

だが、はやてはその事に気付いていたのだ。  
それでも尚、ヴィンセントから話すのを待つと言っただ。

ヴィンセント(彼らに似ているな……。)

ヴィンセントの脳裏に浮かんだのは、穏やかな雰囲気常を纏う、  
子供思いな夫婦だった。

はやてが出した答えも、彼らと遜色無いものである。  
だからこそ、ヴィンセントも覚悟を決めた。  
かつて、彼らにそう言ったように

ヴィンセント「ああ……いずれ話そう……全てをな。」

はやて「うん、待ってるで。」

いつもの雰囲気か二人の間に戻り、部屋には二人を包み込むように太陽の光が射していた……。

ヴィンセント「なぜ、お前がルクレツィアを知っているのだ？」

あの後、彼らは少し遅い朝食を食べていた。

その最中、ヴィンセントが口を開いた。

はやてがルクレツィアの事を知っている理由が気になったからである。

はやて「……夢に出てきたんよ。」

ヴィンセント「夢に？」

はやて「うん……もうすぐ、わたしらにとって大切な物語が始まるって……。」

ヴィンセント「……………」

はやてが語ったルクレツィアの言葉の真意について、ヴィンセントは考え始めた。

もちろん、ルクレツィアが嘘を言う訳がないので重要な事なのだろう。  
大切な物語……それが一体、何を意味するのは分からないが、一波乱あるのは覚悟しておかなければならない。

それはただ……大切な家族を守るために……。

はやて「わたしからも一つだけ聞きたいことがあるんよ。」

ヴィンセント「？」

はやての呼び掛けに思考を戻したヴィンセントは、何をだと、言わんばかりの表情を彼女に向けた。

だが、彼女を見た瞬間、ヴィンセントは不穏な空気を感じ取った。

はやて「ルクレツィアさんは……ヴィンセントさんのナニ？」

ヴィンセント「……………」

いつの間にか、記憶の彼方に追いやられていた非常にどす黒いオーラをはやてが出し始めたのだ。

これから己が語る一言で、自身に不幸が訪れかねないと本能が警告してきた。

確かに、ヴィンセントにとってルクレツィアは大切な存在である。

昔の彼ならば、ここで愛する女性と答えるだろう。

だが、今では違う。

彼の答えは決まっていた。  
そして、彼が選んだ答えは

ヴィンセント「彼女は……私の命の恩人だ……。」

はやて「……そっかあ。ほんなら、次に会ったらお礼を言わなアカンな……。」

先程のどす黒いオーラは何処へやら……はやての顔は慈愛に満ちていた。

そして、どこか嬉しそうだった。

ヴィンセント「ああ……。それはそうと、食事が済んだら着替えておけ。」

肯定の意を示した後、思い出したかのようにヴィンセントが口を開いた。

はやて「どこか出掛けるん？」

ヴィンセント「ああ。」

出掛ける理由は言わず、短く返事をしたヴィンセントは、ただ黙々と食べ始めた。

一方、はやては頭に？マークが浮かんでいるかのように見える。

そんなこんなで、少し波乱万丈な八神家の朝は過ぎていった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「あはは！くすぐったいで！」

犬「ワンワン！」

ヴィンセント「……………」

海鳴にある巨大なショッピングモール。

その中にあるペットショップの一角で、はやては大量の犬と戯れていた。

ヴィンセントはそれを見守っていた。

ちなみに、ヴィンセントの今の格好は黒いカッターシャツに黒いベスト、黒いレザーパンツである。

そして、最も目が行くのは真っ赤なレザー製のロングコートである。初夏の時期にこのような厚着は非常に可笑しいのだが、如何せん似合っているため誰も変に思わないのだ。

むしろ、周囲からお熱い視線が来るくらいである。主に女性から。

中には鼻息の荒い男が数人混ざっていることを追記しておこう。

はやて「えへへ……………」

一方、はやては楽しげに犬とじゃれ合い続けていた。

すると、ヴィンセントは定員に何やら話すや否や、彼女を置いてその場から姿を消した。

数分後、彼は再び、この場に戻ってきた。  
手には他店の袋があった。

どうやら、何かを買いに行っていたようだ。

一方、この場に置いてきぼりにされたはやては、その事に気付くこともなく、犬と戯れ続けていた。

だが、店員は相も変わらず微笑み続けていた。

そしてヴィンセントははやてに近づいた。

はやて「あっ、ヴィンセントさん。」

ヴィンセント「そろそろ行くぞ。」

はやて「……うん。」

ヴィンセントがそう言うと、はやては名残惜しそうに犬を離した。その表情は、どこか寂しげだ。

そうして、彼らはショッピングモールを後にした。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

桃子「あら……いらっしやい、ヴィンセントにはやてちゃん。」

士郎「おや？……いらっしやい、はやてちゃんは久しぶりだね。」

はやて「はい！お久しぶりです。士郎さん、桃子さん。」

ヴィンセント「ふっ……相変わらずだな、お前達は……。」

ヴィンセント達が次に訪れたのは翠屋だった。

高町夫妻は彼らを見るや否や、彼らを歓迎した。  
そのまま話していると

???「あれ？どうかしたの？お父さん、お母さん。」

話し声を聞いたのか、店の奥から一人の女性が出てきた。

翠屋お馴染みの黒いエプロンを付け、士郎と同じ焦げ茶色の髪を長く伸ばして三つ編みにして眼鏡をかけた、まだ少女らしさが抜けきっていない女性である。

桃子「あら、美由希。」

どうやら彼女は高町家の長女【高町美由希】だったようだ。

以前、士郎から色々と聴いていたヴィンセントは名前だけでそれか分かった。

だが

はやて「士郎さん、あの人は？」

はやてにとっては会ったことも聴いたこともない名前である。  
直ぐ様士郎に聴いた。

士郎「ああ、ヴィンセントとははやてちゃんは始めて会ったな。」

娘の美由希だ。」

美由希「初めまして、高町美由希です。へえ、あなたがヴィンセントさんなんだ。」

ヴィンセント「？」

自己紹介をするや否や、美由希はヴィンセントを興味深そうに見た。

美由希「あつ、ごめんなさい。恭ちゃんが言ってたんだ。お父さんにも劣らない強者がいるって。」

ヴィンセント「そうか……。」

すると、ヴィンセントは少し渋い顔をした。

どうやら、恭也が原因らしい。

となると、彼女も恭也と同じくシスコンかもしれない。

何せ初めて会った日、酔った途端に「なのははやらん！」などと言つて襲い掛かってきたのだから。

美由希「私は恭ちゃんじゃないから、急に襲い掛かったりはしないよ。」

ヴィンセント「そうか……ヴィンセント・ヴァレンタインだ。」

思考が見破られていたようだ。

だが、彼女の返答に納得がいったため、ヴィンセントは面倒なことにならずに済んだことを密かに安堵した。

はやて「初めまして、八神はやて言います。」

美由希「よろしくねー、はやてちゃん。」

はやてが自己紹介をすると、年相応の笑顔ではやてと話し出した。  
一方、ヴィンセントは

ヴィンセント「頼んでいたものは出来ているか？」

桃子「ええ、もちろん。」

ヴィンセント「そうか……すまないな。」

どうやら、ヴィンセントは桃子に何かを頼んでいたようだ。

桃子「気にしないで。あなたにはたくさん……助けられたから。」

ヴィンセント「？」

どこか嬉しそうに桃子がそう言った。  
そこに士郎も来た。

士郎「なのはの事さ……。まだ遠慮している所はあるが、少しずつ  
……昔のように甘えてくれるようになったんだ。」

桃子「あなたのおかげよ。本当に……ありがとう。」

どうやら、二人が言っているのはなのはの事らしい。  
ヴィンセントは話の内容から、彼らが想いを伝えた事を知った。  
だが、彼の性格からすると答えは決まっている。

ヴィンセント「答えを出したのはお前達だ。私は何もしていない…  
…気にするな。」

桃子「うふふ……。」

士郎「ふっ……。」

ヴィンセント「……。」

高町夫妻も予想通りの答えが返ってきたため、思わず笑ってしまった。  
た。

二人の反応に対し、ヴィンセントは怪訝そうな表情をした。

士郎「いや、すまない……。あまりにも予想通りの返答だったから  
つい……。」

桃子「あなたってホント……不器用ね。」

ヴィンセント「……大きなお世話だ。」

桃子の言い分が気に入らなかったのか、ヴィンセントはそっぽを向  
いてしまった。

少し騒がしい、昼下がりの翠屋であった。

・  
・  
・  
・  
・

はやて「ごちそうさまでした。」

桃子「はい、お粗末様でした。」

あの後、ヴィンセント達は翠屋で昼食を取った。

ヴィンセントとしては最初からそのつもりだったようだ。

はやて「美由希さんもガンバラなアカンで？」

美由希「うっ……容赦無いなあ、はやてちゃん……。」

どうやら、美由希は料理が苦手のようなのだ。

はやてにそう言われ、【ornz】っている

一方、ヴィンセントは

士郎「お代は要らないよ。」

ヴィンセント「そういう訳にはいかない。」

お代は要らないと士郎に言われ、少しばかり困っていた。すると、そこに桃子がやって来た。

桃子「私たちなりのお礼よ。気にしないで。」

ヴィンセント「……………」

桃子が言っているのはなのはの事だろう。

だが、ヴィンセントとしては何かをした覚えが無いのが本音である。そして、彼が出した答えは

ヴィンセント「不本意だが、その礼は受け取ろう。だが、“アレ”の料金は支払うぞ。」

“アレ”とは、ヴィンセントが二人に頼んでおいた物である。

士郎「ふう……分かったよ。」

桃子「本当はそっちも受け取らないつもりだったのだけれど……。」

ヴィンセントの意思を感じ取った二人は折れたようだ。

どこまでもお人好しな夫婦である。そのまま、暫く雑談をしていると

はやて「あっ……もうこんな時間か……。そろそろ帰らんと……。」

ヴィンセント「そのようだ。」

はやてがそう言った。

随分と話し込んでいたのか、既に夕日が浮かんでいる。

ヴィンセント「ではな……。士郎、桃子。それから美由希。」

はやて「また来ます〜。」

士郎「ああ……いつでも歓迎するよ。」

桃子「待ってるわ。」

美由希「じゃあね、はやてちゃん、ヴィンセントさん。」

各々が別れの挨拶を済ませ、ヴィンセント達は翠屋を後にした。

ちなみにヴィンセントの手には、何やら大きな箱があった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「さて、お風呂に行ってくるわ。」

ヴィンセント「はやて、待て。」

夕食の後、はやてが風呂に入ろうとしたが、ヴィンセントが呼び止めた。

はやて「ん？……どないしたん？」

はやては何の事か分からないと言わんばかりの表情である。

今日が何なのか……彼女は忘れていたようだ。  
すると、ヴィンセントは袋から何かの箱を取り出してはやてに渡した。

ヴィンセント「少し早いけど、誕生日おめでとう。」

はやて「……えっ?」

突然の出来事に対し、はやてはキョトンとしてしまった。

ヴィンセント「6月3日……明日はお前の誕生日だろう?」

はやて「あっ……。」

それに気付いたはやては、渡されたものが誕生日プレゼントであることに気が付いた。ヴィンセントは覚えていたのだ……彼女の誕生日を。

はやて「あの……開けてええかな?」

ヴィンセント「ああ……。」

ヴィンセントがそう言うつや否や、はやては綺麗に包装された箱を開けた。

中に入っていたのは、十字架に装飾が施されたネックレスだった。あまりの嬉しさに、はやては思わず目の奥が熱くなった。

はやて「……………ありがとうな、ヴィンセントさん……………」

ヴィンセント「気に入ったか？」

はやて「うん……………。その……………着けてもらってもエエかな？」

ヴィンセント「ああ……………」

はやてに頼まれたヴィンセントは、静かにアクセサリーを着けた。

はやて「……………に、似合ってるかなあ？」

ヴィンセント「ああ……………大丈夫だ。」

恐る恐る、ヴィンセントに聴くと、彼は微笑みながらそう言った。

次にヴィンセントは冷蔵庫から何かを取り出した。

それは翠屋で彼が購入した“アレ”である。

ヴィンセント「ケーキも用意してある。」

そう、彼が購入したのは誕生日ケーキだったのだ。

彼は数日前、桃子にはやての誕生日ケーキを依頼していたのだ。

はやて「うっ……………ヒック……………」

ヴィンセント「……………どうして泣くのさ？」

はやては泣き出してしまった。

もちろん、ヴィンセントからすれば泣く理由が分からない。

気に入らない事でもあるのか？……そう言おうとした途端、はやてが口を開いた。

はやて「ちゃうんよ……嬉しいんや……ヒック……こっやって……誰かに祝ってもらうんは……ウック……嬉しゅうて……。」

ヴィンセント「そうか……そうだったな……。」

そう言うとヴィンセントは静かにはやてを抱き締めた。

はやて「ありがとう……ヴィンセントさん……。」

はやてはヴィンセントの胸に顔を埋めて礼を言った。

ヴィンセント「気にするな……。私たちは……家族なのだから……」。

はやて「うん……うん……！」

そうして、彼らは再び、家族の絆を確かめあった。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

ヴィンセント「まだ眠らないのか？」

はやて「うん……わたしの誕生日になるまでは起きてる。」

ヴィンセント「そうか……。」

時刻は午後11時30分。

はやては未だ眠らず、ヴィンセントに寄り添ったままじっとしていた。

あの後、はやてはヴィンセントに「一緒に寝て欲しい」と言った。

一方、ヴィンセントは「今日は特別だ」と言っただけを受け入れた。お互い無言ではあるが、決して気まずい空気ではない。寧ろ心地よい静寂である。

そのまま時は過ぎ、いよいよはやての誕生日を迎えようとしていた。

はやて「もう……一年になるんやな。」

ヴィンセント「何がだ？」突然、はやてが静かに呟いた。

はやてがポツリと呟いた言葉に、ヴィンセントは反応した。はやて「ヴィンセントさんと出会ってから、もう一年が経つんやなあ……っつて。」

ヴィンセント「そうか……そうだったな。」

彼女の言葉には嬉しさや楽しさなどを含んでいた。

ヴィンセントもはやての想いを感じ取り、思い出すように目を瞑った。

ヴィンセント（あれからもう一年か……。）

6月4日、それはヴィンセントにとっても大切な一日でもあるのだ。

戦いの果てに辿り着いた平行世界、出会ったのは孤独な少女、さらけ出された彼女の悲しき想い、新たにできた家族と友人……。

思い返せば一年など早いものである。

そしてはやてと出会い、自分は確かに変わった。

過去の自分ならば感情をあまり出さなかった。しかし、今は違う。時には怒り、時には笑う……そんな人間として当たり前前の事ができるのだから。

過去と決別できた事が最大の要因ではあるが、彼女と出会った事も同じくらい意味があるのだろう。

いつの間にか彼は微笑みを浮かべ、隣に寄り添っていたはやての頭を撫でていた。

はやて「うう……くすぐりたいで……。」

僅かに頬を赤く染め、はやては目を細めながら言った。

ヴィンセント「すまない……。」

だが、そう言って手を離そうとすると

はやて「あ、あの……!」

ヴィンセント「?」

はやて「もうちょっとだけ……お願いや。」

ヴィンセント「分かった……。」

ヴィンセントに撫でる事をお願いした。

はやては彼に撫でられるのが好きなのだ。

この手に自分は救われたのだから……。

ヴィンセントは何も言わず、再び、はやての頭を撫で始めた。

時刻は午後11時59分……ついにはやての誕生日を迎えようとしていた。

そして、ついに時計が0時を示した次の瞬間

ヴィンセント「ッ!？」

ケルベロス Set up!

はやて「？……どないした……ん？」

突然、近くで魔力を感じたヴィンセントがはやてを守るように構えた。

直ぐ様ケルベロスを起動し、いつでも弾丸を放てる状態である。

ヴィンセントの行動にはやては驚いたが、意識は別の所に向かっていた。

枕灯の灯りのみの部屋に広がる紫の光に気付いたからである。

光を発していたのは、彼女が子供の頃から持っていた謎の本からであつた。

ヴィンセントもその本から魔力を感じ、銃口を向けていた。

はやて「え？……きゃ！？」

光が一層強くなったと思いきや、家が大きく揺れ、はやてはヴィンセントにしがみついた。

ヴィンセントもより一層表情を険しくし、本を睨んだ。

本は浮かび上がり、二人へ近づいてきた。

だが、本は浮かんだまま彼らの頭上より少し手前で制止し、自らを縛り付ける鎖をちぎり去り、頁はまるで風に捲られるように捲られた。

謎の本 封印を解除します。

突然響いた電子音と共に本は閉じ、彼らの目の前まで降りてきた。

はやてはより一層強くヴィンセントにしがみつき、迫り来る恐怖から耐えようとしていた。

謎の本 起動

はやて「え、えええ!？」

その電子音と共に、はやての胸元が大きく光った。

ヴィンセント（あれは……確か……。）

彼女の胸元からは白く輝く玉のような物が現れた。

魔力を生成する器官【リンカーコア】、ヴィンセントは直ぐに気付いた。

そのままはやてのリンカーコアは心臓の駆動音のような音を出しながら、本に向かって行った。

そして、リンカーコアが本に接触した瞬間

ヴィンセント「ぐっ!」

はやて「くうっ!？」

部屋に巨大な閃光が走り、二人は思わず目を覆った。

ヴィンセント「一体、何が…… ツ!？」

はやて「え、えつと…… ツ!？」

そして光が晴れた後、二人の目に写ったのは四人の人間だった。

長いピンク色の髪をポニーテールに纏めた女性、金髪の髪を短く揃えた女性、朱色の髪を三つ編みにした少女、何時しか会ったアルフのような犬耳をしたガタイのいい銀髪の男である。

ピンク髪の女性「闇の書の起動を確認しました。」

金髪の女性「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士に御座います。」

銀髪の男「夜天の元に集いし雲……」

朱髪の少女「ヴォルケンリッター……何なりと命令を。」

ヴィンセント「……何者だ？」

ヴィンセントはヴォルケンリッターと名乗った四人にケルベロスを向けた。

何か動きがあれば、即座に撃ち落とすつもりである、

ピンク髪の女性「貴様こそ何者だ？」

そう言ってピンク髪の女性が剣を出したが

ピンク髪の女性「ぐっ!？」

朱髪の少女「シグナム!？」

ヴィンセントによって、即座に剣を弾き飛ばされた。

同時に朱髪の少女が叫んだ。

どうやらピンク髪の女性はシグナムと言っらしい。

朱髪の少女「テメエ……グラーファイズ クライムショット うわっ!？」

金髪の女性「ヴィータちゃん!？」

ハンマーのような武器を出した朱髪の少女だったが、起動と共に弾き飛ばされた。

彼女はヴィータと言っらしい。

ヴィンセント「今一度聞く……何者だ？」

ヴォルケンス「ぐっ!？」

ヴィンセントは重く、鋭い殺気を込めて四人を睨んだ。

彼が放つ強大な殺気に当てられ、四人は思わず怯んでしまった。

銀髪の男「名を聞くのならば、先に名乗るのが礼儀ではないのか？」

この現状の中、銀髪の男がヴィンセントに向けてそう言った。

突然の言動にヴィンセントも少し驚いたが、間違っではないので先に名乗ることにした。

ヴィンセント「確かにな……ヴィンセント・ヴァレンタイン。」

シグナム「我らはヴォルケンリッター、闇の書と主を守る守護騎士。私は烈火の将【シグナム】。」

ヴィータ「……鉄槌の騎士【ヴィータ】。」

金髪の女性「湖の騎士【シャマル】です。」

銀髪の男「盾の守護獣【ザフィーラ】。」

ヴィンセントが名乗ると彼女達も名乗った。

自分たちを騎士と言っていたのなら、礼儀を知らない訳では無さ

そっだ。

シグナム「そうか……では聞くがヴィンセント・ヴィンセント、貴様はいっせ「その前に……」……なんだ？」

話を進めようとしたシグナムだったが、ヴィンセントによって中断され、不満そうに訳を聞こうとしたが

ヴィンセント「はやてが気絶してしまっている。」

シグナム「は………？」

シャマル「嘘っ!？」

予想外の出来事に中断せざるを得なくなってしまうた。実際、はやては驚きのあまり、目を回して気絶していた。

ヴィンセント「はやてはお前達の主なのだろう?ならば、話は彼女が目覚ましてからだ。」

そう言っではやてを抱き上げた。

俗に言う【お姫様抱っこ】である。

そのまま、彼女に上着を掛け、部屋を出ようとする

ヴィータ「おいテメエ、何処へ行きやがる!？」

今にも飛び掛からん勢いで、はやてを抱いているヴィンセントを怒鳴った。

ヴィンセントは立ち止まり、行き先を告げた。

ヴィンセント「病院だ。付いてくるかどうかは……お前たちで決める。」

そう言って再び、歩き出そうとしたが

ザフィーラ「一つだけ答えてくれ。お前は主のなんだ？」

ザフィーラがヴォルケンズにとって、最も重要な質問をしてきた。敵ならば倒さねばならないし、味方ならば無礼を詫びなければならぬ。

この中で最も冷静なザフィーラらしい考えである。

ヴィンセント「家族だ。」

その一言に秘められた想いをヴォルケンズは読み取ったのか、ヴィンセントに続く形で歩き始めた。

約一名、納得がいかなそうだが……。

【第19話】覚醒の刻々闇の書々（後書き）

【クライムショットについて】

以前、この技は着弾後に爆発すると書いていましたが、今後はヴェインセントの任意によって爆発するか否かがきまります。

【第20話】ヴォルケンリッター〜混沌の決意〜（前書き）

今回は短いです。

理由は読んでいただければ分かります。

それではどうぞ。

【第20話】ヴォルケンリッター〜混沌の決意〜

石田「はやてちゃん……よかったわ。何ともなくて……。」

はやて「えつと……すんません。」

石田「で、誰なの？あの人たちは。それに、ヴィンセントさんも。」

はやて「……あつ！」

朝になり、はやては目を覚ました。

だが、彼女は困惑していた。

気がつけば病院に居て、目の前には石田医師が居るのだから。

だが、問題は別の所にあつた。夜中に突然現れた、謎の四人である。四人とも、黒いインナーを着こんだ怪しさ抜群の人間である。

シグナムとザフィーラは仏頂面で、ヴィータはそっぽを向いて面倒臭そうに、シャマルは目に見えて困惑している。

そして、極めつけはヴィンセントである。家でしか着ない服を着たまま、この場に居るのだから。

はやてが驚くのも無理はない。ちなみにヴィンセントは、はやての隣で腕を組んで佇んでいる。

石田「どういう人たちの？春先とはいえ、まだ寒いのに薄着で変な格好しているし、言ってることはワケわかんないし……どうも怪しいわ。」

はやて「あー、えつと……その……何と言いましょうか……え……  
……あう……。」

いよいよはやても訳が分からなくなり、遂にヴィンセントに助けを  
求める視線を向けた。

ヴィンセントもそれに気付き、溜め息をついた後、はやてとヴォル  
ケンズに念話を飛ばした。

ヴィンセント『私に話を合わせる。』

はやて「ふ、ふえ？」

シグナム『思念通話です。心で念じて頂ければ……。』

もちろん、今まで念話などしたこと無いはやては驚きを隠せない。  
だが、そこでフォローしたのはシグナムだった。

ヴィンセント『はやて、構わないか？』

はやて『うん。みんなもヴィンセントさんに話を合わせてな？』

シグナム『……分かりました。』

ヴォルケンリッターのリーダーとして、シグナムは了承し、話は纏  
まった。

ヴィータは相変わらず不満そうだが……。

ヴィンセント「先生、彼女達は私の家族です。」

石田「えっ？」

ヴィンセント「私は先に仕事が付いたため日本に来ましたが、彼

女達は事情により日本に来るのを先送りしていました。」

石田「と言うことは……」

去年の今頃、ヴィンセントが石田医師に言ったことを彼女は覚えていた。

それ故に、ヴィンセントが次に言おうとしている事が分かった。

ヴィンセント「はい。彼女達ははやての遠戚です。はやての誕生日を祝おうと、皆で仮装して驚かせようとしたのですが……」

彼は次に未だ混乱しているはやてに目を向けた。

“話を合わせる”と彼の目は言っている。

はやてもそれに気づき、ヴィンセントの言葉の続きを紡いだ。

はやて「わたしがびっくりし過ぎて気絶してもおたと言うか……

その……そんな感じで……なあ？」

だが、急に話を振られた彼女が全てを語れるわけもなく、はやての視線は困惑の表情を浮かべているヴォルケンスへと向かった。

シャマル「そ、そうなんですよ……」。

シグナム「……その通りです。」

彼女達も話を合わせようとはしたが、どこか怪しげな返事をしてしまった。

それが原因だろうか……石田医師は怪訝そうに彼女達を見ていた。その様子を見ていたはやてとヴィンセントは

はやて「は、ははは……ははははは……」。

ヴィンセント「ハア……」。

一方は苦笑し、もう一方は溜め息をついていた。

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

はやて「そっかあ……この子が闇の書ってモンなんやね。」

シグナム「はい。」

その後、ヴォルケンスを交えた八神家一行は、無事に家へ帰ってきた。

一時はどうなることかと思っていたヴィンセントではあったが、最終的には石田医師にも信じてもらい、なんとか切り抜けることが出来た。

なんだかんだ言っても、石田医師はヴィンセントを信頼しているのだ。

現在、彼らはヴォルケンスより謎の本こと【闇の書】について説明を受けていた。

古代ベルカ式魔導書型デバイス【闇の書】

生物が持つ魔力の源【リンカーコア】を蒐集し、全666頁を埋めることで所有者に絶大な能力を与える物だそうだ。

シグナム達【ヴォルケンリッター】は闇の書の守護騎士システムの総称であり、主の剣であり盾でもあるらしい。

話を聴く限り、彼女達は敵では無いと結論付けたヴィンセントは、闇の書の主となったはやてへと目を向けた。

彼女によると、物心が着いた頃時には棚にあり、綺麗な本だったという理由から大切にしていた……と言うのは以前から聴いていた。地球では魔法は認識されていない筈なのだが、八神家にあつたと言う矛盾、仮面の二人組による襲撃、そして……はやてから聴いたルクレツィアの【物語が始まる】と言う言葉。

ヴィンセント（やはり、全ては繋がっているのか？）

未だにはまらないパズルのピースを組み立てるかの様に思案し出したヴィンセントであったが

シグナム「ヴィンセント・ヴァレンタイン」

先程まではやての言葉に耳を傾けていたシグナムが話し掛けてきたので、意識をそちらに向けた。

彼女の方を向くと、ヴォルケンス全員が彼を見ていた。

ヴィンセント「なんだ？」

シグナム「貴様は何者だ？主はやての家族と言うのは認めよう。だが――」

ヴィータ「テメエからは妙な力を感じるんだよ！」

シグナムが言おうとした言葉をヴィータが横取りするかの様に言った。

それも殺気を向けながら……。

ヴィータ「ただの魔力なんかじゃねえ…… テメエはホントに人間かよ!？」

はやて「 ツ!？ヴィータ!！」

どうやら、彼女達はヴィンセントの中に潜む者に気付いていたようだ。

シグナムやシャマル、ザフィーラはヴィンセントの【家族】という言葉信じたようだが、ヴィータはその力を感じたが故に信じられないのだろう。

ヴィータ以外の三人も、主の家族とは認めても、その力によって主を傷つけられる訳にはいかないと考えているのだろう。

“ 敵対するのなら倒す ” と……その意志が強く感じられる。

ヴィンセント（時が来たようだ……。）

ここまで来れば己の過去を話さねばならない……そう考えたヴィンセントは覚悟を決めた。

いつまでも隠し通せる訳が無いと分かってはいたとはいえ、いざ話すとなると気が重い。

それは“ 恐怖 ”……。

自身の過去を知った上で、彼女達は以前の様にならずに彼と関わってくれるのだろうか、と言う恐怖。

ヴィンセント「……はやて。」

はやて「ヴィンセントさん？」

全てを話す覚悟を決めたヴィンセントは、困惑しているはやてに話し掛けてきた。

ヴィンセント「そしてシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ……私の過去を話そう。全てをな……。」

それは過去に囚われ続け、償いを求めた……悲しき男の物語。

【第21話】過去と今と、新たなる決意（前書き）

3ヶ月も更新を怠ってしまい、本当に申し訳ありません。

大学生活に慣れるのに時間がかかり、過去を纏めようにも半日以上家に居ないがゆえに、過去編を書くのは不可能でした。期待していた方がいらっしやったら申し訳ありません。

今後は前より遅くなると思いますが、それでも放置よりはマジになると思っています。

それでは、グタグタですが最新話をご覧ください。

【第21話】過去と今と、新たなる決意

ずっと独りやった……。

父さまも、母さまも居なくなつて……。

極めつけは自分の身体……。

気がつけば一人で歩けない、車椅子が無かつたらまともに暮らすことすらままならない、自分の身体……。

そんな私を助けてくれるのは病院の先生だけ……。

毎日が嫌やつた……。

独りは嫌やつた……。

でも

私は……常に孤独

ずっと、そう思ってた……。

そやけど……あの人が家族になってくれた。

突然現れたあの人は、“私の家族になる”……そう言ってくれた。

それだけで……私には十分やった。

もう何もいらん……この人が居ればそれだけでいい。

一緒に居てくれるだけで……たまらなく嬉しかった。

私の家族で居てくれるだけで……それだけでよかった。

だから、この人がどんな過去を背負ってても、私なら大丈夫……そう思ってた。

思ってたんやけど

あまりにも……辛すぎるよ……。

「これが私の過去だ。」

あれから一同はリビングへと場所を変え、ヴィンセントの過去を聞いた。

始まりの実験

ルクレツィアとの出会い

ジェノバプロジェクト

北条の実験とガリアンビーストの同居

罪の意識から眠り、目覚めまでの過程

クラウド達とセフィロス

カダージュの起こした事件

そして……世界を救うために戦った、生命と終焉の物語。

ヴィンセントは全てを包み隠さず、はやて達に話した。

「そして私はこの世界に流れ着き、はやてと出会った。」

そう言ってヴィンセントは閉じていた瞳を開けた。

そして、彼の目に写ったのは

「う、ひっく……。」「

「なんで……なんで!?!」「

「涙など、とうに枯れ果てたと思っていたのだから……。」「

「聞くのは軽卒でしたね……。」「

「すまなかった。」「

泣きじゃくるはやてと、涙を流しながら謝罪を述べるヴォルケンリッターだった。

「いずれは話さねばならないことだ……気にするな」

だが、ヴィンセントは謝るヴォルケンリッターに対してそう言った。そして、次に彼ははやてへと視線を向け。

「はやて……これが私の過去だ。子供のお前に聞かせるべきではなかったのかもしれない。すまなかったな。」

「うぐっ、えつく」

彼女は言葉に出さず、首を横に振ることでヴィンセントの謝罪を否定した。

「私の犯した罪は償えん。止めなかった結果、世界を壊してしまっただけだから。故に私の罪は重く、終わらない時を生きながら背負わねばならん。」

過去を乗り越え、罪を背負う……。

ルクレツィアの想いを知ったヴィンセントが決めたことである。直接手を下した訳ではない……しかし、間接的に多くの人の命を奪ってしまう原因を作ってしまった。

「だが、止めなかったのではなく、止められなかったのではないのか？」

「違う。」

シグナムはそう言うが、ヴィンセントは首を振り否定した。

「止められたはずだった。だが、私は諦めてしまった。彼女がいいなら構わない……とな。」

事実、当時のヴィンセントにとって、ルクレツィアが幸せならよかったのだ。

それ故に、彼女が決めた事ならば構わない……と止めなかったのだ。

「ともあれ、私は全てを受け入れた。愚かな過去も……己の身体も……そして、私に生きてほしいと願ったルクレツィアの想いも……」

「だからこそ　と、ヴィンセントは己の想いを……進むと決めた道を……はやて達々に伝えようと決めた。それがどれだけ苦しい茨の道だとしても、話した以上は言わねばならぬ、と……」。

「私は終わらぬ時を生きる。どれだけ悔いても戻らぬ生命だと解っているからこそ……ただ一人、終わらない罪を背負いながら……」。

「……一人やない。」

ヴィンセントが想いを口にし、一時の沈黙が訪れたリビングに小さくも声が響いた。

発したのは、この世界で最も長くヴィンセントと過ごし、彼が護ると決めた一人の少女……はやてだった。

「はやて？」

「私も背負う。家族の罪や……私も背負うから……だから」

今にも泣きそうに……いや、事実泣いているのだが、それでもヴィンセントに伝えたいとする意志が、はやてにはあった。

「一人なんて言わんといて……。ここに居るみんなが家族や……。独りやった私を助けてくれたヴィンセントさんの罪……。私にも背負わせて……。」

それを期に、はやてはこらえていた涙を流して鳴き始めた。

9歳の子供が罪を背負うと言っても、誰も信用などしないだろう。

「はやて、ありがとう。」

だが、ヴィンセントの心には確かに届いていた。

愚かな自分を受け入れてくれたはやてに感謝し、ヴィンセントは静かに彼女を抱きしめ、己の胸で泣かせた。

「共に背負うのは主だけではないぞ？ヴァレンタイン。」

その言葉に反応したヴィンセントは、声の張本人、ザフィーラへと視線を向けた。

そこには初めて会った時の敵対心も、威圧感も無い……。柔らかな笑

みを浮かべるヴォルケンリッターがいた。

「主はやては私たちを家族と言ってくださった。」

「アタシらを家族って言ってくれた……その……はやての家族なら、一緒に背負うのが筋じゃねえのか？」

「それに、はやてちゃんだけに背負わせるのも心配ですし。」

「話を知った以上、傍観などできん。」

シグナムが、ヴィータが、シャマルが、ザフィーラが言葉を紡ぐ。出会ってわずか半日だが、今までの主とは全く違う、自分達を家族として接すると言ってくれたはやての意志を、ヴォルケンリッターも感じ取っていた。

だからこそ、ヴォルケンリッターの想いは決まった。

「お前の罪も悲しみも……我らヴォルケンリッターが共に背負おう。」

新たな主はやてと共に……。」

悲しき過去に生き、終わらぬ罪を背負うヴェンセントの力になろう、と……。

「ありがとう……私はまだ、はやてと……お前達と歩んでもいいのだな。」

「当たり前や。家族なんやから……。」

いつしか、はやては嬉し涙を流し、ヴォルケンリッターも暖かくそれを見守っていた。

はやては笑顔を浮かべ、涙を流しながらも言葉を紡いだ。

「みんな、ずーっと一緒や。悲しいことも、嬉しいことも……。だから、みんなで生きていこ。」

「ありがとう。」

その言葉と共に、ヴィンセントの目から一筋の涙が流れた。

共に歩むは一人の少女と彼女に仕える騎士達……。

道は果てしなく、そして険しい。

それでも、共に進んでくれる者達がいる……受け入れてくれる家族がいる。

だからこそ

（私が護ろう。はやても……彼女達も……。）

ヴィンセントは静かに、そして新たなる決意を胸に抱いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6768p/>

---

魔法少女リリカルなのはA's ~ 混沌を身に宿す者 ~

2011年5月31日21時08分発行